

四大魔王より上がった

てこの原理こそ最強

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現四代魔王よりも強いと言われる悪魔が自分の眷属たちと駒王町で生活する話。処女作なので文章とか構成とか下手くそです。自分が好きなキャラが眷属になってます。タグは増えるかも。原作はできただけ崩壊しないよう頑張ろうと思ってます。

目次

キャラ紹介その1	1
キャラ紹介その2	7
旧校舎のディアボロス	
第1話	13
第2話	16
第3話	21
第4話	24
第5話	28
第6話	32
第7話	36
第8話	39
第9話	43
第10話	46
戦闘校舎のフェニックス	
第11話	50
第12話	56
第13話	64
第14話	68
第15話	73
第16話	77
月光校庭のエクスカリバー	
第17話	82
第18話	86

第40話

第39話

第38話

第37話

第36話

第35話

放課後のラグナロク

第34話

第33話

第32話

第31話

冥界合宿のヘルキャット

第30話

第29話

第28話

第27話

第26話

第25話

停止教室もヴァンパイア

第24話

第23話

第22話

第21話

第20話

第19話

250

243

234

225

216

208

199

191

183

175

167

159

151

145

134

128

123

116

111

104

97

92

第 4 2 話
第 4 1 話

267 259

キャラ紹介その1

・主人公

名前：神崎 蓮夜 「王」

容姿：短髪の黒髪でめちやくちや立っている

顔は上の上で10人中10人が振り向くようなイケメン

体格は細くもなく太くもない、謂わば細マッチョ

性別：男

身長：192cm

趣味：昼寝、散歩

好きなもの：自分の眷属たち、納豆

嫌いなもの：自分の眷属たちを馬鹿にするものや危険に陥れようとするもの

駒王学園に通う高校2年生。しかし本当は4大魔王よりも強いと言われている悪魔。

駒王町には高校に入る前に来ており、趣味が散歩ということもあって町のことなら大抵わかる

自分のことを言われるときは冷静だが、眷属のみんなや友達のことを悪く言われたりするとすぐに頭に血がのぼる

しかし自分より眷属のことを考えるため信頼性は高い

眷属のみんなからの好意には気づいているがところどころ鈍感

能力：ワンパンマンのサイタマほどの身体能力

ストライク・ザ・ブラッドの暁古城が所有する12体の眷獣（既に全て使用可能）

・蓮夜の眷属

名前：タツマキ 「女王」（ワンパンマン）

二つ名：【戦慄のタツマキ】

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：強い者と戦うこと

好きなもの：蓮夜、眷属のみんな

嫌いなもの：蓮夜を傷つける者（そんないない）、お子様呼ばわりされること

駒王学園に通う高校3年生。蓮夜の眷属の女王。妹が1人いる

親は早くに他界。養父母の下で妹と暮らしていたが、学校では自分たちの能力でバケモノと嫌われてそれのある日金に目が眩んだ養父母にある実験室に売り飛ばされる。そこから助けてくれたのが蓮夜であり、それ以降彼の女王として生きてきた

性格はツンツンしていて短気。しかし、蓮夜に対してのそれはただの照れ隠しと眷属のみんなのものバレている。蓮夜には明らかな好意を抱いている

能力：原作と同じ

名前：紺野木綿季（ユウキ） 「騎士」（ソードアートオンライン）

二つ名：【剣聖】

容姿：原作のALO内での耳を人間のにしたバージョン

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：蓮夜と一緒に寝ること

好きなもの：蓮夜、眷属のみんな

嫌いなもの：蓮夜を傷つける者、おばけ、ホラー

駒王学園に通う高校1年生。蓮夜の眷属の騎士の1人。姉が1人いる

昔難病にかかっていたユウキは病院で寝たきりだった。その病気を治すには多額のお金が必要で、とても払える額ではなかった

しかしそんなときに現れたのが蓮夜であり、悪魔になれば病気は治ると言われ悪魔に転生。その後親と姉に事情を話し正式に蓮夜の眷属となった。今やユウキは騎士の中では知らない者はいないとまで言われる騎士となった

蓮夜には明らかな好意を抱いている

能力：【ソードスキル】

名前：姫柊雪菜 「騎士」（ストライク・ザ・ブラッド）

二つ名：【劍巫】

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：人形集め

好きなもの：蓮夜、眷属のみんな、かわいい人形

嫌いなもの：蓮夜を傷つける者、変態

生まれてすぐの頃に産みの親から捨てられた雪菜はとある機関に引き取られる

その機関で対悪魔、対天使、対墮天使戦闘の訓練を受けて育ってきた

そんなある日蓮夜の監視の任を任せられ蓮夜のもとへきたのだった。しかしそのうち彼の信念や行動に惹かれて彼の側にいたいという気持ちになり、彼の眷属となった

何事にもきつちりとした性格をしているため蓮夜や十六夜、黒歌はよく怒られている

昔蓮夜にもらった人形をまだ大切に持っているなどある。蓮夜には明らかかな好意を抱いている

所有武器：【七式突撃降魔機槍】「シユネーヴァルツァ」

能力：魔力、光の力の無力化

名前：逆廻十六夜 「戦車」（問題児達が異世界から来るようですよ？）

二つ名：【アンノウン】

容姿：原作と同じ

性別：男

身長：原作と同じ

趣味：強いやつと戦うこと

好きなもの：戦闘

嫌いなもの：特になし

駒王学園に通う高校2年生。蓮夜の眷属の戦車の1人

昔から並外れた身体能力を持っていたため自分の人生がつまらなかつた

そんなある日強いやつがいるということを知る。それが蓮夜だった

十六夜は勝った方は負けた方の言うことをなんでも一つ聞くとい条件で戦い負けてしまった

蓮夜は自分の眷属にならないかと言ってきて、十六夜は「それは楽しいか？」そ聞いたところ、蓮夜は「ああ」と言ったので眷属に

戦闘では真っ先に先陣を切るが意外と知能派でいろんなことを知っている

能力：特になし

名前：司波達也 「戦車」 （魔法科高校の劣等生）

二つ名：【摩醯首羅】

容姿：原作と同じ

性別：男

身長：原作と同じ

趣味：鍛錬

好きなもの：深雪

嫌いなもの：深雪の害になるもの

駒王学園に通う高校2年生。蓮夜の眷属の戦車の1人。深雪の兄

達也と深雪の家柄は代々魔法を使う家系である。しかし彼は二つの魔法を持つせいで魔法師としての才能がなかった。それを治すため精神改造手術をして魔力を操る力を得たが一般の人より劣っていた。またその手術のせいであらゆる感情が失われてしまったが、妹を愛する気持ちだけは失わなかつた。そのため重度のブラコンである。

ある時達也は一族に反抗し深雪と共に逃げ出し、ある森を徘徊しているところを蓮夜に助けられる。事情を話すと蓮夜は「自分の家族に

なつてくれ」と言ってきた。最初は警戒したものの深雪が彼に心を許したのをきっかけに2人揃って眷属となった

所有武器：シルバートーラス二丁

大型魔法銃一丁

能力：【分解】あらゆるものを分解する

【再生】24時間以内ならあらゆるものを再生する

【精霊の目】「エレメンタルサイト」 周囲

の魔力、光の力を見通す。よつてなんの技を出すかわかる

【フラッシュキャスト】 瞬間記憶能力

【仮想演算領域】脳内に仮想世界を作り出し、

無限大の情報を入れることができる

名前：司波深雪 「僧侶」 (魔法科高校の劣等生)

二つ名：なし

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：料理

好きなもの：蓮夜、達也

嫌いなもの：蓮夜と達也を馬鹿にするもの

駒王学園に通う高校2年生。蓮夜の眷属の僧侶の1人。達也の妹

達也と同じく魔法師。深雪は並外れた魔力量を持ち次期当主候補となっている

蓮夜との出会いは達也と一緒に。達也と同じく最初は蓮夜を警戒していたものの、そのうち心を許すようになった。

重度のブラコンであるが、蓮夜にも明らかな好意を抱いている。

所有武器：携帯型魔法デバイス

能力：魔法

名前：黒歌

全て原作と同じ

蓮夜の眷属の僧侶の1人

蓮夜にはぐれ悪魔としての記録を消去してもらおう

蓮夜に明らかかな好意を抱いている

キャラ紹介その2

名前：クロメ 「兵士」 (アカメが斬る)

二つ名：【死者軍団】

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：お菓子を食べることに、蓮夜と寝ること

好きなもの：蓮夜、眷属のみんな、お菓子

嫌いなもの：蓮夜を馬鹿にする者

駒王学園に通う高校1年生。蓮夜の眷属の兵士の1人。姉が1人いる

姉と共に養成機関で暗殺者として育てられた。途中で姉と離れ離れにされてクロメは大量の薬物を投与された

そんな生活から助けてくれたのが蓮夜だった。また蓮夜のおかげで姉とも再会することができた。

暗殺や情報収集は眷属の中で最もうまい。

蓮夜には明らかな好意を抱いている。

所有武器：【死者行軍・八房】

能力：死体を最大8体まで操ることができる

ティナ スプラウト 「兵士」 (ブラック・ブレット)

二つ名：【呪われた子供】

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：ピザ作り

好きなこと：蓮夜、眷属のみんな

嫌いなもの：蓮夜を馬鹿にする者、早起き

駒王学園小等部に通う小学5年生。蓮夜の眷属の兵士の1人
生まれたときからフクロウの因子を持ち、興奮すると目が赤くなる

ことから呪われた子どもとして嫌がられてきた

ある日とある研究者に人体改造手術を施され、思考駆動型インターフェイス『シエンフィールド』による超遠距離射撃能力が可能となった。またいろんな人物に雇われいろんな人物を暗殺してきた。そんなとき蓮夜を暗殺しようとしたが失敗。彼と彼の眷属との交流を経て眷属となった

彼女は夜型であり朝起きるのはまだ苦手らしい。

蓮夜には明らかな好意を抱いている

所有武器：狙撃銃、拳銃、ナイフなど

能力：思考駆動型インターフェイス『シエンフィールド』による超遠距離射撃能力

フクロウの因子による視力で暗闇でもはっきり見える

櫛名アンナ 「兵士」 (K)

二つ名：【炎帝】

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：蓮夜とお出かけ

好きなもの：蓮夜、眷属のみんな

嫌いなもの：蓮夜を馬鹿にする者

駒王学園小等部に通う小学5年生。蓮夜の眷属の兵士の1人

両親を事故で亡くし、叔母の縁で蓮夜と知り合う。昔からビー玉を使って占いをしたり、ビー玉を覗いて相手の心を見抜く力があつたせいで周りから恐れられていた。そんな生活が嫌で蓮夜と一緒にいることを決意

眷属の中でマスコットの存在でいつも真紅のゴスロリドレスを着ている。基本無口

蓮夜には明らかな好意を抱いている

能力：火、炎

名前：レム 「兵士」 (Re：ゼロから始める異世界生活)

二つ名：【青鬼】

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：料理、演劇鑑賞、詩文

好きなもの：蓮夜、姉

嫌いなもの：蓮夜と姉を馬鹿にする者

駒王学園中等部に通う中学3年生。蓮夜の眷属の兵士の1人。姉がいる

巫人の一種である「鬼」の生き残り。昔から蓮夜の家系と関係があり小さいころから蓮夜のメイドとして一緒にいる
雑務全般を一手に担っており、家の仕事の8割は彼女が行っている。

とある事情から姉に対して負い目を持っており、自己評価が極端に低い。姉への贖罪の為に生きていたが、蓮夜に救われ諭されたことで、トラウマを克服する。そのため蓮夜には明らかな好意を抱いている

所有武器：鎖付きのモーニングスター

能力：水系魔法

回復魔法

名前：ジブリール 「兵士」 (ノーゲームノーライフ)

二つ名：【天使悪魔】

容姿：原作と同じだが片方の羽が悪魔の羽

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：読書

好きなもの：蓮夜、知識

嫌いなもの：蓮夜の害となるもの

蓮夜の眷属の兵士の1人

元最上級天使の1人。ミカエルよりも権力があつたとかなかつたとか

自分が認めた相手でない限り従うことはなかったが、好奇心から蓮夜とゲームをし負けてしまった。自分より劣っていると思っていた悪魔の蓮夜の戦いぶりに感心し、彼をマスターと呼び尊敬している。天使であるのに蓮夜から無理矢理駒を奪い眷属となつた
いろいろな知識を知りたがりいろいろな本を読んでいる。

蓮夜には明らかな好意を抱いている

能力：魔法と光の力

名前：前田利家（犬千代） 「兵士」（織田信奈の野望）

二つ名：特になし

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：蓮夜と一緒にいること

好きなもの：蓮夜、眷属のみんな、羊羹

嫌いなもの：蓮夜を馬鹿にする者

駒王学園小等部に通う小学5年生。蓮夜の眷属の兵士の1人

蓮夜とは小さいころからの幼馴染。昔から彼を兄のように慕っている

無愛想ではないが本人曰く口下手で言葉数は少ない。虎の被り物にフェイスペイントと非常に傾いた格好をしているが出奔前やオフの時は普通の地味な格好になる。羊羹などの和菓子が大好き
蓮夜には明らかな好意を抱いている

所有武器：朱槍

能力：特になし

名前：シエーレ 「兵士」（アカメが斬る）

二つ名：【シリアスキラー】

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：読書

好きなもの：蓮夜、眷属のみんな、花

嫌いなもの：蓮夜の害となるもの

駒王学園に通う高校3年生。蓮夜の眷属の兵士の1人

幼少期は帝都の下町で暮らしていたが、どんな簡単な仕事でも失敗を重ねてしまうことから「頭のネジが外れている」と周囲から馬鹿にされていた。ある男がシェーレの両親を殺し、シェーレも亡き者になろうと襲撃した時も全く動揺することなく返り討ちにするなど、人を殺すことに対する抵抗が一切ない。1人で彷徨っていたところを蓮夜に保護され、それ以来一緒にいる

かなりの天然で物忘れが激しく、家事の類が壊滅的に苦手で、「すみません」が口癖。しかし、蓮夜が落ち込んだりしていると一番に気づき、慰めてくれる優しい心の持ち主。蓮夜には明らかな好意を抱いている

所有武器：〔万物両断・エクスタス〕

能力：硬さ関係なくなんでも切断する

名前：宇多良カナリア 「兵士」 （クオリディア・コード）

二つ名：特になし

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：歌うこと

好きなもの：蓮夜、眷属のみんな、笑顔

嫌いなもの：蓮夜を馬鹿にするもの、オバケ、ホラー

駒王学園に通う高校2年生。蓮夜の眷属の兵士の1人

コールドスリープというもので何十年もその歳のまま眠っていたのを蓮夜に目覚めさせられた。なぜ目覚めさせたかは不明。

誰にでも相性をつけ明るく元気な子。やると決めたら突っ走る頑張り屋。「困ったときは笑顔」が口癖

能力：【愛を唄う者ハートウォーミング】

眷属の全員の身体能力強化

回復

旧校舎のディアボロス 第1話

―とある朝―

「…」

カーテンの隙間から入る日の光で目を覚ます

(…ん？　なんか重い。それに両腕も…)

オレはそつと腕を抜きそつと布団の中を見てみると

(…そういえば夜まで話をしてたっけ…でもなんでこいつらもいるんだ…？)

オレの上には長い髪で金髪の少女と、同じく長い髪でこっちは白髪の少女が眠っていた

それと右腕にはこっちも長く紫がかった髪の少女、左腕には黒髪でショートの少女がいた

(はあ…起こさないように降ろすか)

オレに乗っかってる2人を起こさないように降ろし、静かにベッドから移動する

時計に目をやると5:30を指していた

「顔洗って朝飯の仕込みでもすつか」

(…この時間じゃあいつも起きてないだろ)

そう言っって洗面所へ向かう

16:30―

「…」

ある青髪の少女はいつも通り目が覚める

少女はベッドから起き上がり洗面所へ向かう途中ふと気づく

「誰でしょう？　…こんな朝早く」

いつもは電気の付いていないキッチンに明かりが付いている
ドアを少し開け覗いてみると

「っ！／／／」

少女は突然頬を赤くする　それもそのはず
好意を向けている人の凛々しい姿が見れたのだから
少女は心を落ち着かせ平然を装いキッチンへ入っていく

「おはようございます」

「ん？レムか　おはよう」

レム「珍しいですね　こんな早く起きてるなんて」

「なんか目が覚めちまってな…　でも久々にレムのパジャマ姿が見
れたからよしとする！」

レム「な！なに言ってるんですか！／／／」

「あははは！　レムはかわいいな（ニコツ）」

レム「!!!／／／　からかわないでください！／／／」

「ほら　早く着替えてきな」

レム「わかりました」

レムが戻つてくると一緒に朝飯を作ることにした

「こうやって一緒にキッチン立つのも久しぶりだな」

レム「そうですね　いつもの誰かさんはまだ寝ていますからね（フ
フツ）」

「面目無い」

レム「大丈夫ですよ」

レムと他愛もない話をしながら朝飯を作っていると二階から誰か
が降りてきた

「おう！　達也！　おはよう」

レム「おはようございます」

そこにはジャージ姿の男性が立っていた

達也 「二人ともおはよう。○○○が起きてるなんて珍しいな」
「ほつとけ。これからいつもの鍛錬か？」

達也 「あー」

「了解」

レム 「行つてらっしゃいませ」

達也 「行つてくる」

達也はそういうと玄関から出て行つた

「じゃあ続きするか」

レム 「はい」

そのまま続きに取り掛かる

17:30

レム 「○○○くん そろそろじゃないですか」

「ん？ もうこんな時間か。レム あと頼めるか？」

レム 「大丈夫ですよ」

オレは残りの支度をレムに頼み、他の同居人を起こしに向かう

第2話

同居人はオレを合わせて17人。一階と二階にそれぞれ部屋がある
（上から行くか）

「そう思い階段を上がり、一番奥の部屋へ行きノックする

コンコン

「おーい 十六夜 そろそろ起きろ?」

「そう言うど部屋の中から

十六夜「:わかった」

と返事があったため次へ移動する

十六夜の隣は達也の部屋だからスルー

奥から三番目の部屋をノックする

「おーい 深雪ー 起きてるか?」

「そう声をかけると

ガチャ

ドアが静かに開き、そこには純白の肌に綺麗な長い黒髪が際立つ少女が立っていた

深雪「おはようございます」

「おはよう 達也はもう戻って来てるぞ 多分シャワーじゃねえかな。」

深雪「フフツ お兄様ったら」

「あいつは本当にすげーよ あつ!深雪 わりーんだけどこの階のやつら起こしてもらっていいか?」

深雪「はい わかりました」

「すまんな 助かる」

深雪「いえいえ」

「じゃあよろしくな」

この階の残りを深雪に頼んで、オレは階段を降りて一番奥へ行く

コンコン

「タツマキー タツマキー タツマキちゃくん」

バタン

タツマキ「うっさいわよ！ 一回呼べばわかるわよ！」
相変わらずタツマキはツンツンしてる

「あーはいはい そうだな 早くリビング行けよー」
タツマキ「なによー！」

軽く流して会話する。これがタツマキとのコミュニケーションの
コツ

それで次とそのまた次の部屋には誰もいない
なんでかって？ オレの部屋で寝てたから。本当いつもいつきてん
だよ

そんなことを思いながら自分の部屋に入る

「お前から起きろー 朝だぞー」

「「zzzz……」」

全然起きる気配がない

(はぁ…)

一人ずつ起こすことにした

「ほらティナ 起きな」

「ん……ふぁー… あ、お兄さん… おはようございます…」

「はい おはよう 顔洗ってきな」

金髪の少女ティナはまだ眠そうに少しフラフラして部屋を出て行
く

「ほら アンナ 起きろー」

「:○○○ おはよう」

「おはよう 朝飯遅れるぞ？」

アンナ「ー行く」

「オレはこいつら起こしてから行くから、先行きな」

アンナ「わかった」

アンナは小走りで出て行った

(あとはこいつらか)

残った二人はこの家で朝起きない二人なのだ

「ユウキ！クロメ！起きなさいー！」

「zzzz…」

「起きないと遊んでやらんぞ」

そう言うのと黒髪ショートの方の体がビクツとなった

「クロメの方は起きてんだろ 本当に遊んでやんないからな」
そう言うのとクロメはむくつと起きた

クロメ「やだー」

「なら早よ行け」

クロメ「はーい」

クロメも出て行つた

(あとはユウキ)

オレはユウキの体を揺らした

「ユウキ！」

ユウキ「ん…ふえ？○○○？ どうしたの？」

「どうしたのじゃねえよ 朝だよ」

ユウキ「朝…朝ごはん」

ユウキは起き上がり目をこする

(他はみんな起きてんだろ)

「できてるから行くぞ」

ユウキ「はあい」

やっと起きたユウキとリビングへ向かう

リビングには既にオレとユウキ以外が揃っていた

ユウキ「みんなごめんね」

ユウキは申し訳なさそうに謝る

クロメ「ユウキ遅いよ」

「クロメ お前も人のこと言えんだろうが」

とりあえずオレもユウキも席につく

「みんないいか？ それじゃ いただきます」

一同『いただきます！』

みんなは一斉に食べ始める

「レム 残りのごとありがとな」

レム「大丈夫です。これがレムの仕事なので」

「なにになに〜? どういうこと?」

金髪で少し天然そうなやつが話しかけてくる

「今日はたまたま早く目が覚めてな。途中までレムと一緒に作ってたんだ」

「そーなんだ! じゃあ今日の朝ごはんはレムちゃんと○○○くんの愛の共同料理なんだね!」

レム「か、カナリアさん! な、なに言ってるんですか! / / /」

レムは恥ずかしいのか顔を赤くする

「そうだとカナリア。変なこと言うな」

カナリア「でも嫌じゃなかったでしょ?」

「そりゃあな。レムのパジャマ姿見れたし」

レム「○○○くん! / / /」

カナリア「へ〜! 可愛かった?」

「もちのろん」 b

レム「つ〜 / / /」

レムは耳まで赤くなった

ユウキ「レムりん顔真っ赤ー!」

「もう! みなさん! あんまりレムさんをからかわないでください!」

レム「雪菜さん!」

黒髪で中学の制服を着ている雪菜がレムを慰める

「あー 悪い ふざけすぎた」

カナリア「レムちゃんごめんね〜」

雪菜「まったくもう!」

雪菜に怒られてしまつて反省し、食事に戻ろうとすると隣に座っているアンナがオレの膝の上に移動して来た

「アンナ? なにしてる?」

アンナ「○○○の膝の上に乗ってる」

「それはわかる。なんで乗る?」

アンナ「なんとなく」

「さようか」

アンナはそんなに気持ちを表情に出さない
だから時たまなにを考えてるかわからなくなる

「そういえばアンナはなんでオレの部屋で寝てたんだ？ユウキとクロ
メもだが」

アンナ「テイナとの話し声が聞こえた。テイナだけズルい」

テイナ「私はただお話ししてただけですよ！」

アンナ「でも一緒に寝てた」

テイナ「…そうですけど」

「テイナそれどういうこと…？」

「犬千代？」

犬千代「○○○は黙ってる」

「…わかった」

犬千代「テイナ…あとでお話しよう」

テイナ「…はい」

「でユウキとクロメは？」

「一緒に寝たかった？」

「はあ…それはいいがちゃんと一言言え」

「はい」

こんな話をしながら朝飯を食べ終える

第3話

『ごちそうさまでした!』

「よし!着替えてないやつは着替えてこい 他はまあ時間までゆつくりしとけ」

『はーい(ああ)』

朝食を食べ終え自分たちの制服に着替えるため各々自分の部屋へ戻って行った

オレは朝食の後片付けをするためにキッチンに入る

「マスター お手伝いいたします」

「ありがとうジブリール」

いつも通りジブリールが手伝ってくれる ジブリールは既に家事の大半をこなせる

「おら!黒歌も手伝え!」

黒歌「えー!めんどくさいにや〜」

「じゃあお前一ヶ月一緒に寝るの禁止な」

黒歌「ぜひお手伝いするにや!」

「よろしい」

黒歌は渋々キッチンにくる

ジブリール「マスター そんな駄猫の手伝いなど必要ありませんよ」

黒歌「屑鳥の言うことは理解できないにや」

バチバチ

2人は睨み合っている

この2人は会った時からウマが合わないんだな なんでこんな仲悪いかなー

バシッ

睨み合ってる2人にチョップする

「イタツ!」

「ほら 睨み合っていないで早く終わらすぞ」

ジブリール「はいマスター」黒歌「わかったにや」
まだ納得できてない表情をするが2人とも手際よくやってくれる
途中からレムも手伝ってくれたおかげでいつもより早く終わるこ
とができた

後片付けを終えてオレは今仏壇の前で手を合わせている

そこには若くまだ30代の男女がのっている写真があった

「父さん母さんこの町に来てもう1年経ったよ」

オレの両親とはある事故で亡くなった…と聞かされている…実の
ところオレはそのころ小さかったからよく覚えてない…親戚の人か
ら事故だと聞かされただけで本当のところはわからない…

「昔は父さんも母さんもいなくてすごく寂しかったけど、今はこんな
にも家族が増えたよ だから全然寂しくねえ 心配しないで見守っ
てくれ」

そんなことを報告し終えるころ

『蓮夜(さん)(くん)！』

玄関の方でみんなが呼んでいる

「じゃあ行って来ます」

写真に向かってそう言うともみんなのもとへ行く

今日は新学期初登校ということもあって今日は生徒会も委員会も
休みなため久々にみんなで登校だ

ちなみにジブリールと黒歌は留守番だ 大丈夫か？

「蓮夜？どうしました？」

かおに出たか長く紫の髪にメガネをかけている少女が話しかけ
てきた

彼女はシエーレ THE天然メガネドジっ娘だ

蓮夜「ああ 留守番組がケンカしないか心配だな」

シエーレ「大丈夫ですよ そんなことすればあとでどうなるか2人
ともわかってますから(フフツ)」

シエーレは笑顔でそう言ってきた

蓮夜「それもそっか」

オレは納得した

シエーレ「ところでー」

シエーレ突然聞いてきた

蓮夜「ん？」

シエーレ「なんでティナちゃんとアンナちゃんは蓮夜と手を繋いでいるのですか？」

そう 家を出てすぐ右がティナ、左がアンナと手を繋いでいるのですか

小学生の2人はたまにだがこのように手を繋いでくる

ティナ「まだ朝に慣れてなくて、フラフラするので」

アンナ「いつものこと」

ティナは少し下を向いて答える

アンナはいつも通り表情を変えずに答える

女性陣からの視線が怖い なぜだ!?

達也、十六夜（こいつわかってないな）

蓮夜「まあまあシエーレ落ち着け」

シエーレを宥めつつ学校へ歩みを進める

第4話

学校に近づくにつれてオレ達に視線が集まる

蓮夜（まあこいつらがいるから当然か）

オレの周りにいるやつらは学校では人気者なのだ

学園の二大お姉さまは三年のリアス・グレモリーと姫島朱乃

学園の五大マスコットはユウキとクロメ、犬千代と一年生のしろ：

塔城子猫。それになぜかタツマキ（本人は嫌がっている）

学園の三大イケメンはオレと達也、それと同じ二年生の木場祐斗

学園の二大お兄様はオレと達也

学園の二大清楚お嬢様は深雪と雪菜

シエーレは美人天然ドジっ娘

カナリアは元気ハツラツお姉さん

十六夜は学園のヤンキー

学園美少女妹はアンナとティナ、それとレム

みんな何かしらで有名なんだ

校門を通ったところで

「イケメンはみんな敵だ!!」

オレと達也、十六夜に3人組のバカが襲いかかってきた

オレと達也はよけ、十六夜は回し蹴りをくらわしそいつはオレと達

也が避けたやつらの方に飛んで行った

蓮夜「朝からうるせーぞバカども」

オレらに襲いかかってきたのはこの学園の変態三馬鹿トリオの兵

藤一誠、元浜、松田だ

一誠「朝から見せつけんじゃねーリア充ども」

蓮夜「はあ…お前らオレと達也はめんどくさいから避けるからいい

かもしれないが、十六夜襲うとかマジでバカだな」

十六夜「よお前ら ちよつとあつちで遊ぼうぜ」

十六夜が肩を回しながら言う

「「すいませんでしたー!!!」」

三人は勢いよく出下座して謝った

達也「十六夜やめとけ そろそろチャイム鳴るから行くぞ」

ユウキ「先輩たち本当にバカだよね」

ユウキがバカ三人に笑顔を向けてそう言う

「「天使だー!」」

なぜか涙を流していた

ユウキ「あ、ボクは蓮夜のものだからごめんね」

ユウキはいきなりオレに抱きついてきた

その瞬間場の空気が少し寒くなったが気にしない

蓮夜「そんなにした覚えはねえぞ」(あ、でもある意味そうか)

一誠「蓮夜おのれー!」

蓮夜「うるせー」

再び襲いかかってくる一誠にゲンコツをお見舞いする

雪菜「じゃあ先輩 私たちこっちなので」

レム「またお昼に」

犬千代「犬千代たちも」

ティナ「行ってきます お兄さん」

アンナ「行ってきます」

蓮夜「ああ またあとでな」

小学生、中学生組が離れて行くと

深雪「私たちも参りましょう」

蓮夜「そだな」

高校生組も校内へ入りそれぞれ自分の教室へ向かう

ちなみに一年生組も二年生組も三年生組も一緒のクラスだ

ー時間は経ちお昼ー

蓮夜「いただきます」

『いただきますー!』

オレたちの昼は眷属のみんな屋上で食べることになっている
そしてお昼にも小学生組の誰かがあぐらをかいているオレの上に
座ってくる。今日は犬千代らしい

蓮夜「犬千代その被り物取らないか？食べずらいいいだが」

犬千代はいつもとらの被り物をしているんだが意外と大きい

犬千代「蓮夜なら大丈夫」

蓮夜「なんの根拠だよ」

深雪「なら蓮夜さん どうぞ」

深雪が箸で掴んだおかずをオレの口元へ持ってきた

オレはありがたくそれを食べた

女性陣『っ！』

蓮夜「深雪サンキュ」

深雪「いえ／＼／＼」

少し頬が赤い 深雪は肌が白いからすぐわかる

カナリア「あー！ゆっきーだけズルい！蓮ちゃんあたしのもはい

あーん！」

ユウキ「カナちゃんもズルい！ボクのも！ボクのも！」

クロメ「蓮夜 はい」

なぜか急におかずをくれ始めた みんな優しいな

達也、十六夜（…とか思ってたんだろうな）

そんな感じで楽しく(?) 昼を過ごしている

蓮夜「今日は委員会とかあるのか？」

達也「オレはあるな」

深雪「私もあります」

雪菜「私もそうですね」

シエーレ「私もあると思います」

カナリア「あたしはないよー」

それぞれ委員会に入っているものと入っていないものがある

そのほとんどが半ば無理矢理入らされたのだが

達也は風紀委員、深雪は生徒会、雪菜は中学の風紀委員、シエーレ
は図書委員、カナリアは放送委員だ

蓮夜「オレは放課後に用事があるから　タツマキ悪いが付き合つてくれ」

タツマキ「仕方ないわね」

いつも通りツンツンしてる

蓮夜「他のみんなは先に家に帰っててくれ　夜のこととはまた話す」
みんなに言うことを話しお昼を終える

第5話

―放課後―

委員会があるやつはそっちに行き、帰るやつは帰って行った
なぜか部活動をやるやつはいなかった。そりやそうか
さてオレはタツマキをつれてある場所へきた

そこは古い校舎の一室でやっているある部の部室だ

コンコン

「…どうぞ」

蓮夜「失礼します」

タツマキ「入るわよ」

「ようこそ そっちへ座ってちょうだい 朱乃」

朱乃「はい部長」

紅い髪の部長と呼ばれたのはこの学園の二大お姉さまの1人、リア
ス・グレモリー先輩だ

またリアスに言われお茶を入れてくれているのは二大お姉さまの
もう1人、姫島朱乃先輩だ

朱乃「どうぞ」

蓮夜「ありがとうございます」

タツマキ「相変わらず変な部屋ねここ」

リアス「オカルト研究部ですからね」

蓮夜「あんま時間ないから本題話しますね 最近この辺を墮天使が
うろろろしてるみたいです」

リアス「そのようね とうかその敬語やめてもらえないかしら
変な感じだわ」

蓮夜「じゃあそうするわ。んでその墮天使の討伐だがオレ…：「嫌
よ」がや…はあ」

リアス「嫌よ この土地の所有者は私なの！なら私たちがやるわ！
あなたたちに許してるのは夜の巡回だけよ」

タツマキ「あんたホントバカね！そんなの私に任せとけばいいじや
ない！」

リアス「ダメよ！巡回以外は許さないわ！」

会話がどんどんヒートアップしていく

蓮夜「わかった。オレらはいつも通り巡回だけしとく」

タツマキ「ちよつと！」

蓮夜「いいから」

リアス「それでい：「ただし」：まだなにか？」

蓮夜「ただしなリアス もし被害者なんて出してみろ：そんなときは
…」

殺気を込めた気を放つ

蓮夜「覚悟しろよ」

リアス、朱乃「っ!!」

2人はその気を感じ取りすごい汗をかいている

蓮夜「じゃあ邪魔したな タツマキ行くぞ」

タツマキ「：わかったわよ」

オレたちは部室から出る

そのあとすぐタツマキがオレに言ってくる

タツマキ「なんで?!ここは日本神話の土地でしょ！その人たちから
許可もらってるのは蓮夜じゃない！」

蓮夜「あの我儘お嬢様はなに言っても聞かないさ」

タツマキ「だからって！」

蓮夜「わかつてる ちゃつんと動くよ じゃねえとおれが天照や伊

邪那美さんに怒られるわ：はあ オレには女難の相でもあんのか？」

タツマキ「知らないわよ！」

蓮夜「とりあえず帰るか」

放課後の予定を終えタツマキと一緒に帰宅する

―蓮夜宅―

オレとタツマキを含め委員会に所属しているやつらも帰ってきて
みんなをリビングへ集める

蓮夜「さて今日の巡回誰やるよ」

オレたちは毎日この町を巡回している

1人ではなく最低でも2人で回ってほしいと思っ
ているためいつもその日は誰が行くかこうやって
会議で決める

ちなみに深雪、アンナ、カナリア、ユウキ、
レムは巡回には参加しない

蓮夜「さて今日は誰行く？昨日は達也と黒歌と
雪菜だったから今日はオレが行くか」

クロメ「ならついてく」

ジブリール「お伴しますマスター」

ティナ「私も行けます」

犬千代「犬千代も行く」

シエーレ「私も行けますよ」

タツマキ「そんなちまちますることするわけ
ないでしょ！」

そうなぜかオレが行く日はみんな行きたがる
(タツマキと男性陣以外)

蓮夜「今日は結構広めに回りたいからな…
ティナとジブリール頼めるか？」

ティナ「もちろんです！」

ジブリール「はいマスター！」

クロメ「ぶー」ムスツ

蓮夜「まあそう膨れるな また今度な」

クロメ「…わかった」

蓮夜「じゃあ行ってくるな」

そう言っ
てオレはティナとジブリールと一緒に巡回
へ向かう

今日もいつもと同じ街並みだが何が
あるかわからない

蓮夜「ジブリールは魔力、光の力の感
知をやってくれ」

ジブリール「かしこまりました」

蓮夜「ティナはオレと目視での注意な
オレよりもティナの方が視力
いいから頼りにしてるぞ」

ティナ「がんばります！」

少し時間が経った頃

ジブリール「マスター この教会から墮天使の力を感知しました」

蓮夜「わかった ありがとう」

ジブリール「いかががいたしますか？」

蓮夜「今日のところは帰ろう それにオレらは悔しいが手出しがで

きん：ティナここをビットで監視することは可能か？」

ティナ「大丈夫です」

蓮夜「なら頼む だが無理するなよ？」

そう言いながらティナの頭を撫でる

ティナ「ありがとうございます／＼／＼」

ティナの頬が赤くなる

蓮夜「じゃあ帰るぞ」

第6話

―次の日―

昨日の夜はその後の異常はなくティナにもずっと任せるわけには
いかないので登校中は黒歌に任せた

今日も昼をみんなで屋上で食べていると猫の姿で黒歌がやってき
た

蓮夜の前まで来ると猫化をとき人間の姿になった

黒歌「蓮夜 あいつらに動きがあるにや」

蓮夜「わかった 引き続き頼む」

黒歌の報告を聞き監視の続行をお願いした。それで頭を撫でて
やった

黒歌「にや／＼／＼了解にや／＼／＼」

こんなに気持ちよさそうにされるといい気分だな

女性陣『ズルい！私にも！』

黒歌を撫でてしていると女性陣みんなから催促される

蓮夜「ほれお前らそろそろ自分の教室行け 黒歌は念のため放課後

もう一回来てくれ」

それぞれ自分の行くべきところへ向かう

―放課後―

今日は委員会に入っていないやつと帰ろうとすると
ユウキ「あれ？一誠先輩じゃない？」

校門のところに一誠がいた。しかも女の子と。だがあれは…

犬千代「蓮夜 あいつ墮天使の匂いがする」

蓮夜「やつぱりか…」

黒歌「あいつ例の教会にいた墮天使にや」

蓮夜「そりやまた…ちつイヤな予感がするな…」

そう考えていると一誠とその墮天使はわかれて一誠はそのまま帰
宅して行った

蓮夜「今日は何もないか 一先ず様子を見るか」
オレたちも今日のところは家に帰った

―また次の日―

今日はなんかクラスが騒がしい なんかあつたんか？クラスに入ると

一誠「蓮夜！聞いてくれ！」

蓮夜「ど、どうした…？」

一誠「聞いて驚け！なんとオレに彼女ができた！」

十六夜「おいおい一誠 とうとう夢と現実の区別もできなくなったのか？」

一誠「おい十六夜！夢じゃねえ！現実なんだよ！」

達也「そうか」

達也は興味がなさそうに

深雪「お、おめでとうございます…」

カナリア「お、おめでとう」

深雪とカナリアは半ば呆れて言う

蓮夜「おい一誠 そいつはどんなやつなんだ？」

一誠「聞きたいか!?なんて言うかOL系美人だ！」

蓮夜「いつ付き合い始めた？」

一誠「へ？昨日だよ」

蓮夜「どこで告白した？」

一誠「オレからじゃねえよ！向こうから告白されたんだ！」

蓮夜「どっちでもいい！どこで？」

一誠「なんだよ!?学校の校門でだよ！」

オレはそれで確信した

十六夜「おい蓮夜 そいつは…」ボソボソ

蓮夜「ああ間違いない」

十六夜「そうか」

達也「どういうことだ」

蓮夜「あとで話す」

キーンコーンカーンコーン

―昼―

達也「なるほど…今一誠と付き合ってるのが墮天使というわけか」

蓮夜「ああ」

雪菜「なら兵藤先輩危ないんじゃないでしょうか？」

蓮夜「無論警戒はする」

タツマキ「墮天使だってわかってるならやっちゃえばいいじゃないか」

蓮夜「まだそいつが危険なのかわかってないのにそんなことできるか」

シエーレ「ならつけますか？」

蓮夜「それが一番だろうな オレは放課後にリアスにこのことを報告してくる」

事情を知らないやつらにこのことを教え今日の昼は解散となった

―放課後―

オレはリアスに報告すべくオカルト研究部の部室を訪ねる

蓮夜「リアス オレだ」

リアス「入っていいわよ」

蓮夜「失礼する ん？今日は全員いるんだな」

そこにはこの前はいなかった部員の残りの塔城小猫と木場祐斗がいた

蓮夜「まあいい 墮天使が動いたぞ この学園の二年にいる兵藤一誠ってやつに接触している。それに教会でなにやら企んでいるようだ」

オレは自分の持つ情報を話した

リアス「報告感謝するわ あとには私たちの仕事よ」

蓮夜「この前言ったこと忘れんなよ？」

リアス「わ、わかつてるわよ…」

リアスはあのときを思い出したにかまた汗をかいた

蓮夜「ならいい…じゃあな」

オレは不安を抱えながら部室をあとにする

第7話

―休日―

いきなり時間が飛んだかと思うが気にしないでほしい
さてリアスのことを信用していかないわけじゃないが心配なので、オレたちは交代で見張ることにした

昨日の夜一誠からメールがあり今日例の墮天使とデートをする
ことになっているらしい

よって今オレとユウキ、レムの3人で尾行を行なっている…はずな
んだがユウキとレムは朝からめちやくちや楽しそうなんだが

蓮夜「ユウキ、レム これは尾行なんだよな？」

レム「そうですよ♪」

ユウキ「蓮夜何言ってるの♪」

蓮夜「なら腕組む必要はないんじゃないか…？」

レム「ダメですよ♪」

ユウキ「そうそう♪バレないようにするためだよ♪」

なぜかルルンルン気分の2人を連れて尾行を続ける

時は過ぎ夕方

昼間のデートは順調に進んでいた

商店街から離れある公園に2人は入って行った

オレの勘が危険警報を鳴らしていたため木の陰から見ていると墮
天使が正体を現した

墮天使「ねえ一誠くん」

一誠「なんだい？夕麻ちゃん？」

墮天使「死んでくれないかな」

一誠「えっ…ごめん…もう一回言ってくれないかな…」

墮天使「死んでくれないかな」

そう言って墮天使は光の槍を一誠に投げようとする

蓮夜「ユウキ！」

ユウキ「うん！」

オレが言いたいことを理解したのかユウキはすごいスピードで駆け出した。そして光の槍を弾く

墮天使「誰!？」

一誠「…ユウキ…ちゃん…?」

ユウキ「先輩はそこにいてね」

ユウキは墮天使を睨む

墮天使「何者なの!?!あなた！」

墮天使が驚いているところにオレとレムも出て行く

蓮夜「ようクソカラス お前こんなどこ何をしよってんだ?」

墮天使「クソ…この高貴なる存在の私をクソカラスと…なんて無礼な!死になさい！」

墮天使はオレが言ったことにキレたのか光の矢を投げてきた

オレはそれを掴み握り潰す

墮天使「なっ！」

蓮夜「この程度か」

オレは墮天使に反撃しようとする

「そこまでよ」

リアスが飛んできた

リアス「私はリアス・グレモリー 私の土地で何をしているのかしら」

墮天使「…グレモリー家の者か…ここは退かせてもらおうわ」

ここでやってしまってもよかったが一誠いるため見逃した

一誠「…リアス…先輩…? え…その羽…」

蓮夜「一誠…そのことも含めて明日説明する。だから今日は帰れ。

ユウキ、レム送ってやってくれ」

ユウキ「わかった」

レム「わかりました」

2人に一誠ことを頼み

蓮夜「おいリアス」

怒りと殺気の気を放ちながら言う

リアス「っ！」

蓮夜「オレは言ったはずだぞ…覚悟しとけって…お前はさっきまで何をしていた 一誠が襲われそうになっているのに傍観しているだけだったな…」

オレは気を少し強くして続ける

蓮夜「何を企んでいる…まさかと思うが自分の眷属にするために…とかじゃないだろうな」

リアス「っ!!!」

明らかに動揺したのを見てさらに殺気を出す

蓮夜「お前いい加減にしろよ…いくらお前の兄が”魔王”だからってそんなことしてみろ…オレがお前を殺す」

リアスはオレが放つ殺気に耐えられなくなったのかその場にへたりこんだ

オレは殺気を出すのをやめ

蓮夜「明日放課後一誠に説明する。お前が使いを出せ」

オレはそう言い残り転移魔法で家に転移した

第8話

―次の日の放課後―

前日の騒動から一日が経ちオレは今オカルト研究部に来ている。昼間一誠は元浜と松田にあの堕天使のことを聞いていたみたいだが2人とも覚えていないようだった。当然だな。

今祐斗が一誠を呼びに行ってるらしい。

いつも思うが朱乃のお茶はなんでこんな美味しいんだろ……レムのも美味しいがな

リアスはというとなぜかシャワーを浴びている……てかなんで部屋にシャワーがあるんだよ。そんなことを思っていると祐斗が一誠を連れてきた

祐斗「失礼します部長」

一誠「し、失礼します」

蓮夜「よう一誠。祐斗も」

オレは一応あいさつする……が、一誠は入って来るやいなやシャワールームに釘付けになっている

蓮夜（まったくこいつわ）

小猫「いやらしい顔」

と小猫がつぶやく

一誠「うおー！こつちには学園の五大マスコットの1人である塔城小猫ちゃん！」

と聞くと小猫が一誠の腹にパンチを入れる

一誠「ぐはっ！なんで……？」

リアス「ごめんなさいね 昨日お風呂に入れなかったから」

蓮夜「いいから早く着替えろ」

リアス「わ、わかったわ……」

数分後

朱乃「粗茶ですが」

一誠「ウオー！こっちはリアス先輩と並ぶ学園の二大お姉さまの1人である姫島朱乃先輩！」

リアス「お待たせしたわね、私たちオカルト研究部はあなたのことを歓迎するわ」

一誠「はあ…」

リアス「でもオカルト研究部とは仮の姿なの」

一誠「は？それはどういう」

リアス「単刀直入に言うわ…私たちは”悪魔”なの」

一誠「…はい？」

リアス「そしてあなたを襲った天野夕麻」

一誠「っ！やめてください…その話を今するのは…その…不愉快なんで」

リアス「天野夕麻は実現していたわ」

一誠「…じゃあ本当にオレは襲われたんですか…」

リアス「そうよ、兵藤一誠君。イツセーって呼ばしてもらうわね」

蓮夜「一誠、残念だが事実だ」

一誠「ていうか蓮夜もあそこにいたってことは…」

蓮夜「ああ…オレも悪魔だ」

一誠「そうか…」

蓮夜「それでだ一誠 お前はこれから生きるのに二つの選択肢がある 一つ、オレらの記憶をなくして今まで通り生活すること。もう一つは…」

リアス「私の眷属になって悪魔として生きることよ」

一誠はリアスのその言葉にめちやくちや驚いている

オレは一誠が来る前にリアスと話していた。どうやらリアスは一誠が持つ”神器”に目をつけたらしい

リアス「あなたには神器が眠っているわ」

一誠「神器ってなんですか？」

くリアス、一誠に神器を説明中く

リアス「……というものよ」

一誠「なんかすごいんですね」

リアス「それに頑張れば自分だけの眷属を持つことができるし重婚もできる。あなたのハーレム王という夢も叶うわ」

一誠「マジか蓮夜！」

蓮夜「ああ〜一応事実だ」

一誠「ぜひ眷属にしてください!!」

単純だなこいつ

一誠の決断にリアスは自分の駒をかぎす。しかし一つでは転生できず八つでようやく転生できた。一誠の神器はそうとうなものらしい

一誠「ん？　そういえば蓮夜にも眷属がいるのか？」

蓮夜「ああ　紹介しようと思ってたんだ、みんな…」

オレがそうつぶやいた瞬間オレの背後に魔法陣が出てきたみんなが姿を現した

蓮夜「ここにいるみんながオレの眷属であり家族だ」

一誠「な、なんだってー!!小猫ちゃん以外の残りの学園の五大マスコット、ユウキちゃん、クロメちゃん、犬千代ちゃん、タツマキ先輩がお前の眷属だとー!!」

ユウキ「あ、先輩悪魔になったんだー　よろしく♪」

満面の笑みであいさつするユウキ

クロメ「まあ頑張れば」

全く興味なさそうなクロメ

犬千代「小猫それちょうだい」

そんなことより小猫が食べてるお菓子に食いつく犬千代

タツマキ「マスコットじゃないわよ!」

ツンツンしているタツマキ

一誠「それに学園の二大お嬢様の深雪ちゃんと雪菜ちゃんまで!!!」
深雪「こんにちわ兵藤くん」

礼儀よくあいさつする深雪。達也そんな睨むな

雪菜「どうもです兵藤先輩」

こつちも礼儀正しくあいさつする雪菜

一誠「こつちは美人天然ドジっ娘のシエーレ先輩!!!」

シエーレ「初めまして」

お辞儀してあいさつするがメガネを落とす。さすがドジっ娘

一誠「そして我らが元氣ハツラツお姉さんのカナリアちゃんも!!!」

カナリア「ヤッホー兵藤くん」

気軽に言うカナリア

一誠「そんで学園の美少女妹のアンナちゃん、ティナちゃん、レムちゃんだとー!!!」

アンナ「」

無言でオレの背後に隠れるアンナ

ティナ「よ、よろしくお願いします…」

こつちもまたオレの背後に隠れるティナ

レム「よろしくお願いします」

行儀よくお辞儀するレム

一誠「それによく知らないが美女2人!!!と達也と十六夜か…」

黒歌「白音く!」

小猫「姉様!」

小猫に飛びつく黒歌

小猫も嬉しそう

ジブリール「私はジブリールと申します、以後お見知り置きを」

自己紹介するジブリール

達也「よろしくな」

深雪のことで少し睨む達也

十六夜「へえ」

一誠の神器に気づいたのか嫌な笑いをする十六夜

一誠「なんて羨ましいんだ!!!」

一誠は今日一番の大声を出した

第9話

ー次の日ー

所変わって廃工場

オレは今日犬千代とタツマキと一緒に巡回していたところ
廃工場から悪魔の気配を感じた

犬千代「蓮夜 悪魔の匂い、しかもはぐれだと思う」

蓮夜「わかった、行こう」

タツマキ「仕方ないわねー」

蓮夜「いいから行くぞ」

タツマキ「何よ！ぷいっ」

自分でぷいって言っちゃってるよこの子

オレたちは廃工場の中へ入る

すると中から声がする

「美味しそうな匂いがある 甘いのかな？ 苦いのかな？」

蓮夜「はぐれ悪魔の…えつと…：…バインダーだっけ？」

犬千代「バイザー」

蓮夜「そうだっけ？」

タツマキ「どっちでもいいわよ！もうやっちゃっていいんでしょ？」

蓮夜「ならタツマキ頼む、犬千代もそれでいいか？」

犬千代「それでいい」

戦闘の方はタツマキに任せオレはその辺に座り、犬千代はオレの膝の上に座る

タツマキ「一瞬で片付けてやるわよ」

バイザー「黙れ小娘！お前を真っ赤に染めてやるわ」

タツマキ「誰が小娘よ！」

そこで怒るのかよ

バイザーはタツマキめがけて突進しようとしたができなかった

なぜならタツマキが能力で持ち上げた瓦礫の数々が自分に向かって落ちてきたからだ

バイザー「ぎやあああああ!!」

あつけなく終わったな

タツマキは手応えがなさすぎて不満気に戻ってきた

タツマキ「弱すぎ!もつと強いやついないの!」

蓮夜「いやいや:お前に勝てんのなんてそういないから」

犬千代「蓮夜は勝てる」

蓮夜「まだまだ負ける気はないな」

そんな他愛もない話をしていると

「はぐれ悪魔のバイザー、あなたを滅ぼしに……つてあら?」

リアスが自分の眷属を連れてやってきた

一誠「あれ?蓮夜じゃないか:こんなところで何してるんだ」

蓮夜「巡回してたらはぐれ悪魔の気配を感じてな」

タツマキ「あたしが終わらしてあげたわよ!」

リアス「ふぎけないで!あなたたちにそんなこと許してないわよ!」

蓮夜「ふぎけるな?ふぎけてんのはお前だリアス、お前はこの土地の管理者と言ったな。それなのに全く管理ができていない。被害が出ていないから大丈夫だと思っていたのか?被害が出ないように動いていたのはオレたちだ:もしオレたちがいなかったら被害が出た……」

オレは殺気を放ちながら続ける

蓮夜「オレはお前を管理者と認めていない:事実ここは日本神話の領地だ。その人たちからちやんと許可は得ているのか:」

リアス「それは……」

蓮夜「取っていないだろうな」

犬千代「蓮夜は許可もらってる」

リアス「なんですって……」

蓮夜「このことを魔王に、お前の兄貴に報告しても別に構わん:オレにはどうでもいいことだ。しかしここは日本神話の方々から直々にお願いされた土地だ:そこで勝手なことするなら……」

オレはリアス達に近づきながら殺気を強くする

蓮夜「お前らも他の悪魔、堕天使、天使と同様…滅ぼすぞ……」
リアスと朱乃、祐斗は頑張つて立っているが今にも倒れそうな青い顔をしている

小猫は涙を浮かべている、一誠は吐きそうなのか口を抑えて下を向いている

蓮夜「リアス、自惚れるのも大概にしろ…」

そう言つて殺気を出すのをやめ、涙を浮かべ震えている小猫の前まで行き頭を撫でる

蓮夜「ごめんな小猫、お前まで怖がらせるつもりはなかつたんだがな…」

少し撫でていると震えも止まったので頭から手を離す

蓮夜「今起きてる堕天使騒動もおれらでやる。お前はもう何もする

な タツマキ、犬千代 帰るぞ」

オレは魔法陣を展開し家に帰る

第10話

ーとある夜ー

今日は教会で何やら企んでいる堕天使を掃討しようと思っている
今日は眷属みんなで行く。問題はないだろうし正直これぐらいの
レベルならうちの連中誰でも1人で片付けられるしな

蓮夜「みんな準備はいいか？」

オレはみんなに聞くとそれぞれ大丈夫なようだ

蓮夜「じゃあジブリール頼む」

ジブリール「はいマスター」

ジブリールに例の教会までの転移をお願いする

ジブリールはオレの眷属の中で最も魔力量が多い。よってジブ
リールにかかれば100人でも1度で転移できる。実際にしたこと
はないがな

一瞬で教会に着くとそこには小猫と祐斗そして一誠がいた

蓮夜「お前らはこんなところで何をしている？リアスの指示か？
？」

一誠「違う！これはオレの独断だ！部長は関係ねえ！」

蓮夜「そうか、まあ何でもいいが前言った通り邪魔するな」

一誠「蓮夜頼む！オレも連れていってくれ！アーシアを助けたい
！」

蓮夜「アーシア？誰だ？」

一誠「心優しい聖女さんだ」

蓮夜「聖女？この前十六夜が言ってたやつか？」

ちよつと遡ったある日、十六夜からとあるいえではぐれ悪魔祓いと
会ったときに一緒に聖女もいたと報告があった

十六夜「あああのときのやつか」

「おやおやまた会いましたねこの前の悪魔くん！」

一誠「お前はこの間の！アーシアはどこだ！」

蓮夜「さつき言ってたはぐれ悪魔祓いか？」

十六夜「ああ」

「初めまして悪魔の皆さん、オレh…「ああそういうのいいや」…あ？」
蓮夜「十六夜よろしく」

十六夜「マジかよ」

「まったく悪魔はうざいですねえ」

十六夜「いいからやるなら早くかかってこい」

「はあ？あんたからやってやりますよー！」

と意気込んで銃を構えたときにはもう遅かった

はぐれ悪魔祓いの腹に十六夜のパンチが炸裂、どこかへ吹っ飛んで
行ってしまった

蓮夜「相変わらず加減を知らないな」

十六夜「いいんだよ」

蓮夜「そうかよ。じゃあ達也、向こうにいる3匹よろしく」

達也「はあ：わかった、すぐ追いつく」

達也は森の方へ歩いて行った

蓮夜「じゃあオレ達も行くか、一誠お前は どうする」

一誠「行くぜ！」

蓮夜「わかった。だがオレがいいというまで何もするな、わかった
な」

一誠「わかった」

オレはみんなと墮天使の気配がする地下へ降りて行った

地下に着くとそこにはざっと200はいる墮天使の群れがあった

蓮夜「よくもまあここまで集まったな」

ジブリール「まさに烏合の集でございますね」

蓮夜「深雪頼めるか？」

深雪「わかりました」

深雪は同時に魔法を発動させその場の空気が一気に寒くなる

「うわー！何だこれは!!」

墮天使の体が足からどんどん凍っていく

これは深雪の魔法の一つ【氷炎地獄（インフェルノ）】本当は極寒と
灼熱を操る魔法だが今回は極寒だけを繰り出し相手を凍らしている。
全員が凍ったのを確認して

蓮夜「ジブリール」

ジブリール「はいマスター」

ジブリールはオレが言いたいことを理解し、天撃すなわち雷撃で一つ残らず木っ端微塵にした

蓮夜「深雪、ジブリールありがとう」

オレは2人の頭を撫でてあげる

深雪「いえ、滅相もございません／＼」

ジブリール「光荣です／＼」

そうこうしていると達也が追いついてきた。当然か達也には“あれ”があるからな

一誠「お前の眷属のみんなすげーんだな…」

祐斗「僕も驚いた…」

2人は微笑を浮かべている

蓮夜「一誠、この奥にいるぞ」

一誠「アーシア！」

「一誠さん！」

レイナーレ「どうしてここに!?!外のやつらは何をしている!」

蓮夜「そいつらならオレらがやっちまった」

レイナーレ「なんですって!?!まあいいわ あとはこの子から神器を抜き取るだけ」

蓮夜「ティナ」

ティナ「はい!」

ティナはレイナーレの翼を撃ち抜いた

レイナーレ「ぎゃああああああ!!!」

蓮夜「一誠行け」

一誠「アーシアに手を出すな!」

一誠は左腕に神器を召喚しそれでレイナーレを殴り飛ばした。あれは…やっぱりか…

一誠「アーシア!」

アーシア「一誠さん!」

一誠「よかった」

蓮夜「さてクソ墮天使なんか消える前に言い残すことはあるかい？」

レイナーレ「助けて一誠くん！私はあなたを本当に愛していたわ！」

一誠「もういい、蓮夜終わらせてくれ…」

蓮夜「あいよ」

達也「オレがやるか？」

蓮夜「いやいい、これはオレのけじめだ」

我、神崎蓮夜が汝の枷を解き放つ。来い！五番目の眷獣、【獅子の黄金（レグルス・アウルム）】！」

オレが呪文を唱えるとそこのは雷を纏った巨大な黄金の獅子がいた

レイナーレ「その力は…！」

蓮夜「やってくれ」

レイナーレに向かって獅子は突進し跡形もなく終わった

戦闘校舎のフェニックス 第11話

墮天使騒動から少したちあの聖女だったアーシアさんが悪魔として転校してきた

なぜそうなったか聞いてみたらまあ強制とか無理矢理ではなく自分から志願したというのでホツとした

もし無理矢理だったらあいつらを滅ぼしていた…

てか聖女が悪魔って…人のこと言えないか、ジブリール眷属にしちやったし……

さて今はというとタツマキと一緒に旧校舎に向かっている。なんだからアスが話したいことがあるんだと…どうせ行くところは一緒だからと一誠、祐斗、アーシアと一緒に歩いている

蓮夜「リアスに襲われた？」

タツマキ「ほんと変態ね！そんな妄想聞きたくないわよ！」

一誠「ほんとなんだよ！今思い出すとなんか深刻そうな顔してた…」

蓮夜「深刻ねー…まあリアスにもいろいろあんだろ」

部室の前に来たとき

祐斗「僕がここまで来て初めて気がつくなんて……」

祐斗の表情は強張っていた

蓮夜「まだまだ鍛錬が足らんぞ、祐斗」

オレはそう言っただけで部室の扉を開ける

そこには既にリアス、朱乃、小猫がいた。そしてもう一人、銀髪のメイドが立っていた

彼女ーグレイフィア・ルキフグスはオレを見てハツとした表情になり跪こうとしたがオレは手を前に出しそれをやめさせる

それを見たりアスはオレに聞いてきた

リアス「あなたたち知り合いなの？」

蓮夜「あとで教えてやる。てか話ってなんだ？」

リアス「これまでの発言と行動を謝るわ…ごめんなさい…」

リアスはオレに頭を下げ謝ってきた。あのプライドの高いリアスが…

リアス「あなたに言われてこれまでの自分の行動を思い返して見たわ…あなたの言う通り自分に自惚れてた…だからこれからは正しく生きて行くと決めた…その一歩としてまずはあなたに謝りたいと思っただけで今日きてもらったの…」

その姿を見てオレはもう大丈夫だろうと思っただ

蓮夜「合格だ。その心を絶対忘れるな！」

リアス「ええ」

蓮夜「ようやく仕事がひとつ終わった」

リアス「どういうこと？」

蓮夜「オレがここにきた目的の1つにお前を正すっていう目的があつたんだ」

朱乃「そうでしたの」

蓮夜「だがもう大丈夫だろう。あ、さっきの質問だがオレとグレイファイアは…」

オレとグレイファイアの関係の話そうとすると床に魔法陣が展開されその模様を見て

「…フェニックス」

祐斗がこう漏らした

おいおいあの焼き鳥がこんなとこにくるんだ…

魔法陣から光が発せられそれが収まると炎が巻き起こりそこから1人の男が現れた

「ふう、人間界は久しぶりだ

会いに来たぜー、愛しのリアス」

男は不気味に笑いながらリアスを見る

一誠「誰だこいつ」

グレイファイア「この方は”ライザー・フェニックス”様。純血の上

級悪魔でありフェニックス家の御3男」

一誠「フェニックス家？」

グレイファイア「そして時期グレモリー家の次期当主の婿」

蓮夜「そういうことか？」

一誠「グレモリー家次期当主…ということとは！」

蓮夜「その通りだ一誠、リアスの婚約者だ」

一誠「婚約!？」

まあ一誠ならそういう反応をするわな

リアス「いい加減にしてちょうだい！わたしはあなたと結婚なんてしないわ！」

ライザー「これは君のお父様もサーゼクス様もご了承された縁談なんだぞ？」

リアス「わたしの結婚相手は自分で決めるわ！」

ライザー「俺もなリアス、フェニックス家の看板背負ってるんだよ」

ライザーはリアスの顎を持ち上げて続ける

ライザー「俺はな君の眷属を全員焼き尽くしても君を冥界へ連れ帰る」

リアスとライザーがやり合うような雰囲気になりつつある

グレイファイア「お二人ともお収めくださいませ。わたくしはサーゼクス様の命を受けてこちらにきています。よって容赦はいたしません」

ライザー「最強の女王にそんなこと言われたらさすがの俺も怖いよ」

グレイファイア「いえいえ、あちらに居られる方に比べたらわたくしなどとてもとても」

ライザーはゆっくりとタツマキの方を見る

ライザー「な！なぜこんな下界に【戦慄のタツマキ】がいるんだ！」

タツマキ「ちよっと！汚れるからこっち見ないでくれる！」

蓮夜「グレイファイアお前がここにいてってことは何か聞かされてるんだろ？」

ライザー「誰だお前は？悪魔なようだがこんなところにいるという

ことは下級だろ！口を慎め！」

ライザーはそう言い終わった瞬間地面に叩きつけられた…タツマキの能力によって……

タツマキ「あなたが黙りなさい…このまま殺すわよ…？」

グレイファイア「タツマキ様！お収めください！」

蓮夜「タツマキ…」

オレの声を聞くと能力を解除しオレのところに向かってくる

タツマキ「次はないわよ…」

ライザー「くっ！」

オレはタツマキの頭を撫でてやり小声で「ありがとな…」と言って
おいた

タツマキは顔を見られたくないのかオレの背後に隠れてしまった

グレイファイア「感謝いたします。蓮夜様のおっしゃる通りこの場で
決着がつかなかった場合、ライザー様と「レーティングゲーム」にて
決着を…と旦那様から仰せ仕りました」

それを聞いたリアスは驚き言葉を失った

ライザー「リアス、俺はゲームをなんども経験済みだし勝ち星も多
い。君は未経験はおろか公式の資格までないんだぜ？」

リアスはあからさまに悔しそうな顔をする

まあリアスには不利だな

ライザー「リアス、念のため確認しておきたいんだが…君の下僕は
このメンツで全てなのか？」

リアス「だとしたら何なの？」

ライザーは指を鳴らす。その瞬間グレイファイアの後ろに魔法陣が
展開されそこに15人の女性や少女が現れた

ライザー「こっちは全ての駒が揃っているぞ」

一誠「こんな美女美少女ばかり！なんて男だ！」

一誠はライザーの眷属を見て急に泣き出した

ライザー「おいリアス…この下僕くん俺を見て号泣してるんだが
…」

リアス「その子の夢がハーレムなの…」

タツマキ「キモっ！」

ライザー「ははっそういうことか…ユーベルーナ」

ユーベルーナ「はい、ライザー様」

何か思いついたのか自分の眷属の一人を呼び寄せた

オレはその瞬間タツマキの目を塞いだ…だが、音を防ぐことができなかった…ちっ！ジブルールを連れてくればよかった

それはライザーと眷属による不快なたわむれだった。

タツマキ「ほんとに最低…」

その音に不快になるタツマキ

ライザー「お前じゃこんなこと一生できまい、下級悪魔くん？」

一誠「う、うるせえ！そんな調子じゃ部長と結婚した後も他の女の子とイチャイチャするんだろ!?!この種蒔き焼き鳥野郎!!」

ライザー「貴様…自分の立場を弁えてものを言っているのか？」

一誠「知るかつ！こんな奴に部長は渡さねえ!!ゲームなんて必要ねえ！この場で全員倒してやるっ!!」

アーシア「イツセイさん！」

一誠は左腕に神器を出し突っ込むが

ライザー「ミラ」

ライザーの指示で前に出た少女のミラに棍棒で突かれそうになった瞬間

蓮夜「タツマキ…」

タツマキがオレの指示を聞かずとも能力で止めてくれた

蓮夜「一誠落ち着け」

リアス「わかったわ…レーティングゲームで決着をつけましょう…」

グレイファイア「承知いたしました」

ライザー「ちよつと待ってくれ最強の女王。おい！小僧！」

ライザーはオレを指差して言った

蓮夜「小僧ってオレか？」

ライザー「お前もレーティングゲームに参加しろ！そこで焼き殺す！」

蓮夜「あー、大丈夫なのか？グレイファイア」

グレイファイア「今回は非公式のゲームなので問題ありません」

蓮夜「なら問題ない。オレの仲間も同伴でいいよな？」

ライザー「ああ、せいぜい楽しませてくれよ？」

グレイファイア「それでは10日後にゲームを行います。皆様それですろしいですね。

ライザー「それじゃアリアス、次はゲームで会おう」

そう言い残し、ライザーとその眷属は炎に包まれて消えた

その後グレイファイアからアリアス達にオレの正体を伝えられ明日から一緒に特訓をすることになった

第12話

焼き鳥野郎襲来から1日が経った次の日、オレは眷属のみんなと一緒に山にきている。昨日焼き鳥野郎が帰って行った後、リアスから特訓を

見て欲しいと言われたのでここにきたのだ。ちなみにオカルト研究部のメンツと一緒にきている

一誠「ぜえ：ぜえ：ぜえ：」

蓮夜「一誠、こんなんではばってたら強くなんなれないぞー？」

一誠が大量の荷物でダウンしかけていた。それを見て

アーシア「あの、私も少し持った方が…」

リアス「いいのよ、あれくらいこなしてもらわないと」

アーシアがそんな一誠を見て手助けしようとするがリアスがそれを止める

祐斗「お先に」

達也「じゃあな」

十六夜「早くしろよ？ヤハハ」

一誠「くそっ！木場のやつ余裕見せやがって！てかお前らなんでもの倍ぐらい荷物大きいのにそんなスイスイ行けるんだよ…」

蓮夜「ん？まあ鍛えてるからな。女性陣はジブリールの転移魔法で先に言ってる」

オレと達也と十六夜は女性陣の荷物を一緒に持っている。女性陣の荷物はなにかと多い…

目的地に着くとさっそく修行を始める。時間がないからな…

蓮夜「さて、お前達にはそれぞれオレの眷属が何人かついて教える。まずは祐斗」

祐斗「はい！」

蓮夜「お前は同じ騎士のユウキと雪菜、それとクロメに教われ。3人ともよろしくな」

ユウキ「はい♪」

雪菜「わかりました」

クロメ「わかった」

祐斗「よろしく」

蓮夜「次に小猫だが…達也と黒歌、頼む」

達也「ああ」

黒歌「了解にやく♪」

小猫「お願いします」

蓮夜「達也には体術を、黒歌には仙術を教われ。比率は2人に任せ
る。

そこで朱乃にはジブリールがついてくれ」

ジブリール「かしこまりました」

蓮夜「朱乃：何があつたか知らんし聞く気もないが、自分の力に向
き合え」

朱乃「…：善処いたしますわ」

蓮夜「アーシアは回復役になると思う。だから同じような非戦闘員
のカナリアにいろいろ教われ」

アーシア「は、はいです」

蓮夜「カナリア、魔法の使い方だったり簡単な防御魔法を教えて
やってくれ」

カナリア「うん！お任せあれ〜！」

蓮夜「リアスお前は、深雪とレム頼む」

深雪「かしこまりました」

レム「わかりました」

蓮夜「魔法に関してはこの2人だが戦術とかを聞きたかつたらオレ
か達也に聞いてくれ」

リアス「わかったわ」

蓮夜「最後に一誠だがお前には他の奴らをつける。鼻の下を伸ばし
てたりなんかしてたら死ぬからな…みんなは一誠が死なない程度に
頼むな。特にタツマキと十六夜」

一誠「マジか…」

タツマキ「なんでこんなことを私が」

十六夜「わかったよ」

ティナ「わかりました」

犬千代「わかった」

アンナ「…(コクツ)」

蓮夜「ライザーを倒したいならアンナは特にいい訓練になるぞ」

一誠「なんでだよ？」

蓮夜「見た方が早いか…アンナ」

アンナ「ん…」

オレがアンナを呼ぶとアンナは能力を発動し、周りが一瞬のうちに炎に包まれた

蓮夜「これが理由だ。アンナサンキューな」

アンナの頭を撫でるとアンナは少し頬が緩む

リアス達はこんな小さいアンナがありえないみたいな顔をしている

蓮夜「じゃあ解散。オレは全部の場所を見て回るから」

―祐斗修行場―

祐斗「はあー!」

クロメ「遅い…」

祐斗「はあ…騎士の駒の力…全開にしてるのに…はあ…当てられる気がしないなんて…」

蓮夜「大振りが多いぞ」

雪菜「それに木場先輩は真っ直ぐすぎます。フェイントなども入れた方が…」

ユウキ「クロメも手加減してあげなよ〜?」

クロメ「わかってる…それよりもユウキ」

ユウキ「ん?なに?」

クロメ「ズルい」

ユウキ「いいじゃん♪」

ユウキは今オレに抱きついている

蓮夜「ユウキさんや…離れてくれやしませんかね？」

ユウキ「ダメだよ♪」

蓮夜「いや、他んどこも行かないとだし…」

ユウキ「むう、わかった…」

蓮夜「じゃあこの後もよろしくな」

オレはそう言つてクロメと雪菜の頭を撫でた

クロメ「うん♪」

雪菜「わ、わかりました／＼／」

クロメは機嫌が直つて、雪菜は耳まで真っ赤になった

ユウキ「あー！2人ともズルい！」

そう言っているユウキをあとにして、オレはその場を離れた

―小猫修行場―

蓮夜「達也、状況はどうだ？」

達也「ああ、仙術より体術優先でやっている」

蓮夜「わかった。引き続き頼む」

達也「わかった」

オレは仰向けに倒れている小猫とその側で小猫に仙術を行なっている黒歌に近づいた

蓮夜「小猫この後も頑張れ。黒歌はサポートよろしくな」

小猫「はあ…はあ…はい」

黒歌「任せろにや♪」

―朱乃修行場―

朱乃「雷よ！」

ジブリール「そんなんでは蟻も殺せはしませんよ？」

朱乃「はあ…はあ…くっ！」

一体どれだけ魔法を放ったのかその辺がクレーターだらけになつ

ていた。その一方ジブリールは1回も放っていないみたいだな。あいつがやったらこんなもんじゃやないからな

蓮夜「おーい、とりあえず少し休め」

朱乃「…わかりました」

ジブリール「私には休憩など必要ありませんが、マスターがそうおっしゃるなら致し方ありませんね」

2人がゆつくりと降りてきた

蓮夜「ほれ」

オレは持っていた飲み物を朱乃に渡す

朱乃「ありがとうございます」

蓮夜「どうだジブリール」

ジブリール「正直に申しますと、話になりませんね」

蓮夜「いやいや、そりやお前には対してはそうだが聞きたいのは焼き鳥野郎の奴らには対抗できるかだよ」

ジブリール「そうでございますね…女王相手ぐらいまでならなんとかなりそうでございます」

蓮夜「そうか」

ジブリール「しかし、まだ自分の力”全て”を使おうとはしません」

朱乃「…」

蓮夜「そうか…朱乃、別にそれを使おうが使わないかは自分で決めることだ。だがな、自分のそれとリアスの人生を天秤にかけてどっちが大切かなんてことはお前自身が分かっているはずだぞ」

朱乃「っ！それは…」

朱乃はそれをきくと籠る

蓮夜「まあいい…ジブリール、引き続き頼むな。あんまりすぎんなよ？」

ジブリールの頭を撫でると珍しく頬を赤くする

ジブリール「かしこまりました♪」

蓮夜「朱乃、よく考えろ」

オレはそう言い残して去った

ーアーシア修行場ー

カナリア「あ！蓮ちゃん！」

カナリアがオレに気づいて呼んだきた。だが蓮ちゃんは恥ずかしいからやめてほしい：

蓮夜「アーシアはどうだ？」

カナリア「シアちゃん魔法の才能あるよ！もう基礎段階ができるよになっちゃったよ！」

蓮夜「へえ、すごいじゃないか（シアちゃん？）」

アーシア「そ、そんな…！」

蓮夜「じゃあこの後も頼むな」

これまでと同じように頭を撫でてやる

カナリア「了解だよ♪」

ーリアス修行場ー

ちようど休憩中のようにだった

蓮夜「よーっす、どうよ調子は？」

レム「あ、蓮夜くん。リアス先輩は魔法自体は強力なんですけど…」

深雪「その大きい魔法しか使わないのですぐ疲れてしまうみたいですよ」

蓮夜「そうか、なら最小限で放てる魔法を教えてやってくれ」

深雪「はい、そう思って今その練習中です」

蓮夜「さすがだな」

そう言っ頭を撫でる

深雪「ん／＼／＼」

レム「むう〜」

レムが頬をぷくつと膨らませてこっちを見ている

蓮夜「あーわかってるよ、ほれ」

レムの頭も撫でてやる

レム「ふふっ／＼／＼」

リアス「仲がいいのね」

蓮夜「そうか？」

レム「仲がいいことはいいことですよ♪」

深雪「そうですよ♪それにもう長いお付き合いじやないですか♪」

蓮夜「それもそうだな、じゃあ2人とも引き続き頼むな」

深雪、レム『はい♪』

蓮夜「リアスもがんばれよ」

リアス「ええ」

――誠修行場――

蓮夜「さて、一誠は生きてるかな？」

とつぶやきながら山の方に向かってしていると

「ぎゃー………!!!」

大きな悲鳴と爆発音が聞こえてきた

蓮夜「あ、生きてた」

なぜか心配ではなく生存確認をするオレであった

少し進むと崖の上にティナがいた。オレは崖の上に跳躍した

ティナ「お兄さん♪」

蓮夜「おーティナ」

ティナは抱きついてきた

蓮夜「どうだ？一誠は死んではいないみたいだが」

ティナ「はい、タツマキさんが岩を飛ばしたり十六夜さんが殴りかかったりと様々な攻撃を避けさせて体力向上を目指してます」

蓮夜「あー、でもあいつら本気の1割も出してねえな。退屈そうだな」

ティナ「そうですね。特にあのお二方はそうでしょうね」

犬千代「犬千代も退屈。一誠弱すぎ」

蓮夜「犬千代！よくわかったな。気配は消してたんだがな」

犬千代「蓮夜の匂いがした」

蓮夜「あー、匂いはどうにもできないからな。オレそんな臭う？」
ティナ「そ、そんなことないです／＼」

犬千代「蓮夜はいい匂いする」

アンナ「安心する匂い」

蓮夜「アンナ！お前もか！」

アンナ「違う。蓮夜がいるところはすぐにわかる」

蓮夜「あはは、アンナには敵わねえな」

じゃあ3人ともこの後もよろしくな。夕飯になったらまた呼ぶ」

そう言つて3人の頭を撫でる

ティナ「わ、わかりました／＼」

犬千代「蓮夜のご飯」

アンナ「楽しみ」

オレは戻つて夕飯の支度をする

一誠「死ぬーーーーー!!!!」

第13話

蓮夜「みんな揃ったな。じゃあ召し上がれ」

『いただきますー!』

今日の修行が終わって今は夕飯タイム

蓮夜「今日は良かった」

リアス「まったく歯が立たなかったわ…」

小猫「1発も当てられませんでした」

祐斗「僕もだよ…」

朱乃「そうですね」

一誠「死ぬかと思った…」

アーシア「えつと…」

アーシア以外は凹んでいる。一誠はそれとは少し違うが…

蓮夜「お前らそんなに凹むことないぞ? オレの本性聞いたんだろ?

自分で言うのもあれだが、これでもこの世界で”一番”なんだぞ。その眷属から教わってんだからなにか奪うつもりでいけよ」

リアス「そうね…確かに勉強になるわ」

一誠「蓮夜…お前ほんとにすごいやつだったんだな…」

この前グレイフィアがリアス達にオレの正体を明かした

リアス「やつぱり敬語とか使った方がいいかしら…」

蓮夜「いや今までと同じでいい」

世界で一番と言うことは魔王より上というわけだ

そして時間は過ぎ最終日

蓮夜「よし皆よく頑張った」

タツマキ「ふん! まだまだよ!」

ユウキ「でもみんな始めたときよりはよくなったんじゃない?」

蓮夜「そだな…じゃあ最後にオレらもやるぞ」

オレが戦闘のときの表情をすると眷属のみんなは戦闘態勢をとる。

リアス達には悪いが特にタツマキと十六夜は中途半端な訓練で鬱憤

が溜まっているだろう。それで鬱憤晴らしも含めて少し体を動かそうということだ

蓮夜「リアス達は下がってた方がいいぞ？下手したら怪我じゃすまないかもよ？」

リアス達が崖の上に行ったのを確認して始める

蓮夜「我、神崎蓮夜が汝の枷を解き放つ。来い！四番目の眷獣、甲殻の銀霧（ナトラ・シネレウス）」

オレは眷獣を顕現させ辺り一体を霧に変える。これでどんなに壊しても壊れないようになった

蓮夜「さーて始めるぞ。全員でも一人ずつでもどっちでも…」

十六夜「オラアアアア！」

説明が終わる前に十六夜が襲ってきた。オレは軽く避ける

蓮夜「おいおい、最後まで話させるよ」

十六夜「こちら力抑えられててイライラしてたんだ！そんなん待ってられつかよ！オラアアアア！！！！」

蓮夜「わかったよ…怪我すんなよ！」

十六夜「しやらくせー！！」

オレと十六夜の拳がぶつかる。次の瞬間、十六夜が飛ばされ岩にめり込む

蓮夜「まだオレの方が強いな。さて次は？」

ユウキ「じゃあ蓮夜、行くよ！雪菜！クロメ！」

雪菜「お願いします！」

クロメ「わかった」

ユウキと雪菜は目に見えないほどの速度で（オレは見えているが）オレに切りかかってきた。クロメは神器「死者行軍・八房」の能力は使わず剣技でくるようだ。オレは3人の剣戟をことごとくかわす

蓮夜「3人とも連携がうまくなったな」

雪菜「全部避けてるのに言われたくないです！」

ユウキ「全然当たらない！」

蓮夜「クロメは能力使わないのか？」

クロメ「ほんとは使いたいけど壊されたら嫌だから」

蓮夜「そっか…おっと」

3人の剣戟を避けていると突然横から槍による突きがきた

蓮夜「今度は犬千代か」

犬千代「むくあたんなかった」

蓮夜「狙いはいいぞ。あとは直前まで気配を消すことだな」

パンツ

今度は対戦車ライフルの銃弾が打たれた

蓮夜「今度はテイナか、対戦車ライフルって… オレは悪魔なんだ

が」

クロメ「蓮夜の方が何億倍も強い」

蓮夜「まあそうなんだがな」

そう言うときユウキ達が一旦さがった

蓮夜「ん？」

何かを感じた瞬間右側は深雪の吹雪、左側はアンナの炎、上からはジブリールの電撃がそれぞれすごい威力で襲ってくる

蓮夜「こりややべーな… 必殺ちよつとだけマジシリーズ。三連続ちよつとだけマジ殴り」

オレの三連続のパンチでそれぞれを粉碎する、がその粉碎したあとの煙の中から達也が複数人かかってきた。どうやら黒歌の幻術らしい

蓮夜「おいおい、あいつもやるようになったな。気配まで全部同じだよ。だが…」

パンツ

達也の拳を受け止める

蓮夜「若干スピードが違う」

達也「っ！」

達也は少し驚いた顔をするがすぐにいつもの冷静な顔に戻り何かの魔法を使う。そしてオレは何かに縛られた。そして背後からシエーレが「万物両断エクスタス」を手にし攻撃してくる。オレは仕方ないから地面を踏み地震を起こす

蓮夜「ほんとに連携がうまくなった」

ゴゴゴゴゴ

達也の魔法を破り煙が晴れるのを待っていると上からすごい音がするのが聞こえる。その音が大きくなると煙が一瞬のうちに晴れ頭上にはでっかい隕石が迫っていた

蓮夜「こりやさすがにやべーな。来い！ 獅子の黄金（レグルス・アウルム）」

獅子の黄金が隕石に向かって突進し隕石を粉碎する

タツマキ「もう！ なんなのよ！ あたりなさいよ！」

なんかプンスカ言ってるタツマキはほつとく

蓮夜「よし、じゃあ終わりなーおつかれ」

これで終わる。まあみんな少しは鬱憤晴らしができたかな

リアス達と合流し今は帰宅中

リアス「あなた達…ほんとにすごいよね…」

祐斗「ユウキちゃん達なんて僕でも目で追えなかった」

小猫「さすがです」

朱乃「壮大でしたわ」

一誠「なにが起きてるかわかんなかった…」

アーシア「すごかったです」

みんな驚いてるようだ

蓮夜「みんなあれでも抑えてたんだぞ？ 特にタツマキや達也、ジブ
リールが本気出したら日本なんて一瞬で消し飛ぶぞ」

リアス達はそれを聞いて青ざめている

蓮夜「まあやれることはやったんだ。あとは本番がんばるだけだ」

リアス「そうね」

こうして長かった修行が終わった

第14話

本日はレーティングゲーム当日。リアス達は修行でレベルアップはしたもののまだフェニックス家には勝てなかった。相手の眷属をほとんど倒すまで善戦できてはいたが、フェニックスの不死身な体はどうしようもなかったようだ

ユウキ「負けちゃったね」

蓮夜「ああ…」

犬千代「蓮夜、怒ってる」

アンナ「(コクツ)」

蓮夜「んなこと…いや、そうだな…少し頭にきてる」

ジブリール「マスター、やはりあの女でございますか?」

蓮夜「…」

ジブリールが尋ねたことに無言で返す

蓮夜「ふうく…とりあえず次はオレらの試合だな。ん?」

ライザー「ほお、逃げずに来たようだな」

ライザー・フェニックスがこつちに近ずいて来た

蓮夜「なんかようか?」

ライザー「なーに、これから負かす奴らを拜見しに来たのさ」

十六夜「はっ! だいぶ余裕じゃないの」

ライザー「当たり前だ。ん? ほー、よく見るとなかなかの上もの達

じゃないか。おいお前! オレが勝ったらそこにいる女どもを寄越せ」

蓮夜「あ?」

ライザー「お前にはもつたいない。オレが可愛がってやるよ」

雪菜「最低ですね」

タツマキ「キモい!」

ライザー「ははは! せいぜい頑張りたまえ!」

ライザーは気色悪い笑いをしながら去っていく

蓮夜「…」

眷属一同『…』

蓮夜「みんなちよつといいか…正直結構頭にきてる」
達也「ああ…俺もだ」

ユウキ「僕も、あれは無理だよ」

ティナ「はい」

蓮夜「徹底的にぶちのめすぞ」

みんなは強く頷く

その後魔王にある確認に行く

蓮夜「よう、サーゼクス。元気か？」

サーゼクス「はい、おかげさまで」

蓮夜「…気持ち悪いからやめろ」

サーゼクス「あははは、そうかい。この後は君たちの番だね。楽しみにしているよ」

蓮夜「そのことなんだが…さつき向こうさんからケンカを売られてな、あいつ殺していいか…？」

サーゼクス「…すまないがそれは困る…一応上級悪魔だ」

蓮夜「…わかった。だが使い物になると思うなよ」

「そう言い放って会場へ降りる」

『それではこれよりライザー・フェニックス様対神崎 蓮夜様のレーディングゲームを開始いたします』

グレイフィアの合図とともにゲームが始まった

蓮夜「じゃあ打ち合わせ通り行くか。深雪、アンナ、ジブリール、やっていいぞ」

深雪、ジブリール「「かしこまりました」」

アンナ「(コクッ)」

3人はそれぞれ魔法を繰り出す。3人の魔法は威力が抑えられてるとはいえ建物を全て吹き飛ばした。焼き鳥野郎の眷属もほとんどがこれでやられてしまったようだ。アナウンスがあった

蓮夜「じゃあ行くか」

オレらは正面から堂々と歩いて進む

少し進むと相手の生き残りが出て来た

「止まりなさい！」

蓮夜「あん？」

「ライザー様の所には行かせないわー！」

あいつは…確か焼き鳥野郎の女王だったか、と考えていると爆弾を投げて来た。がそれは空中で停止した

タツマキ「爆弾、お返しするわ」

ドカン

「きゃー！！！」

タツマキが念力で爆弾を相手に返し、相手はそれにやられリタイアとなった

蓮夜「サンキュータツマキ」

タツマキ「ふんっ！」

そのとき瓦礫の陰からまた1人出て来た

蓮夜「まだいたか…」

「お待ちください！わたしは戦うつもりはありません」

達也「どういうことだ」

「わたくしはレイヴェル・フェニックスと申します」

雪菜「フェニックス…ということは」

レイヴェル「はい…ライザー・フェニックスの実の妹です」

カナリア「実の妹を眷属に!？」

レイヴェル「…」

蓮夜「そんなことオレにはどうでもいいことだ。戦闘する気がないのなら離れている。だがお前の兄は壊れるものと思っておけ」

オレはそう言い放って再度進む

蓮夜「ようやくおでましか」

ライザー「貴様！よくも！」

蓮夜「黙れ…やるなら早くかかってこい」

ライザー「言わせておけばー！」

ドゴッ

焼き鳥野郎がこっちに殴りかかってきたから腹を殴ってやった。すると腹には大きな穴が空いた

ライザー「ぐはっ！」

蓮夜「へえ、一応痛覚はあるんだな」

ライザー「だがオレは不死身だ！どんな攻撃をしてもオレには無意味なんだよ」

蓮夜「はあ…みんなもう終わらせていいか？」

シエーレ「はい」

クロメ「こんな下衆もう見たくないわ」

レム「蓮夜くんの爪の垢でもものんでほしいですね」

蓮夜「じゃあ早く終わらせて帰ろう」

ライザー「調子に乗るなー！」

蓮夜「我、神崎蓮夜が汝の枷を解き放つ。来い！三番目の眷獣、”

龍蛇の水銀（アル・メイサ・メルクーリ）”

オレが呪文を言い終わるとそこには巨大な双頭の龍が顕現した

ライザー「こ、これは…！」

蓮夜「食い破れ」

オレの指示に従い眷獣は焼き鳥野郎の手足を食いちぎった

ライザー「ぎゃー！！！！」

手足を失った焼き鳥野郎は地面に転がる。普通ならフェニックスの力で元どおりになるはずだが…

ライザー「なぜだ！なぜ回復しない！」

蓮夜「お前のフェニックスとしての能力ごと食ったからだ」

ライザー「そんなことありえない！」

蓮夜「現実起きてるじゃねえか。これで決着だな。本当ならお前を殺してやりたいとこだが…魔王様に感謝するんだな」

オレが強い殺気を放つと焼き鳥野郎は気絶した

『ライザー様戦闘不能により神崎蓮夜様の勝利といたします』

グレイフェイからのアナウンスがあった

蓮夜「帰るぞー」

これでつまらないレーティングゲームは幕を閉じた

後日行われるはずだったライザー・フェニックスとリアス・グレモリーの結婚式はライザーの意識不明と魔王による決断で白紙となった。リアスはというとレーティングゲームで自分のことを身を呈して守ってくれた一誠に惚れたらしい。一誠よかったな

第15話

焼き鳥野郎とのレーティングゲームも終え数日が経ったある日、オレはリアスから話があると言われたのでオカルト研究部の部屋にきている。なぜ呼ばれたかは不明だ。すると

コンコン

朱乃「どうぞ」

ドアがノックされ朱乃がそれに返事するとドアが開き10人ほどの男女が入ってきた。

蓮夜（ん？真ん中のやつは…）

「失礼します。ごきげんようリアス」

リアス「ええ、ごきげんようソーナ」

一誠「せ、生徒会長？」

入ってきたのは生徒会の面々らしい。一誠が挨拶した女性が会長の支取蒼奈。そして入ってきたのはメンツの中で唯一の男子が発言する

「リアス先輩、彼に僕達のこと話してんかったんですか？同じ悪魔なのに気づかないこいつもどうよって感じですが」

蓮夜「一誠は悪魔になってまだ日が浅いんだから仕方ねえだろ」

「っ！神崎!?なんでお前がここに!？」

金髪男子生徒の発言に少しイラツときたから言ったらなぜかすごい睨まれた

ソーナ「お止めなさい、匙!彼の言う通りです。それに私達はお互い干渉しないようにしているの。兵藤くんも知らなくて当然です。失礼しました。こっちは兵士の匙元四郎」

リアス「兵士の兵藤一誠、僧侶のアーシアルジエントよ」

リアスと支取先輩がそれぞれ紹介してようやく一誠は理解したようだ。朱乃が説明しようとするがオレが先に口を開く

蓮夜「ソーナ・シトリー。上級悪魔の次期当主だ。そして姉が現四大魔王の1人だ。セラフォルは元気か？まあ元気がないあいつ

は想像できんが…」

ソーナ「え、ええ…改めて私はソーナ・シトリーといいます。兵藤くん、アルジエントさん、そして永遠の皇帝《エターナル・エンペラー》神崎蓮夜さん、これからよろしくお願ひしますね」

匙「永遠の皇帝《エターナル・エンペラー》って、まさか…!!!」

ソーナ「そのまさかよ、匙。先日レーティングゲームであのフェニックス家の三男を容易く意識不明の重体に晒し、魔界、天界、人間界、この世界で最強と言われている人物です」

匙「神崎が…マジか…」

蓮夜「知ってたのかよ」

ソーナ「ええ、毎晩のようにお姉様から話を聞かされたうえにリアスからの報告もあつたので…」

ソーナは既にオレのことは知っているみたいだが、匙は未だに信じられないといった様子で口を開けている

一誠「お前も兵士かー」

匙「俺としては変態3人組の1人と一緒にされるのは酷く遺憾だね」

蓮夜「オレはまだ何も知らないのにそんなこというやつとおんなじ悪魔だというが酷く遺憾だ」

こいつの言い方が気に入らなかつたので少し殺気を出し匙に言う

匙「うぐっ！」

ソーナ「申し訳ありません！匙にはあとできつく言っておきます！」

蓮夜「…気をつけな」

オレは殺気を出すのをやめる

一誠「蓮夜の前ではお前も全然じゃねーか」

匙「なんだと!?やるか？俺は悪魔になつたばかりだが、これでも駒を4つ消費してるんだぜ？」

ソーナ「いい加減にきなさい、匙！それに彼は駒を8つ消費してます」

匙「8つって全部じゃないですか!?信じられん…こんな冴えない奴

が…」

一誠「うるせー!!!」

蓮夜「お前らしい加減にしろよ…」

一誠、匙『はいっ!!!』

オレの声に顔が青くなる2人

ソーナ「ごめんなさいね、兵藤くん、アルジエントさん。よろしければ新人悪魔同士仲良くしてあげてください」

それから匙とアーシアが握手をしたり、それに一誠が割り込んだりした

蓮夜「そういえばみ…司波はいないのか？」

ソーナ「はい、彼女は私の眷属ではないのでここへは連れてきてはいません。しかし生徒会室にいますと言っていましたか…」

蓮夜「そっか…深雪ー」

オレが深雪の名前を呼ぶと、オレの隣に魔法陣が浮かび上がり、深雪が出てきた

ソーナ「!…どういうことでしょうか…?」

深雪「会長、改めまして蓮夜さんの僧侶、司波深雪です」

蓮夜「ということだ」

オレは深雪の頭を手をおいてそう言う

ソーナ「そうでしたか…全く気づきませんでした」

蓮夜「そりやそうだろう」

深雪「申し訳ありませんでした」

ソーナと生徒会のみんなは初めは驚いていたがすぐに納得してくれた

蓮夜「ところでよー、リアス」

リアス「ん?なに?」

蓮夜「用事はなんだよ!」

リアス「ああ、そうだったわね。実は一誠とアーシアの使い魔を探しに行くんだけど、一緒に来てくれないかしら…?」

蓮夜「ん…別にいいぞ。そろそろオレらも行かないとマズイ…しな…」

深雪「そうですね…あのー、それはいいんですが…いつまで撫でて
るんですかー!」

蓮夜「おー、悪い悪い」

オレは深雪の頭から手を離れた

深雪「あ…」

蓮夜「ん?…: まったく、別にみんなの前でも甘えていいんだぞ」ヨ
シヨシ

深雪「く／＼／＼」

深雪は恥ずかしいのか俯いてしまった

一誠、匙「羨ましい!!!」

リアス「じゃあいということで夜にまた来てちょうだい」

蓮夜「わかった」

ソーナ「紹介も終わったことだし、私達はこれで」

リアス「ええ、ありがとうね」

そう言っソーナは部室から退室した。その後オレも深雪と一緒に
帰った

第16話

ー夜ー

オレは眷属のみんなと一緒にオカルト研究部の部室へ来た

蓮夜「リアス、来たぞー」

リアス「みんなわざわざありがとう」

ユウキ「いえいえ」

達也「そろそろ俺達も行かないといけなかったしな。な？蓮夜」

蓮夜「あー…あははは…」

リアス「さてグズグズはしてられないわ」

そして目的地を教えてもらい、オレ達とリアスの眷属と別々の魔法陣で転移した

到着

一誠「ここが…」

朱乃「使い魔が生息する森ですわ」

一誠「確かに何が出てきてもおかしくないな」

アーシア「そ、そうですね」

一誠は驚き、アーシアは少し恐怖していると、木の上から声がする
「ゲットだぜー」

声が出した方には白のランニングに短パンで帽子のつばを後ろにして被っている人がいた

「俺はサドウージ！世界一の使い魔マスターを目指してる男だぜ！」

一誠「使い魔…」

アーシア「マスター？」

サドウージ「オレにかかればどんな使い魔でもゲットだぜ！」

朱乃「彼は使い魔に関してのプロフェッショナルですよ」

一誠「はあ…」

サドウージ「さーて、どんな使い魔がご所望なんだぜ？」

一誠「そつすねー…可愛い使い魔とかいないっすかねー、女の子系

とか」

鼻の下を伸ばして言う一誠

蓮夜「使い魔は有用で強いのにするのが普通だぞ」

一誠「じゃあ蓮夜はどんな使い魔を持ってるんだ？」

蓮夜「ん？オレか？オレは…」

レム「蓮夜くん…」

シエーレ「どうやら向こうからいらしたみたいですね」

蓮夜「あらら」

オレを含め眷属のみんなは感じ取ったようだ

一誠「そうしたんだ？」

蓮夜「お前らは少し下がってた方がいいかもしれん…突風に気をつ
けるよ」

リアス「どういうこと…きやつ！」

リアスが効いてきたが、その瞬間強い突風が吹いた。頭上には3体
のドラゴンが飛んでいた

蓮夜「やっぱりか…はあ」

リアス「なんなのあのドラゴン達は」

サドウージ「なぜ…なんでこんなところに!!!」

3体のドラゴン達はこつちに向かつて急降下してきた

祐斗「こつちに來ますよ！」

朱乃「これはさすがに…」

雪菜「大丈夫です」

慌てふためくりアス達を落ち着かせる雪菜

蓮夜「避けたらダメかな…?」

犬千代「そんなことしたら、地の果てまでも追いかける」

蓮夜「ですよー」

一誠「なんでそんな落ち着いてられるんだ!!!?」

一誠が聞いたその瞬間3体のドラゴンが光り出し徐々に小さく
なっていき人型となって落ちて來た。そしてオレに直撃

「ぐはっ！」

オレは耐えきれぬはずもなく押し倒される

「蓮ちゃん!」「蓮ちゃん!」「蓮くん!」

「いたたたた…ひ、久しぶり…レア、ミル、ルカ」

「久しぶりじゃないわよ!なんで全然来てくれなかったの!」

朱乃ほどではないが長い黒髪ロングで雲の刺繍が入った黒い着物を着ているレアがオレの右腕に抱きついている

「蓮ちゃん、あたし寂しかった」

セミロングの白髪に白のレアと同じ着物を着ているミルが左腕に抱きついてくる

「蓮くんのおバカおバカ!」

そして紅いショートヘアで赤の2人と同じ柄の着物を着ているルカがオレの胸をぽかぽかと叩く

一誠「おい、蓮夜!お前ユウキちゃん達みたいな美少女を眷属に持ちながらまた美少女達を…なんて羨ましい!なんでお前ばかり!!!」

オレとレア達とのやり取りに嫉妬で怒り狂う一誠

蓮夜「あー、紹介するから。お前らもいい加減離れろ」

「なら妾もいた方がよいな」

今度は青いセミロングに青い着物を着た少女が姿を現した

ティナ「ティアさん!」

ティア「おーティナか。久しぶりじやのう」

ティナとティアは抱き合って喜んでいる

一誠「まだもや美少女が!部長、部長か…らも…部長?他のみんなもどうしたんだ?」

リアス達はすごい驚いているようだが、一誠はそれがなぜだかわかっていないみたいだ

リアス「蓮夜、その方々は…」

蓮夜「ああ、この3人がオレの使い魔でこつちから”黒龍ミラボレア”のレア、”紅龍ミラバルカン”のルカ、それで最後が”祖龍ミラルーツ”のミルの三姉妹だ。そんでそつちでティナと抱き合ってるの…」

サドウージ「五大竜王の1匹、カオス・カルマ・ドラゴン天魔の業龍の”ティアマット!!!”!!!」

蓮夜「なんだ、知ってたのか」

一誠「えー！ー！！！！でもドラゴンが人間に…なんで…」

蓮夜「こいつらは人型になれるんだ」

みんなはレア達の正体を知って固まっている

ルカ「蓮くん、この人達は？」

蓮夜「現魔王の1人、サーゼクス・ルシファアの妹、リアス・グレモリーとその眷属達。そっちの短パンは違うが」

リアス「こ、こんなところで伝説の古龍に出会えるなんて…」

朱乃「ではティアマツトさんも蓮夜さんの…？」

ティア「妾はここにいるティナ・スプラウトの使い魔じゃ。だが使い魔になるため勝負して負けたのは蓮夜にだかの」

それを聞いて再び硬直するグレモリー眷属とサドウージ

一誠「おい、木場。ティアマツトさんてその…どのくらい強いんだ？」

祐斗「魔王に匹敵するって僕は聞いているけど…」

一誠「はー！ー！！！！じゃあ蓮夜ってそれに勝ったっていうのかよ

…どんだけ強いんだよお前…」

アーシア「はわわわわわ！！」

クロメ「永遠の皇帝は伊達じゃないからね」

蓮夜「なんでお前が威張るんだ？」

クロメは自分のことのように胸を張る。顔は真顔なのに

ティア「それにちゃんと蓮夜のことを好いておるぞ？」

一誠「蓮夜、お前ってやつはー！ー！！」

一誠そろそろうるさい。ティアもなに言ってるんだよ…

リアス「じゃあみんなにも…？」

リアスはオレの眷属の方を見て聞いてくる

蓮夜「ああ、タツマキと十六夜以外はみんなそれぞれ使い魔がいるぞ。今日は来ないみたいだがな」

リアス「そう」

蓮夜「さて、オレの使い魔の紹介も終わったし、一誠とアーシアの使い魔を探しに行くか」

そう言っ出て出発しようとしたが首根つこと両腕を掴まれる
ミル「なくに言ってるのかな、蓮ちゃん」

ルカ「蓮くんどこに行くのかな…？」

レア「蓮ちゃんは私達とOHANASHI☆しましょうね」

3人は笑顔だがこれは普通の笑顔じゃない

十六夜「蓮夜、がんばれよ」

カナリア「あとで迎えに来るから…」

誰も助けてくれないで行ってしまった

それからみんなが戻って来るまで正座でお説教された…

月光校庭のエクスカリバー 第17話

使い魔を探しに行った次の日、朝6時に目が覚めた。が…

蓮夜（どうしてこうなった…）

犬千代「zzz…zzz…zzz…」

仰向けに寝ているオレの上にトラの着ぐるみのような寝間着を着て寝ている犬千代がいる。ユウキやクロメほど頻繁ではないがこれはよくある事だからあんま気にしない、のだが…

深雪、雪菜「すう…すう…すう…」

右側を見ると水色の半袖とショートパンツの寝間着を着ている雪菜が寝ている。左側を見ると水色と白のボーダー柄のパーカーとショートパンツの寝間着を着ている深雪が寝ている

蓮夜（この2人つてのは珍しいな…）

まだ6時だし起こすのは早いと思い、レムには悪いがオレも二度寝に突入する

140分後↓

また3人より先に起きた。犬千代はともかく深雪と雪菜はそろそろ起きる時間帯だ

蓮夜「おーい、深雪、雪菜、そろそろ起きな」

雪菜「うん…」

深雪「…おはよう、ございます…」

蓮夜「はい、おはよう」

2人はゆっくと起き上がる

蓮夜「とりあえず着替えてきな」

深雪「わかりました」

雪菜「犬千代さんに変なことしないでくださいよ…?」

蓮夜「しねえよ！」

犬千代「んう…蓮夜……」

少し大きい声を出してしまい、犬千代がムクツと起きた

犬千代「…蓮夜……」

蓮夜「どした？」

犬千代「…もう少し寝たい……」

蓮夜「…わかった」

そう言つて再び眠りについた。それもオレに抱きついたまま…

蓮夜「もう少しこのままだな…」

雪菜「そうですね」

深雪「では、先に行つてますね」

そう告げて2人は自分の部屋に戻つて行つた。そして犬千代が7時を少し過ぎたあたりで起きるまでそのままだった

学校ではあの三馬鹿トリオが馬鹿やったのに制裁をくださったぐらいで、いつもと変わらなかつた

↓放課後↓

時間は過ぎて放課後、今日は達也と黒歌に巡回をしてもらつている。オレは家で待つていたんだが突然達也から連絡があり、その場所に行つてみると

パァーン！

リアス「少しは目が覚めたかしら？」

祐斗「…すみませんでした」

どうやらリアスが祐斗の頬を叩いたようだ

リアス「どうしたの？あなたらしくもない」

祐斗「調子が悪かつただけです。今日はこれで失礼します」

リアス「祐斗…」

祐斗はそう言い残しその場を去っていく。それを一誠が追いかける

一誠「おい、木場！お前マジで変だぞ」

祐斗「君には関係ない」

一誠「心配してんだろが！」

祐斗「心配？誰が誰をだい？」

祐斗は一誠に背を向けながら続ける

祐斗「悪魔は本来利己的なものだろう？」

一誠「お前、何言ってるんだよ」

祐斗「今日は僕が悪かったと思っているよ。それじゃ…」

一誠「おい、木場！何か悩み事があるなら相談してくれよ。俺達仲間だろ!？」

祐斗はそれを聞いて一誠の方を振り向く。その目はなにかに取り憑かれたような目だ

祐斗「仲間、仲間か…一誠君は熱いね。でも僕は今基本的なことを思い出したんだ」

一誠「基本的なこと？」

祐斗「生きる意味…僕がなんのために戦っているってことさ……」

一誠「そりゃ、部長のためだろ？」

祐斗「違うよ…僕は復讐のために戦っている」

そう言い残して去ろうとするが…

蓮夜「おい、祐斗…」

祐斗「はあ…何かな蓮夜く……」

ドガツ!!!

オレは祐斗が言い終わる前に、振り向こうとした祐斗の顔面を殴る。達也と黒歌から事情を聞き、祐斗がぼーつとしてたせいで小猫がケガをしたと聞いたからだ。祐斗はその反動ですっ飛ばされた

蓮夜「お前がどう思ってるかが知らねえがな、小猫がケガしたのはお前のせいだよな？それは小猫の分だ。そんなもんですんでよかったですな。黒歌はお前を殺そうとしてたがな」

祐斗は頬を抑えフラフラになってと去って行った

オレは黒歌と小猫のもとへ行き頭を撫でながら言う

蓮夜「今回はオレに免じてこれで許してやってくれ。小猫もすまん

な」

黒歌「ホントは私がやりたかったけど、わかったにや…」

小猫「私は大丈夫です」

蓮夜「リアス、オレらはこれで帰るが、一誠達にいろいろ話しとけよ？」

リアス「ええ、わかってるわ」

オレはリアスの返事を聞き、達也と黒歌と帰宅した

第18話

今日オレが起きた瞬間”ある気配”を感じた

蓮夜「ジブリール」

ジブリール「お呼びでしょうか、マスター」

オレが小さい声でジブリールを呼ぶと壁からスルスルつと出てきた

蓮夜「この気配は”聖剣”か…?」

ジブリール「はい、間違いないと思います」

蓮夜「そうか」

ジブリールに確認を取り、オレはその気配が何か確信した

ジブリール「ところでマスター…」

蓮夜「ん?」

ジブリール「なぜマスターのベッドに駄猫がいるんですか…?」

オレのベッドでは小猫と黒歌がオレに抱きついて寝ていた

小猫、黒歌『すう…すう…すう…』

蓮夜「昨日小猫と一緒に寝るつてなったら、黒歌も一緒にな…お前
らも早く起きな」

オレは2人の肩を揺らしながら起こす

小猫「うん…おはよう、ごさいます…兄様…」

黒歌「…にゃ〜」

小猫はすぐに起きたが黒歌はまだ寝ぼけているのかまだ抱きつ
たままだ

ジブリール「早くマスターから離れてください、この駄猫」

黒歌「お前に指図される筋合いはないにゃ、この屑鳥」

蓮夜「起きてんじやねえか」2人とも、朝っぱらからケンカはやめ
ろ」

一触即発状態の2人の頭を撫でながらやめさせる

ジブリール「マスターがそうおつしやるなら…」

黒歌「気持ちいいにゃ♪もつと撫でてにゃ♪」

蓮夜「早くどきなさい」

それからリビングに降りていくと既に全員揃っていたので、みんな
で朝食を食べ登校した

―放課後―

登校してすぐにオレはリアスから今日ある者と会談するからオレ
にも同席してほしいと連絡があった。誰との会談かは聞いていない
がおそらく：

オレらがオカルト研究部の部室に着いた5分後ぐらいに客人達が
現れた

「会談を受けていただき感謝する。私はゼノヴィア」

「紫藤イリナよ」

青い髪に緑のメッシュが入ったショートカットのゼノヴィアと茶
髪のツインテールの紫藤イリナがリアスの座る向かいに座っている

リアス「神の信徒が悪魔に会いたいだなんて、どういうことかしら
？」

イリナ「元々行方不明だった1本を除く6本のエクスカリバーは協
会側の3つの派閥が管理していましたが、そのうちの3本が墮天使の
手によって奪われました」

『ツ！』

一誠「奪われた!？」

そのことを聞いた瞬間、グレモリー眷属のみんなは驚いている

ゼノヴィア「私達が持っているのは残ったエクスカリバーのうち、

この破壊の聖剣と…」

イリナ「私の持つ、この擬態の聖剣の2本だけ♪」

ゼノヴィアは自分の横にある大剣を、イリナは自分の左腕に巻いて
ある紐のようなものをそれぞれ聖剣だと説明した

リアス「それで？私達にどうしてほしいわけ？」

ゼノヴィア「今回の件は我々と墮天使の問題だ。この町に巣食う悪
魔に要らぬ介入をされたくないのだな」

リアス「随分な物言いね私達が墮天使と組んで、聖剣をどうにかするだけでも…？」

ゼノヴィア「悪魔にとって聖剣は忌むべきものだ。墮天使との利害が一致するじゃないか」

その言葉を聞いたリアスは明らかに機嫌が悪くなった。まあ仕方ねえだろ…オレもキレそうだし

ゼノヴィア「もしそうなれば、我々はあなたを完全に消滅させる。たとえ魔王の妹だろうとな…」

リアス「そこまで私を知っているのなら言わせてもらうけど、私が墮天使なんかと手を組むことはないわ。グレモリーの名にかけて、魔王の顔に泥を塗るような真似はしない」

ゼノヴィア「それが聞けただけで十分だ。今のは本部の意向を伝えただけでね。魔王の妹がそこまでバカだとは思ってはいないさ。」

リアス「なら私達が神側、つまりあなた達にも協力しないことも承知しているわけね？」

ゼノヴィア「無論、この街で起こることに一切の不介入を約束してくれればいい」

リアス「…了解したわ」

ゼノヴィア「時間を取らせてすまなかった」

リアスが了承の返事をする、ゼノヴィアとイリナは立ち上がり去ろうとするが…

ゼノヴィア「！」

アーシア「？」

ゼノヴィアは立ち止まり、アーシアを見つめる

ゼノヴィア「兵藤一誠の家を訪ねたときもしやと思ったが…」

イリナ「ん？」

ゼノヴィア「アーシア・アルジエントか？」

アーシア「あ、はい…」

ゼノヴィア「まさかこんな地で、“魔女”に会おうとはな」

アーシア「ッ！」

アーシアを見ていきなり魔女と言い放った

イリナ「あー、あなたが魔女になったっていう元聖女さん？墮天使や悪魔をも癒す能力を持っていたために追放されたとは聞いていたけど、悪魔になっていたとはねー」

アーシア「あ、あの…私は……」

アーシアは下を向いてしまい肩を震わせている

ゼノヴィア「しかし聖女と呼ばれていた者が悪魔とはな、堕ちれば堕ちるものだ」

一誠「てめえ！いい加減にしろ、お前ら!!」

小猫「一誠先輩……」

ゼノヴィアとイリナに突っかかりそうになる一誠を小猫が止める

ゼノヴィア「まだ我等の神を信じているのか？」

イリナ「ゼノヴィア、彼女は悪魔になったのよ？」

ゼノヴィア「いや、背信行為をする輩でも罪の意識を感じながら信仰心を忘れられない者がいる。その子にはそういう匂いが感じられる」

イリナ「へー、そうなの。ねー、アーシアさんは主を信じているの？悪魔の身になってまで」

アーシア「…す、捨てきれないだけです…ずっと、信じていたのですから……」

イリナの質問に対しアーシアは返事を返すが、さつきよりも肩の震えは激しくなり涙も流しているようだ

ゼノヴィア「ならば、今すぐ我等に斬られるといい」

アーシア「ツ!!」

ゼノヴィア「君が罪深くとも我等の神は救いの手を指し伸ばしてくれるはずだ。せめて私の手で断罪してやろう。神の名の下にな」

リアス「そのくらいにしてもらえるかしら」

さすがにしびれを切らしたのか、リアスがゼノヴィアの言葉を止める

リアス「私の下僕を、これ以上貶めるのなら……」

ゼノヴィア「貶めているつもりはない。これは信徒として当然の情け」

バツ！

ゼノヴィアが不敵な笑いを浮かべ返答した瞬間、怒りを露わにした一誠がアーシアとゼノヴィアの間を割って入った

リアス「イツセー！」

朱乃「いけませんわ！」

アーシア「イツセーさん！」

一誠「アーシアを魔女と言ったな?！」

ゼノヴィア「少なくとも、今は魔女と湯葉れる存在にあると思「ふざけんな!!」…」

ゼノヴィアが言い終わる前に一誠がその言葉を遮る

一誠「自分達で勝手に聖女に祀り上げといて、アーシアはな…! ずっと一人ぼっちだったんだぞ！」

アーシア「イツセーさん…!」

ゼノヴィア「聖女は神からの愛のみで生きて行ける。愛情や友情を求めるなど、もとより聖女になる資格などなかったのだ」

一誠「何が信仰だ！何が神様だ！アーシアの優しさを理解できない奴らなんかみんなバカ野郎だ！」

それを聞いてアーシアもリアスも顔が少し明るくなる

蓮夜（一誠、いいこと言うじゃねえの）

ゼノヴィア「…君はアーシア・アルジェントのなんだ？」

一誠「家族だ！友達だ！仲間だ！お前らがアーシアに手を出すのなら、オレはお前らが全員敵に回しても戦うぜ!!!」

一誠はアーシアを守るため啖呵を切った

ゼノヴィア「ほう、それは私達が協会全てに対する挑戦か？一介の悪魔が大口を叩くね」

リアス「イツセー、おやめなさい」

蓮夜「いい加減にしろ」

ゼノヴィア「ん？」

蓮夜「話が終わったんならさっさと帰れよ。それなのにグダグダと。なに？お前らそんなに暇なの？」

イリナ「なんですって！」

ゼノヴィア「最初から気になっていたが、お前は何者なんだ。そんな幼女を膝に乗せて戯れている変態がなぜこんなところにいる？」

オレはこいつらの言っていることにイライラしてきたから、アンナを膝に乗せて頭を撫でながら癒されていた

ゼノヴィアがそう言った瞬間、オレの背後から2人に向かって強力な殺気が放たれた

『ツ！』

グレモリー眷属のみんなを含め全員大量の汗を掻いてその殺気に気圧されている

蓮夜「みんなよせ」

犬千代「でも、こいつら蓮夜のこと侮辱した…」

クロメ「今ここで殺つてもいんだよ…？」

蓮夜「大丈夫だから」

そう言ってみんなに殺気を抑えるようにする

蓮夜「こんなもんか」

ゼノヴィア「なんだと…」

ゼノヴィアは大剣を構えだす

蓮夜「そういうのを待ってたのがそこにいるみたいだぞ？」

オレはそう言いながらドアの方を指差す。全員がその方向に目をやる

祐斗「丁度いい、僕が相手になろう」

そこにはドアにもたれかかっている祐斗がいた

ゼノヴィア「誰だ、君は？」

祐斗「君達の先輩だよ…」

リアス「祐斗…」

第19話

会談を終了後、協会の2人と祐斗と一誠が戦うことになった。それを見届けるためオレ達も旧校舎の近くにある空き地へきている

朱乃「よろしいのでしょうか、勝手に教会の者と戦うなんて…」

リアス「これはあくまで非公式の手合わせよ」

リアスと他のグレモリー眷属のみんなは心配そうに見ている

イリナ「上にバレたらお互い面倒だし」

ゼノヴィア「死なない程度に、楽しもうか」

イリナは自分の左腕に結んである紐のようなものを変化させ、聖剣本来の姿に戻す。ゼノヴィアは大剣に巻きついている布を取っ払い構える。2人とも準備は整ったようだ。すると…

祐斗「ははは！」

ゼノヴィア「笑っているのか？」

祐斗「ああ、倒したくて壊したくて仕方なかったものが目の前にあるんだからね」

ジャキン！ジャキン！ジャキン！

祐斗が返答した瞬間、地面から何本もの剣が出現した

ゼノヴィア「魔剣創造か、思い出したよ。聖剣計画の被験者の中で処分を免れた者がいたという噂をね…」

祐斗とゼノヴィアは今にも始まりそうだ。一方で…

イリナ「兵藤一誠君！」

一誠「な、なんだよ！」

イリナ「再開した懐かしの男の子が悪魔になっていたんだなんて、なんて残酷な運命の悪戯！聖剣の適性を認められて遙か海外に渡り、晴れてお役に立てるよ思ったのに！はあー、でもこれも主の試練！でもそれを乗り越えることで、私はまた一歩真の信仰に近づけるんだわー！」

完全に自分に酔っている。てか早く始めろよ…

イリナ「さあ、一誠君！私のこのエクスカリバーで、あなたの罪を

裁いてあげるわー！アーメン！」

一誠「なんだかよくわかんねえが、ブースデッド・ギア赤龍帝の籠手！」

『Boost』

こつちもようやくはじまった

蓮夜「どう見る？ユウキ、雪菜、クロメ」

ユウキ「完全に先輩達の負けかな」

雪菜「そうですね。木場先輩は冷静さを失ってますし、兵藤先輩の方はそれ以前の問題かと…」

蓮夜「そうだな」

クロメ「でも相手も私達には到底及ばない」

蓮夜「お前らに勝てる奴がいたら大変だったの」

そんな感じで戦闘分析していると、なにやら必殺技のような掛け声が聞こえた

一誠「ドレスー！ブレイクー！」

イリナ「ひっ！」

一誠「まだまだ！」

イリナ「なんなのよー!!」

一誠は果敢にイリナに触れようとしているみたいだが、単調すぎてことごとく避けられている。一誠の顔を見ると絶対ロクでもない技なんだろうなとすぐにわかった

一誠「俺のエロをー！甘く見るなー！」

一誠はイリナに飛びついたが、イリナはしゃがんで避けたため一誠の伸ばした手はそのすぐ後ろで見ていた小猫とティナの触れてしまった

キイイイイイン！

一誠が触れた部分に魔法陣が出現し…

ドサツ！

一誠「いでっ！」

パチンツ！

一誠が地面に倒れこんだ瞬間、魔法陣が発動…
ビリビリビリビリ!!!

小猫「……………／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／！！！！！！！！」
ティナ「きやああああああ／／／／／／／／／／／／／／／／／！！！！！！！！」
2人の服が全て破かれた。オレは一誠が顔を上げる前に
ドガッ！

一誠「ぬわああああああああああ！！！！」

一誠を蹴り上げ、自分が着ていたブレザーをティナにシャツを小猫
にかけた

落ちて来た一誠にイリナは

イリナ「あのね、これは天罰だと思うの。だからこんな卑猥な技は
封印すること、いい？」

一誠「…………だ」

リアス「え？」

一誠「嫌…だ…」

一誠はその助言を断り、頭を上げてまだ何かを言おうとするが…
ガシッ！

蓮夜「てめえの意見なんてどうでもいいんだよ…」

オレは殺気を込めながらそう言い放ち、一誠の頭を掴み持ち上げる

一誠「あががががが！！！！」

ドゴッ！

オレの1割も出していないパンチを顔面に受ける

蓮夜「十六夜、わりーがそいつ半殺しにしてきてくれ」

十六夜「わかった」

十六夜は一誠の髪を引つ張り連れて行った

蓮夜「わりーが、手合わせはここまでにしてもらおう」

オレはそう言っただけ泣いているティナのもとに行く

蓮夜「ティナ、大丈夫か？」

ティナ「お兄さん…………」

オレに抱きついて泣いている。どうにかして泣き止んで欲しく考
えていたら、カナリアがオレの耳元で呟いた

カナリア「どこでもいいからキスしてあげて」ボソッ

蓮夜「はあ!?」ボソッ

が展開されジブリアルが現れる。その姿は天から舞い降りた天使そのものだった

ジブリアル「なにか御用でしょうか、マスター」

蓮夜「急に呼び出してすまないな。その教会の回し者の2人がオレにケンカ売ってきたから、どうせならジブリアルと戦わせようかなって…」

ジブリアル「ほう、人間ごときで我がマスターにケンカを吹っかけるとは…殺してしまっても構わないということでしょうか」

顔では笑っているが、完全にヤル気モードのスイッチが入ってしまったようだ。2人はというと…

ゼノヴィア「…そんな…まさか…」

イリナ「…嘘、でしょ…」

相当驚いているようで、持っていた聖剣ですら落としてしまっている

蓮夜「あー、一応殺しちゃダメだ」

ジブリアル「さすがはマスター！寛大なお心！ではどうか死なないように足掻いてご覧ください」

そう言った瞬間、一気に相当な殺気を放った。するとゼノヴィアとイリナは…

ドサッ！

ジブリアルの殺気にやられ倒れた

ジブリアル「この程度でマスターに…身の程を弁えていただきたいですね」

蓮夜「こんなことのために呼び出して悪かったな」

ジブリアル「いえ、マスターのご命令とあらば…」

ジブリアルはオレに向かって頭を下げてくる。

蓮夜「じゃありアス、後のこと頼んだ」

リアス「ええ、今日はありがとう」

そう告げてオレはみんなと帰宅した

第20話

ゼノヴィアとイリナが会談をしに来た次の日のお昼、オレは一誠に呼び出されてあるカフェに来ている。それとこの前初めて会った生徒会の唯一の男子である匙元四郎も来ていた

一誠「わりーな、呼び出しちまって」

匙「気にするな」

蓮夜「で、なんか用か？」

一誠はオレらを呼び出した理由を話し始めた

匙「しよ、正気かお前！」

一誠「頼む！この通り！」

一誠はテーブルに手をつき頭を下げる

匙「ふぎけるな！あ…」

大きな声を出したので周りの人に見られ、すぐに座る匙

匙「聖剣なんかと関わるだけで会長からどんだけ怒られるかってのに、それを破壊しようだと！それこそ殺されるわ！お前のとこのリアス先輩は厳しいながらも優しいだろうが、俺んとこの会長は厳しくて厳しいんだぞ！絶対に断る!!!」

ソーナは酷い言われようだな…そう言っつて匙は去ろうとするが、生垣を越えたあたりで進まなくなった

匙「ん…あれ？」

一誠「あん？あ！」

生垣の向こう側を見てみると、そこには小猫が巨大なパフエに向かいながら匙の制服の裾を掴んで止めていた

小猫「やはりそういうことだったんですね」

蓮夜「で、オレはなんで呼ばれたんだ？」

一誠「そりゃー、蓮夜にも手伝ってほしいからだよ！」

蓮夜「正直、オレにはどうでもいいことなんだが…」

オレは手を頭の後ろにやって目を閉じながらそう言うと、何かがおオレの体に引っ付いた感覚がした。目を開けて確認してみると小猫が抱きついていた

小猫「…兄様、お願いします…」

上目遣いをお願いされた

蓮夜「…わかったよ」

一誠「よっしゃー！」

あの小猫の上目遣いをお願いされたら断れんわ…

そして今度は小猫もあわせてどうするか一誠が意見を出した

小猫「協会側に協力？」

一誠「あいつら、聖剣を消滅させるとか言ってただろ？」

小猫「最悪破壊してでも回収したいようですね」

一誠「木場はエクスカリバーに勝って復讐を果たしたい。あいつらはエクスカリバーを奪い返したい。目的は違っても結果は同じ。だからこつちから協力を願ひ出るんだ」

蓮夜「素直に受け入れるとは思わんがな」

一誠「当たって砕けろだ！木場が今まで通り、悪魔を続けられるのなら思いつくことはなんでもやってやる！」

小猫「まずはあの2人を見つけなくちゃいけませんね」

小猫は立ち上がる

小猫「部長達に許可なく動くのは不本意ですが、仲間のためです」
蓮夜「オレはあの2人にいい印象持たれてないから行かない方がいいんじゃないか？」

小猫「兄様…」

蓮夜「うぐっ…」

また抱きついて上目遣いをしてきた

蓮夜「わかったからそんな顔すんな！」

小猫「く♪」

オレは抱きついてきた小猫の頭をわしゃわしゃする。意外と気持ち良さそうだ

そしてオレ達は教会の2人を探すため移動した

匙「…なあ、オレはいなくってもいいだろ？無敵のルークと無敵の

悪魔が参加してくれたんだからさ…」

一誠「戦力は多い方がいいんだよ」

匙は既にやる気を失っているようだ

蓮夜「なかなか見つからんな」

一誠「第一、こんな街中に白いローブを着たやつなんて…」

一誠がそう呟いた瞬間、オレ達は見た…

「えー、迷える子羊にお恵みをー」

「天の父に変わって我らにお慈悲をー」

一誠「…普通にいましたね」

小猫「はい」

オレ達は2人に声をかけ、腹が減ってるようなので近くのファミレスに入った

ファミレスに来たはいいのだが…

ゼノヴィア「美味しい！日本の食事は美味しいぞ！」

イリナ「これよこれ！ファミレスのメニューこそ私のソールフード
！」

蓮夜（どんだけ腹減ってたんだよ…）

ものすごい勢いで食べているから話をしようにもタイミングがな
い

ゼノヴィア「なんということだ…信仰のためとはいえ、悪魔に救わ
れるとは世の末だ」

イリナ「ああ、私達は悪魔に魂を売ってしまったのよ」

なんちゆうこと言ってるんだよ。奢ってもらっという

蓮夜「食い終わったんならさっそく話を聞いてもらおうぞ？一誠」

一誠「あ、ああ…オレ達はエクスカリバーの破壊に協力したい！」

ゼノヴィア「なに？」

その後、なぜこういう経緯に至ったかを一誠が説明した

ゼノヴィア「話は理解した。1本くらいなら任せてもいい」

イリナ「えっ?!?ちよつとゼノヴィア!」

一誠「マジで!?!」

意外な返答に一誠と小猫は驚き、匙は悔しそうにしている

ゼノヴィア「向こうは墮天使の幹部、コカビエルが控えている。正直、私達だけで聖剣3本の回収するのは辛い…」

イリナ「それはわかるわ!けれど…」

ゼノヴィア「無事生還できる確率は3割だ」

イリナ「それでも高い確率だと覚悟を決めて私達はやって来たはずよ!?!」

ゼノヴィア「ああ…私達は端から自己犠牲覚悟で上から送り出されたんだからな」

イリナ「それこそ信徒の本懐じゃないの…」

ゼノヴィア「そうだな。だがこの受け入れにはメリットがある」

ゼノヴィアがそう言うってオレの方に目を向けてくる

蓮夜「ん?」

ゼノヴィア「君は一体何者なんだ…?」

蓮夜「何者って、悪魔だけだ」

イリナ「じゃあなんで”あの方”があなたの味方にいるのよ!?!」

蓮夜「そりゃあ、あいつがそう望んだからだな」

ゼノヴィア、イリナ「…」

一誠「えっと、とりあえず協力を許してくれるんだよな…?」

ゼノヴィア「ああ」

ゼノヴィアはオレの方を見ながら一誠の問いに返事した

その後、オレ達は近くの公園に移動した。そこで祐斗と会った

祐斗「なるほど。でも正直、エクスカリバー使いに承認されるのは遺憾だね」

ゼノヴィア「随分な物言いだね。君はグレモリー眷属を離れたそうじゃないか」

それを聞いて祐斗は目つきを鋭くする

ゼノヴィア「はぐれとしてここで切り捨ててもいいんだぞ…？」
祐斗「そういう考えもあるよね」

2人は今にもやり合いそうな雰囲気になる。それを一誠が割って止める

一誠「待てよ！共同作戦前にケンカはやめろって！」

ゼノヴィア「君が聖剣計画を恨む気持ちは理解できるつもりだ」

祐斗は手に発動させていた魔法陣を解く

ゼノヴィア「あの事件…私達の間でも嫌悪されている。だから計画の責任者は異端の烙印を押され、追放された。」

イリナ「バルパー・ガレイ…皆殺しの大司教と呼ばれた男よ」

祐斗「バルパー…その男が…僕の同士を…」

ゼノヴィア「手先にはぐれ神父を使っていると云っただろう？」

一誠「フリードか…？」

ゼノヴィア「教会から追放されたもの同士が結託するのは珍しくない。今回の件にバルパーが関わっている可能性は高いな」

祐斗「…それを聞いて、僕が協力しない理由がなくなったよ」

どうやら話をついたようだ

ゼノヴィア「食事の例はいつか返すぞ、赤龍帝の兵藤一誠、永遠の皇帝の神崎蓮夜」

イリナ「うふっ♪」

ゼノヴィアがそう言い、イリナはウインクをして去って行った

一誠「ふー、よかったなーおい」

匙「よかったじゃねー！斬り殺されるどころか、悪魔側と教会側の全面戦争に発展してもおかしくなかったんだぞ！」

祐斗「一誠君…」

匙がキレてるところに祐斗がよってきた

一誠「お前には何度も助けられてるからな」

祐斗「君達は手を引いてくれ」

一誠「えっ!？」

蓮夜「あん？」

祐斗の発言に少しキレそうになる

祐斗「この件は僕の個人的な憎しみ、復讐なんだ。君達を巻き込むわけには…」

一誠「俺達眷属だろ！仲間だろ！違うのかよ!?!」

祐斗「…違わないよ。でも……」

祐斗が話しているのを遮り、一誠が祐斗の両肩に強く手を置く

一誠「大事な仲間をはぐれになんてさせるか！俺だけじゃねえ、部長だって悲しむぞ！いいのかそれで!?!」

祐斗「リアス部長…」

祐斗は一誠の言葉で思い出したのか、祐斗とリアスの出会いを話し出した。それを聞き終わると…

匙「うおー！木場ー！お前そんな辛い過去を…こうなったら会長のお仕置きがなんだ！兵藤！俺も全面的に協力させてもらうぜ！」

一誠「お、おう。そうか。サンキュー…」

匙が祐斗の過去を聞いて涙している傍で、小猫が祐斗の袖を掴んでいた

小猫「私もお手伝いします」

祐斗「小猫ちゃん…?」

小猫「祐斗先輩がいなくなるのは寂しいです…」

蓮夜「おい祐斗。小猫にここまで言われて断るわけないよな?」

祐斗は少し笑顔になる

祐斗「参ったな…小猫ちゃんにまでそんなこと言われたら、僕の人で無茶なんてできるわけないじゃないか…」

一誠「じゃあ!」

蓮夜「フツ」

祐斗「本当の敵もわかったことだし、みんなの行為に甘えさせてもらうよ」

ようやく、ここからだな

祐斗「蓮夜君…これまでのこと、すまなかった…」

祐斗はオレに頭を下げて謝罪してきた

蓮夜「仲間を大切にしろ…オレからはそんだけだ」

祐斗「ありがとう」

オレ達はこれより聖剣破壊計画を実行する

第21話

聖剣破壊同盟(?)を結成した次の日の夜、一誠達はすぐさま行動を起こすらしくと連絡が入った。オレは少し寄るところがあるから途中から加わることにした

蓮夜「少し出てくる。クロメ、シエーレ、一緒に来てくれないか」
クロメ「ん、わかった」

シエーレ「わかりました」

今回の付き添いにクロメとシエーレに頼む。人選はなんとなくだ

…

ユウキ「えー！なんでクロメなの!?ボクもー!」

クロメだけズルいと駄々をこねるユウキ

蓮夜「また今度な」

と頭を撫でてやると、「んー♪」と気持ちよさそうになり少しは機嫌を直してくれた

クロメ「ユウキはゆつくりしてて大丈夫だよ」ドヤア

蓮夜「お、おい…」

ユウキ「むう…なんかよくわかんないけどムカつくー!」

せっかくユウキの機嫌が直ったのに…

蓮夜「ほら行くぞ、2人とも。じゃあ行ってくるな」

クロメ「うん♪」

シエーレ「はい♪」

まったく、抱きついてルンルン気分になるようなところに行くわけじゃないのにな…

十六夜「蓮夜」

蓮夜「ん?どした十六夜」

十六夜「今回の黒幕の…なんてったつけ…?まあいいや、そいつ俺にやらせろ」

蓮夜「ん、別にいいぞ。現れたら呼ぶわ」

十六夜「サンキュー」ヤハハ

十六夜の鬨争本能丸出しの笑みを見て、オレ達は出発する

やって来たのはとある家

シエーレ「蓮夜さん、ここって…」

クロメ「この気配…」

蓮夜「2人が思ってるのはおそらくあってる」

何かを感じ取った2人にそう答え、目の前の家のインターホンを鳴らす

ピンポーン

『はい』

そこから聞こえてきたのは野太くオヤジ臭い声だ

蓮夜「オレだ」

『おう、空いてるから入ってきてくれ』

その返事を聞いて中に入ると付いてるか付いていないのかわからないぐらいの電気が付いている。そんな中をリビングのような部屋のドアを開ける。そこにはさっきの声の主だろうオヤジがソファ―に座っている

蓮夜「邪魔するぞ」

『おう。それで、話ってなんだ？蓮夜』

クロメ「ねえ、蓮夜。このおじさん誰？」

『おじさん!?!』

シエーレ「クロメ、その言い方は失礼なのは…?」

クロメの発言にげんなりするオヤジが1人

蓮夜「ああ、2人ともこいつが”ただの人間じゃない”ってのはわかるだろ?」

クロメ、シエーレ（コクッ）

『おい、蓮夜…こいつって…』

蓮夜「やかましい。こいつはこれでも”墮天使の総督”なんだ」

2人はそれを聞いて少し驚いたようだが、すぐに平常になった
クロメ「じゃあこの人があの”アザゼル”?」

シエーレ「クロメ、一応様をつけたほうがいいと思いますよ?」

蓮夜「こんなやつに様なんでつけんでいい」

アザゼル「おまつ!はあ:まあいい。で、要件は?」

蓮夜「今この町で起きてること知ってんだろ?」

アザゼル「:一応な。だが今回のことは完全なコカビエルの独断だ」

蓮夜「オレが聞きたいのは、コカビエルを消していいのかという確認だ」

アザゼル「:すまんが、できれば生け捕りにしてほしい。こっちらも使者を送る」

蓮夜「善処しよう:だが約束はできない」

プルプル

オレがそう言い終わると携帯がなった。ポケットから取り出し画面を見ると小猫からだった

ピッ

蓮夜「もしもし、小猫か?」

『兄様、すぐに来てほしいです!』

蓮夜「ん、わかった。少し待ってろ」

ピッ

オレは携帯を切る

蓮夜「ということでオレ達は行く」

アザゼル「ああ」

そう告げてアザゼルの家を後にして小猫の気配がする方へ向かった

小猫達がいると思われている場所へ到着すると
『ソードバース
魔剣創造!!』

既に戦闘は始まっているようだった

蓮夜「おつす、お待たせ」

一誠「蓮夜！」

小猫「兄様！」

姿を見せると小猫が走って寄って来た

蓮夜「連絡ありがとな、小猫」

小猫「はい！」

蓮夜「状況は？」

小猫「あそこにいるはぐれ悪魔祓い（エクソシスト）が聖剣を所持しています。今は一誠先輩からドラゴンの力を譲渡された祐斗先輩が戦ってる最中です」

蓮夜「了解」

小猫から現状を聞き終えた頃、建物の中から声がした

「ソードパース魔剣創造か」

祐斗「誰だ!?!」

声の主が暗闇の中から姿を現した

「使い方次第では無敵の力を発揮する神セイクリッド・ギア器だ。フリード、まだ聖剣

の使い方がなっていないようだな」

フリード「おお、バルパーの爺さん」

祐斗「なに!!」

一誠「それじゃあこいつがゼノヴィアが言ってた!」

小猫「聖剣計画の首謀者」

匙「!」

祐斗「バルパー・ガリレイ!!!」

バルパーが現れたことによって怒りが込み上げてきたのか、祐斗の目つきが変わる

バルパー「いかにも」

フリード「そう言うがね爺さん、このクソトカゲのベロベロが邪魔で邪魔で!」

そういえばフリードの足に絡みついているものはなんだ？見るからに匙の神器みたいだが

バルパー「自分に流れる因子を刀身に込めろ」

そう聞かされて実行するフリード

蓮夜「へえ」

一誠「気をつけろ！ヤバいぞ!!」

聖剣は光輝く。フリードがそれを振り下ろすと足に絡みついていたものを簡単に斬った

匙「うおっ！」

フリード「これでパワーアップってか？それじゃあ…」

そう言っつてフリードは振り返り、祐斗に襲いかかる

フリード「聖剣の餌食になってもらいましようかあああ!!」

フリードは飛び跳ね、祐斗に向かって聖剣を振り下ろす

ジャキン!!!

それは祐斗の顔の正面で”巨大なハサミ”によって止められた

フリード「あれー？」

止めていたのはシエーレだった

蓮夜「おい祐斗、そいつの聖剣シエーレが破壊してもいいか？」

祐斗「蓮夜君…しかし…」

蓮夜「しかしもカカシもないんだよ。いいのか？悪いのか？」

焦れつたくなってきたので、少し殺気を出しながら聞き直した

祐斗（コクツ）

祐斗は黙って頷いた

蓮夜「シエーレ、やっていいぞ」

シエーレ「わかりました」

シエーレはオレの言葉を聞き、1度剣を弾く

フリード「うおっ！」

弾かれたことでフリードは態勢を崩してしまう

シエーレは素早くフリードの前に移動し、自分の神器である万物両

断【エクスタス】でフリードの持っている聖剣を挟み、

バキイイイン!!!

そして砕いた

フリード「ギヤアス!!!」

バルパー「なん、だど…」

ゼノヴィア「なにがあつた！」

それと同時にゼノヴィアとイリナも到着したようだ。おそ…

バルパー「おいフリード！ここは一旦引くぞ！」

フリード「が、合点!!!」

フリードとバルパーは聖剣を砕かれて勝機がなくなったのを認識したのか、目くらましを使い逃げた

ゼノヴィア「くそ！追うぞイリナ！」

そう言ったゼノヴィアを先頭に祐斗とイリナが2人を追いかけて行った。ちなみにオレとシエーレ、クロメは当然見えていた

その後リアスとソーナがそれぞれ自分の女王を連れて転移して来て、一誠と匙がお仕置きとして尻叩きをくらっていた。オレはというと…

蓮夜「シエーレ、ご苦労さん」

聖剣を破壊してくれたシエーレの頭を撫でて労っていた

シエーレ「ウフフ♪」

クロメ「…ズルい」

逆にクロメは少し御機嫌斜めになっていた

そしてオレらはリアス達に声をかけ、帰宅した

次の日にリアスから瀕死の状態で倒れていたイリナを保護したと連絡があった。そして黒幕、コカビエルと会的したとも…どうやらコカビエルはこの町で戦争を起こそうとしているらしい。それを聞いたオレは久々に

キレた…

第22話

オレは現在眷属のみんなを連れて駒王学園に向かっている。小猫からコカビエルは今駒王学園にいるらしいと連絡を受けたからだ。学園に着くとそこには結界が張られておりソーナとその眷属達はその結界を支えているようだ

蓮夜「ソーナ」

ソーナ「蓮夜さん」

蓮夜「遅れた。入れてくれ」

ソーナ「はい。中では既にリアス達が戦闘を開始している模様です」

蓮夜「わかった。結界の方は大丈夫なのか」

ソーナ「…悔しいですが、正直墮天使の幹部クラスの攻撃を受けたらひとたまりもないでしょう」

蓮夜「了解だ。深雪、黒歌、レム、アンナ、ジブリールはここで結界の方を手伝ってやってくれ」

深雪「わかりました」

黒歌「わかったにや。白音をお願いするにや」

レム「こちらはお任せください」

アンナ（コクツ）

ジブリール「かしこまりました」

オレは5人に指示し、他のみんなを連れて中へ入った

中ではソーナに聞いた通りリアス達が戦闘中のようなようだ。そのまま直進しているといきなり特大な魔力の塊がこっちに近づいてきた

蓮夜「おいおい、あれこっちに落ちてきてねえか？」

雪菜「そのようですね」

いくらか巨大ではあるが全員焦ってはいない。まあ当然か

蓮夜「達也、いいか？」

達也「わかった」

オレの頼みに達也は簡単な返事をして自分の胸のところにあるホルスターから銃型の神器を取り出し、近づいてくる魔力に向かって引金を引く。するとそれは跡形もなく消えてしまった。いや、”分解”されてしまった

コカビエル「何者だ？こいつらの仲間か？」

蓮夜「どうも。まあそんなところだ」

なんか偉そうに踏ん返り返ってるコカビエルに一応返事といったバルパー「完成だ！」

祐斗「しまった！」

ゼノヴィア「クツ!!」

その声と共に光が辺りを覆い、その発光現には聖剣よりも少しばかり聖の気が強い剣があった

バルパー「はははは！これでついに!!!」

その光は柱のように空へと続いて行く

コカビエル「ははははは！ではこちらも新たに増えたことだ、余興を続けようじゃないか!!」

そう言つてコカビエルは腕を前に出す。すると地面に魔法陣が出現しそこから頭が3つある犬つころが4匹出てきた

リアス「またケルベロス！」

犬千代「また？」

朱乃「さつきも私達はケルベロスと戦っていたのです…それがまた……」

そんな説明を聞いているとその犬つころがどもがこつちに襲いかかってきた

蓮夜「はあ…んじやあユウキとクロメが右の、タツマキは真ん中の右、犬千代とティナは真ん中の左、達也は左。雪菜とシエーレは聖剣の方よろしく。」

オレの指示に対しみんな素早く行動する

ユウキ「はああああ!!!」

クロメ「…」

犬つころの正面からユウキが気合の入った突きをひと突き。そして横からクロメが上から下に一太刀入れて戦闘は終了した

グオオオオオオオ!!!

タツマキ「うっさいわよ!」

犬つころの遠吠えにイラついたタツマキは能力でそいつを勢いよく空高くまで上げ、そして一気に急降下させ地面に激突させる。はい終了

犬千代「ていつ!」

犬千代が犬つころの足を全て切り落とし

パアアアアアン!!!

ティナが打った弾が3つの頭がそれぞれの脳天を貫き終了

達也「…」

達也の方は既に終わっていたようで、影も形もない相手に神器を向けて立っている達也が目に入る

蓮夜「みんなお疲れ。わかつてはいたが速いな」

全ての戦闘：いや、戦闘と言えないな。蹂躪が完了したのは始まって30秒も立っていないかった

コカビエル「ははははは!!これはおもしろい、おもしろいぞ!!!」

蓮夜「うるせえな。リアス、あいつもう殺つていいか?」

リアス「待つて!これは私達にやらせて!」

蓮夜「お前らにできんのか?」

リアス「お願いよ…」

リアスは真っ直ぐな瞳でオレを見てきた。それぐらい本気なのであろう

蓮夜「わかった。だがムリはするな。できなければオレらがやる」

リアス「ええ、ありがとう」

コカビエル「ほお、お前がくるのか?リアス・グレモリー。お前らにこのオレを楽しませられるのか?」

リアス「っ!くらいなさい!」

リアスはさつきオレ達が見たのと同等の魔力を放つ。しかしそれ

は簡単に受け止めてしまった。続いて朱乃も攻撃を試みたが、それも受け止めてしまった。しかもコカビエルはその受け止めた魔力を合わせリアスに放った

朱乃「部長！」

朱乃がそれを庇って防御しようとしたが

朱乃「きやああああああ！」

防壁は簡単に破れもろに食らってしまった。攻撃を受けた朱乃が落下していく

バシッ

地面に叩きつけられる前にオレが抱き抱える形で助ける

蓮夜「大丈夫か？」

朱乃「…ごめんなさい」

蓮夜「大丈夫だ。カナリア頼む」

カナリア「うん！」

蓮夜「リアスも降りてこい」

リアス「…わかったわ」

カナリアはオレの言いたいことがわかったのかカナリアの神器であるマイクを持って歌い始めた。するとリアスと朱乃の傷はみるみる治っていく

リアス「これは…」

朱乃「あらあら…」

蓮夜「カナリアの神器の能力、愛を唄う者〔ハートウォーミング〕だ。こいつが歌うと怪我は治るし体力や魔力は回復する。じゃありアス、あいつはオレらが始末するぞ」

リアス「…ええ。悔しいけどお願いするわ」

蓮夜「てなわけだ。十六夜、あとやっていいぞ」ニヤッ

十六夜「待ってました！じゃあ、遠慮なく！」

そう言って十六夜はコカビエルの方に向かって行く

蓮夜「そうだ！」

オレは振り向き、朱乃の頭に手を置いて

蓮夜「よく主人を守ったな」

そう言つて頭を撫でてやった

『あー!!!』

蓮夜「ん？」

ユウキ「蓮夜！ボクも頑張ったよ!?だからボクにも！」

クロメ「私も…！」

ティナ「お兄さん…」

犬千代「蓮夜…！」

タツマキ「なにやってるのよ！あんたは！」

なぜかおねだりされたり、怒られたり、涙目で抱きつかれたりされた。ちなみに朱乃は顔を赤くして俯いてしまった

蓮夜「お前ら落ち着け！これから十六夜のひまつ…戦いを見なきやいけないだろ!?達也とリアスも見えてないで手伝え！」

達也、リアス「はあ…！」

蓮夜（なんだその溜息は！）

もういいやと思ひ十六夜の方に目を向けるとまだ始まつてはいなかつた

コカビエル「今度はお前が相手か？」

十六夜「ああそうだ」

コカビエル「では少しでも楽しませてくれ！」

十六夜「ヤハハ！」

そして戦闘は開始された。つておいおい、遊ぶ気まんまんだな。こりやあ長引くか

そう言えば雪菜達はどうなったんだ？

第23話

十六夜とコカビエルの戦闘が始まったころ聖剣側では…

バルパー「君らには感謝している。おかげで計画が完成したのだからな」

祐斗「完成…?」

バルパー「君達の持つ因子は聖剣を扱うまでの数値にならなかった。そこで1つの結論に至った。被験者から因子だけを抜き出せばいい！」

祐斗「っ!!」

バルパー「そして結晶化することに成功した。これはあのときの因子を結晶化したものだ」

バルパーはそう言って自分の懐からガラスのようなものを取り出した

バルパー「最後の1つになってしまったがね！」

フリード「キャハハハハハハ!!俺以外の奴らは因子に身体が追いつかなくて死んじまったんだぜ！」

フリード残りの聖剣が全て融合した剣で一誠達に襲いかかる

バルパー「偽善者めが！私を追放したのに私の研究は取り上げていきおった。どうせあのミカエルのことだ、被験者から因子を抜き出しても殺してはいないだろうがな！はははははは!!」

祐斗「僕らを…殺す必要は、なかったはずだ…どうして！」

バルパー「お前らは極秘実験の実験材料だ。用済みになれば廃棄するだろう」

祐斗「僕たちは主のためと信じてやってきたんだ…それを…それを…実験材料に廃棄…?」

アーシア「ひどい…」

リアス「…」

アーシアはそれを聞いて涙を流す。リアスも暗い顔で俯いている。するとバルパーは持っている結晶化された因子を祐斗の前に放り投げた

バルパー「欲しければくれてやる。もはやさらに完成度の高いものを生産するところまでできているのでな」

祐斗はそれを拾い、何かを思い出すように両手に握りしめる

祐斗「みんな…」

一誠「許せねえ…じじいてめえ!!」

祐斗「バルパー・ガリレイ…あなたは自分の研究、欲望のためにどれだけの命を弄んだ」

祐斗が手を握りしめたまま立ち上がると、祐斗の手の中が光り出しそれはやがて祐斗の周りに人のような形を作った

祐斗「僕は、ずっと…ずっと思っていたんだ。僕が、僕だけが生きていていいのかって…僕より夢を持った子がいた。僕よりも生きたかった子がいた。僕だけが平和な暮らしをしていていいのかって…」
ああ、そういうことね。まったく

蓮夜「いいに決まってるんだろ」

祐斗「…蓮夜君」

蓮夜「そいつらはなんのためにお前を逃したと思ってるんだ？復讐のためか？オレはそうは思わない」

オレは一呼吸置いて続ける

蓮夜「そこにいるやつらはこう思ってたんじゃないか？」自分達の方も生きてくれ”ってさ」

そう言い終わると祐斗は涙を流し、周りにあつた光が祐斗を覆った小猫「暖かい」

一誠「なんだ？涙が、止まらない！」

クロメ「蓮夜、あれ」

蓮夜「ああ、”至った”な」

やがて光は消え、祐斗はなにか吹っ切れたのか顔つきが変わる

祐斗「蓮夜君に言われて気づいたよ。あの子達は復讐なんて望んでいなかった、願ってなかったんだ。でも僕は目の前の邪悪を討ち倒さなければならぬ…第2、第3の僕達を生み出さないうちに！」

そう言つて祐斗は神器を発動し剣を持つ

バルパー「フリード！」

フリード「はいな！」

呼ばれたフリードが間に入る

バルパー「ふん、愚か者めが。素直に廃棄されていればよいものを！」

一誠「木場あああ！フリードの野郎とエクスカリバーをぶつ叩け！あいつら思いを無駄にするな!!」

祐斗「一誠君……」

リアス「やりなさいユウト。あなたはこのリアス・グレモリーの眷属、私の眷属はエクスカリバーごときに負けはしないわ！」

朱乃「祐斗君！信じてますわ！」

小猫「フアイトです！」

アーシア「木場さん！」

祐斗「みんな……」

フリード「あー、なーに感動シーン作っちゃってんですか？僕ちゃんもう限界。とっとと君らぶった斬って気分爽快になりましょうかねー！」

フリードも剣を構える

蓮夜「雪菜とシエーレは手え出さなくていいぞ」

雪菜「わかりました」

シエーレ「はい」

さて、祐斗の新たな力を拝見しますかね

祐斗「僕は剣になる。僕の魂と融合した同志達よ、一緒に越えよう。

あのときの果たせなかつた想いも願いも今部長やみんなのために……
魔剣創造!!!
ソード・パース

祐斗がそう唱えると白と黒の剣が出現した

祐斗「双覇の聖魔剣【ソード・オブ・ピストレイヤー】……聖と魔を有する剣の力、受けるといい！」

バルパー「聖魔剣だと！ありえない！反発する2つの要素が混じり合うなど、そんなことあるはずがないのだ！」

蓮夜「へえ、あれが……」

雪菜「あれが木場先輩の……」

シエーレ「バランスブレイカー禁手ですか」

ゼノヴィア「グレモリー眷属のナイト、まだ共同戦線は活きているか？」

祐斗「…だと思いたいね」

ゼノヴィア「ならば共に破壊しよう、あのエクスカリバーを…」
いつの間にやらゼノヴィアが祐斗の隣を歩いている

祐斗「…いいのか？」

ゼノヴィア「あれはもはや聖剣であって聖剣ではない。異形の剣だ」

祐斗「わかった」

グサツ！

ゼノヴィアは自分が持っている聖剣を地面に刺し、右腕を横に上げた

ゼノヴィア「ペトロ、パシリオス、デュオニシウス、そして聖母マリアよ：我が声^に耳を傾けてくれ」

ゼノヴィアがそう唱えると光る魔法陣が展開され、そこから鎖で繋がれた剣が出てきた

ゼノヴィア「この刃に宿りし^{セイラント}聖闘士の御名において、我は開放する！」

ジャキイイイイイン！！

最後の詠唱を終え鎖から解き放たれた剣をゼノヴィアは取って構える

ゼノヴィア「聖剣”デュランダル”！」

蓮夜「ほお、これはまた…」

また珍しいものが出てきたことにオレはそんなことを呟いた

バルパー「馬鹿な！私の研究ではデュランダルを扱える領域まで達していないぞ！」

ゼノヴィア「私はそいつやイリナとは違う。数少ない天然物だ」

バルパー「完全な適正者、真の聖剣使いとでも言うのか！」

ゼノヴィア「こいつは触れたものはなんでも切り刻む暴君でね…私の言うことも碌に聞かない。それゆえ異空間に閉じ込めておかない

と危険極まりないんだ」

フリード「そんなのありですかー!!!」

キイイイイイン!!

ここにきて新たな聖剣が、しかも伝説とまで言えるものが出てきたことに苛立ちを見せるフリードがゼノヴィアに斬りかかるが、それはデユランダルによって簡単に砕かれた

フリード「ここにきての超展開!!」

ゼノヴィア「所詮は折れた聖剣!この聖剣デユランダルの相手にはならない!!」

フリード「クソツタレ!!!」

ヒュン!

斬りかかるゼノヴィアに対し速度を上げ回避するフリード

フリード「そんな設定いらねんだよ!」

しかしその背後には祐斗が迫っていた

祐斗「そんな剣で!!」

ガキイイイン!キイイイン!!

祐斗「僕達の想いは断てない!!!」

バキイイイイン!!

そして何度めかの斬り合いで祐斗がフリードの剣を折った

フリード「折れたああああ!!」

そしてフリードは地面に膝をつく

フリード「マジですか…?この俺様がこんなクソ悪魔ごときに…!

ざけん…グアっ!」

ザシユツ!

フリードは肩を斬られたようだ

祐斗「はあ…はあ…見ていてくれたかい?僕らの力はエクスカリバーを越えたよ!」

バルパー「なんとということだ!聖と魔の融合など理論上…!」

ジャキイイン!

バルパー「ヒイツ!」

祐斗「バルパー・ガリレイ!覚悟を決めてもらおう!」

バルパー「そうか！わかったぞ！聖と魔、それらを司るバランスが大きく崩れているのであれば説明がつく！つまり魔王だけではなく、神も……！」

ジャキイーン!!

その言葉が終わる前にバルパーに光の槍が突き刺さった。そしてバルパーは光となって消えてしまった

蓮夜「おいおい十六夜、なにやってんだよ」

十六夜「ヤハハ、ちつと遊びすぎたわ」

バルパーに光の槍を投げたのは仲間であるはずのコカビエルだった

コカビエル「バルパー、お前は優秀だったよ。そこに思考がいくのも優秀であるということだろう」

リアス「コカビエル、これはなんの真似？」

コカビエル「オレはそいつがいなくても別にいいんだ。さて、余興にも飽きた。そろそろ戦争のための準備をするとし……」

ドゴツ!

コカビエル「グハツ!!」

コカビエルは頭上から殴られ勢いよく地面に衝突した。殴った正体はもちろんオレ

蓮夜「戦争？やらせるわけねえだろ……十六夜、遊びは終わりだ。お前がやらないならオレがやる」

十六夜「いや、わりーがオレにやらせてくれ」

蓮夜「なら最初からやれよ」

十六夜「ヤハハ！」

そしてオレは祐斗のもとへ行き

蓮夜「悪かったな。バルパーにとどめをさせてやれねえで」

祐斗「大丈夫だよ。第2、第3の僕達を増やすのを防げたのは同じだから」

蓮夜「サンキユな。まああとはゆつくりしてくれ。そのうち終わるから」

祐斗「じゃあお言葉に甘えさせてもらおうよ」

祐斗はそう答えてリアス達のもとへ戻って行った

蓮夜「さて、あとはこのままにも起きないで終わってくれるのを
祈るだけだな」

ヤベツ！今オレフラグ立てた!?

第24話

さて、十六夜とココビエルが戦い始めて数分が経った
ココビエル「ぐああああ!!」
もう何度目だろうか。ココビエルが吹っ飛ばされているのを見るのは…

ココビエル「はあ…はあ…おもしろい、おもしろいぞ!!これが戦闘だ!!」

十六夜「うるせえ!」

ドゴツ!!!

ココビエル「グハツ!!」

十六夜のアツパーにより上空へ舞い上がるココビエル

ココビエル「ふふふ…ははははは!!お前最高だ!この高揚感は魔王以上だぞ!!」

十六夜「そうかよ」

ココビエル「だが本当にここにいる連中はよくここまで戦うものだ。特にその聖剣使いはな!」

蓮夜（おいおい、まさか言うつもりか?）

ココビエル「仕える主はもういないというのに」

ココビエルが言った一言にここにいるほとんどのやつに衝撃が走る

リアス「っ!?!?!どういこと!?!」

ゼノヴィア「ココビエル!主がいらないとはどういうことだ!」

ココビエル「おっと口が滑った」

ゼノヴィア「答えろ!!ココビエル!」

特に協会側のゼノヴィアはそれを聞いて興奮している

ココビエル「ははははは!!そうだな、そうだった。戦争を起こそうとしているのに今更隠す必要はなかったな。先に三つ巴の戦争で四大魔王と共に神も死んだのさ!!」

『っ!!!』

オレ達以外の奴らは驚愕の顔をする。当然か…

ゼノヴィア「う、嘘だ…」

リアス「神が…死んでいた…馬鹿なことを、そんな話聞いたこともないわ!」

コカビエル「あの戦争で悪魔は四大魔王と多くの上級悪魔を失った。墮天使も幹部以外のほとんどを失った。もはや純粋な天使は増えることすらできず悪魔とて純血種は貴重なはずだ」

アーシア「…そんな…そんなこと…」

これまでずつと主のことを信じてきたアーシアにとってはショックが大きいようだ

コカビエル「どの種族も人間に頼らねばならないほど落ちぶれた。天使も墮天使も悪魔も。三大勢力は神を信じる人間を残すためにこの事実を封印したのさ」

それを聞いた瞬間ゼノヴィアは地面にへたりついてしまった

ゼノヴィア「嘘だ…嘘だ…」

コカビエル「そんなことはどうでもいい。オレが耐え難いのは神と魔王が死んだことで戦争継続は無意味だとなり戦争が終局したことだ!耐え難い!耐え難いんだよ!!」

アーシア「主はもういらつしやらない…じゃあ私達が捧げる愛は…?」

コカビエル「ふつミカエルはよくやっているよ。神の代わりに天使と人間をまとめているのだからな」

蓮夜（あ、そんな中ジブリアル取っちゃったのオレだ…）

ゼノヴィア「大天使ミカエル様が神の代行だと…では、我等は…」

コカビエル「システムさえ機能していれば神への祝福も悪魔祓いもある程度操作できるしな」

アーシア「っ!」

一誠「アーシア!」

アーシアはショックのあまり倒れそうになる

ゼノヴィア「無理もない…私だって理性を保っているのが不思議なくらいだ…」

コカビエル「聖と魔を司る者がいなくなったためにそっちのやつのようなイレギュラーが存在する。本当なら聖と魔が融合することはありえないからな。そしてオレはお前らの国を土産に新たな戦争を引き起こす!!」

リアス「また、つまらない意地を張って…私のせいで…」

一誠「ふざけんな!!お前の勝手な言い分で俺達の街を、仲間達を消されてたまるかあ!!」

一誠が思いをぶちまける

一誠「それに俺はな、ハーレム王になるんだ!!!お前なんか計画を邪魔されたくねえんだよ!」

犬千代「…台無し」

ごもつとも。しかし…

蓮夜「あちよつといいか」

リアス「蓮夜?」

蓮夜「とりあえず神はいない。これは事実だ」

ゼノヴィアは絶望の顔をする

蓮夜「だがな、別に祝福が受けられないわけじゃねえ。ジブリアル」

ジブリアル「はい、マスター」

オレが名前を呼ぶとすぐにジブリアルが現れる

ゼノヴィア「あなた様は…」

コカビエル「!まさか!!」

蓮夜「そのまさかだろ。ジブリアル、お前”天界”にいたときどんな立場だったっけ?」

ジブリアル「私は嘗て神と並ぶに値する者として扱われていました」

『っ!!』

ジブリアルの言ったことにまたもやみんなが驚愕する

蓮夜「じゃあミカエルから許可もらえればお前を神として扱っていいってことだよな?」

ジブリアル「その通りでございます。しかし今はマスターの眷属となった身ですので天界の事情に口を出すことはできないと思います

が…」

蓮夜「それだけわかれば十分だ。ありがとう」

ジブリール「いえ♪」

お礼の意味でジブリールの頭を撫でる

蓮夜「今聞いた通り神はいないがその神と同等のやつならここにいます。これが終わったならミカエルに許可をもらいに行ってくる。そうすればみんな今まで通り祈りを捧げることができる」

じゃあ今までなんでやってこなかったのかっていう質問はやめてほしい。ただ単に忘れてたなんて言えない…

蓮夜「さて話すことも終わったしそろそろ終わりにしてくれないか？十六夜」

十六夜「もうちよつと遊びたかったけどな。しょうがねえ」

蓮夜「あ、殺すのはダメらしい」

十六夜「マジか!?わかったよ」

これでやつと終わるなあ

コカビエル「既に勝ったつもりとは…舐められたものだ！」

十六夜「はっ！そんなことやる前からわかってたことだ」

コカビエル「舐めるな小僧！」

光の剣を持ち十六夜に斬りかかるコカビエル。しかし…

十六夜「しやらくせえ！」

十六夜はパンチでその剣を破壊し、さらにもう1発、今度はコカビエルの顔面に直撃した

コカビエル「ガハッ!!!」

さつきよりの威力は強かったのでコカビエルは意識を失い戦闘不能となった

蓮夜「はあ長った。十六夜おつかれ」

十六夜「別に疲れてねえよ」

蓮夜「そんなこと知つとるわ」

蓮夜（ん?）

そんな会話をしていると頭上に気配を感じる

「ほお墮天使の幹部を軽々とか…」

十六夜「なんだありや？」

「アザゼルの使いできた。よければこの結界を解いてくれないか」

蓮夜「あ、ああ。みんなもういいぞ」

そう言うともみるみる結界が消えていく

そして声の発生源が降りてきた

リアス「あれは！」

朱乃「白龍皇！」

蓮夜「お前か」

白龍皇『コカビエルとあそこのはぐれ被いは引き取らせてもらう』

蓮夜「ああ、オレは問題ない。リアスもそれでいいか？」

リアス「え、ええ…」

白龍皇『では…』

白龍皇が2人を抱え帰ろうとすると…

『無視か白いの』

一誠の籠手から声がする

白龍皇『生きていたか赤いの』

どうやら赤龍帝と白龍皇の対面らしいな

それからしばらくして白龍皇は飛んでいきコカビエルとの戦闘は終わった。しかしオレはその後ジブリアルを連れて天界に行つてミカエルと会いいろんな設定をしなければいけないし、帰ったら帰つたらで学校の修復を手伝えと休まる時間はなかった…

停止教室もヴァンパイア 第25話

コカビエルとの戦闘から一夜明け、オレは生徒会室に来ていた

蓮夜「ソーナ来たぞー」

深雪「蓮夜さん！」

蓮夜「おお深雪、お仕事お疲れさん」ナデナデ

深雪「んっ：はい♪」

ソーナ「お待ちしておりました」

深雪と戯れているとソーナが奥の部屋から出て来た

蓮夜「その他人行儀止めろ」

ソーナ「ふふっ、これは癖のようなもので我慢してください」

蓮夜「はあ、で？オレに用ってなんだ？」

ソーナ「もうすぐプール開きになります。それに伴いプールの掃除をしなくてはなりません。いつもは我々生徒会がその任を受け持っています。今回は先日の騒動の件もありオカルト研究部の皆さんにお願いをしました」

ソーナはメガネをクイツとあげ続ける

ソーナ「そこであなたにも手伝って欲しいのです」

蓮夜「マジカー」

ソーナ「もちろんタダでは言いません。掃除後のプールで遊んでもらって構いません」

蓮夜「それはユウキ達が喜びそうだな」

深雪「そうですね」

蓮夜「でもなー」

ソーナ「何かご予定が？」

蓮夜「いや掃除は別にいいんだけど…プールで遊ぶってなったら水着だろ？」

ソーナ「そうですね」

蓮夜「深雪達の水着姿を見せたくねえ」

だって一誠いるし…

深雪「蓮夜さん／＼／」

深雪はなんで顔を赤らめる？

深雪「でも皆さん遊びたいと思いますよ？」

蓮夜「…そうだな。んじやまあ引き受けた」

ソーナ「ありがとうございます」

蓮夜「んじやあ帰るか。深雪はもう帰れんのか」

ソーナ「ええ」

深雪「会長、でもまだ仕事が…」

ソーナ「あとは私達でも片付けられます。深雪さんはもう大丈夫ですよ」

深雪「でも…」

深雪は本当にいいやつだな

蓮夜「深雪、時には人に頼るのも大事だぞ？」

深雪「…そう、ですね。わかりました。会長、後のことはよろしく願います」

深雪は丁寧に礼をしながらそう伝えた。オレもソーナに挨拶をして生徒会室を出た

帰宅中深雪はずっと満面の笑みだった

ー次の休日ー

オレはそんなに人数もいらなだろうと思い、プールで遊びたいやつでついで何人かを連れて学校のプールに来た。オカルト研究部のみんなは既に集まっていた

ゼノヴィア「なぜオカ研がプール掃除をするんだ？」

リアス「本当は生徒会の仕事なのだけど、コカビエルのことがあったから今年はこちらが担当してあげることにしたの。でもみんなより一足先にオカルト研究部だけのプール開きよ」

一誠「プール開き!!」

蓮夜「オレ達もいるけどな」

一誠「うおおお!!ビバプール掃除!プール掃除万々歳だぜ!!」

小猫「一誠先輩顔がいやらしいです」

蓮夜「一誠先に言つとくぞ。うちの連中や小猫を変な目で見てみる?海に沈めるからな」

オレは最後の方をドスの効いたこれで言い放つ

一誠「ひゃい!!!」

リアス「さあオカルト研究部の名にかけて生徒会が驚くほどピカピカにするのよ!」

全員『はい!』

ー更衣室(男子)ー

一誠「水着だ水着だ!」

祐斗「イツセー君」

一誠「ん?」

祐斗「僕は誓うよ。たとえ何者かが君を狙っていたとしても僕は君を守るから」

一誠「うおっ!なんだよ急に!」

そういうのって男同士で言うものなのか?

祐斗「君は僕を助けてくれた…君を助けないでグレモリー眷属の騎士は名乗れないさ」

普通は王を守るんじゃないのか?

蓮夜「じゃあオレお先な」

一誠「おい!蓮夜!」

オレは先に更衣室を出ていく

ー更衣室(女子)ー

ユウキ「プール楽しみだなあ…ねえカナちゃん!」

カナリア「そうだねユウちゃん!」

雪菜「お二人ともまずはお掃除ですよ」

ユウキ「わかつてるよー。相変わらず雪菜は真面目だなあ」

クロメ「雪菜は蓮夜に水着姿見てもらいたいだけ」

雪菜「ちよつ！クロメさん!!なななに言ってるんですか!!私は…そんな、こと……」

犬千代「…昨日の夜すごい真剣に選んできた」

雪菜「犬千代さんまで!!」

みんなにいろいろ指摘されどどん顔を赤くする雪菜

レム「まあまあみなさん、その辺で…」

アンナ「(ジー)」

レム「アンナさん？」

アンナ「…レムの胸おつきい」

レム「ふえ!!!」

小猫「…」

ティナ「…」

レムもどんどん顔を赤くする

リアス「みんな早く着替えなさい」

その後プール掃除は滞りなく進んだ。そしていよいよ遊ぶ時間となった

プールの水はというと魔法でオレと朱乃とレムで入れた

ユウキ「気持ちいい!!」

カナリア「蓮ちゃんもおいでよー!」

蓮夜「あとでなー」

水を入れ終わった瞬間にユウキとカナリアが飛び込んでいった。

まあ一番楽しみにしてたのがあの2人だからな

オレはというとプールサイドで座っている。するとクロメがジャージの上を着ている雪菜を(強引に)連れて来た

クロメ「ほら雪菜」

雪菜「ま、待ってくださいクロメさん!まだ心の準備が…」

クロメ「それさつきから聞いている」

雪菜「で、でも…」

蓮夜「どうした？」

クロメ「雪菜が水着見て欲しいんだって」

蓮夜「えっ」

雪菜「い、いや違うんです！えっと、あの…その…」

クロメが言ったことにビックリしたがその後のモジモジしている雪菜が可愛かった

クロメ「ああ焦れたい！えい！」

雪菜「え！クロメさん！待って!!」

しびれを切らしたクロメが無理矢理雪菜のジャージを剥いだ

クロメ「どう？」

蓮夜「おう、すぐくかわいいぞ」

雪菜「ひゃっ、ありがとう…ごじやいまふ…」

クロメ「雪菜カミカミ…」

雪菜「私！泳いできます!!」

そう言っつて雪菜はプールへダイブした

蓮夜「あらら」

クロメ「雪菜は恥ずかしがり屋さんだね」

蓮夜「だがそこも可愛いところだ。クロメもそれ似合ってるな」

クロメ「ありがと♪私も少し泳いでくるね」

蓮夜「おう」

雪菜とは反対にクロメはゆっくりとプールに向かって歩いて行つた

蓮夜「レムも行ってきていいぞ」

レム「レムは蓮夜くんのお側にいたいのでここでいいです♪」

蓮夜「そっか」ナデナデ

レム「はい♡」

その後少し休んでオレもプールに入った。ティナや犬千代、アンナの小学生組と遊んだり、泳げないという小猫に泳ぎを教えたりしたそしてまた休憩していると

カナリア「蓮ちやくん」

甘い声をきかせたカナリアが後ろから抱きついてきた。嫌な予感

…

カナリア「オイル塗って♪」

蓮夜「は？」

カナリア「聞こえなかった？オ・イ・ル塗って♪」

蓮夜「なんでオレが？」

カナリア「私がそうして欲しいから」

蓮夜「はあ、貸せ」

カナリア「わーい♪ありがとう♪」

昔海行つて断つたら一晩中わんわん泣いたからな…断つたらめんどくさい…

「あらあら、カナリアちゃん羨ましいですわねえ」

その声と共に背中に柔らかいものが押し付けられる

蓮夜「朱乃か？」

朱乃「うふふ、ねえ蓮夜くん。私にもそれお願いできますか？」

蓮夜「ダメだ」

朱乃「あら、なぜですか？」

蓮夜「なんでもだ」

朱乃「つれないですわねえ」

朱乃は渋々ではあったが離れてくれた。そして…

蓮夜「っ!？」

いろんな方向から我が眷属達の冷たい視線と殺気に似たものを感じ取った。こここの連中だけならまだしもなぜか家からも感じる

蓮夜「勘弁してくれ」

なんか一誠が用具室の方で一悶着あったみたいだが、そんなん気になつてられなかった

こうして波乱のプール掃除が終わった

第26話

波乱のプール掃除を終えて次の日。オレらはいつも通りのメンバ―で登校しているのだが、朝から学校のある場所から一誠に似た気を感じていた。校門のところに着くと既にその気を発する者と一誠達が接敵していた

蓮夜「よお、みんな。それとお前は、〃白龍皇〃かな？」

一誠「蓮夜！」

「ほお、さすがは永遠の皇帝。いかにもオレは白龍皇のヴァーリだ」

白龍皇が名乗ったと思いきやいきなりオレに何かする気なのか足を踏み込む。が：

雪菜「無駄です」

ユウキ「ボクの蓮夜に何する気かな？」

クロメ「ユウキ、蓮夜は私の」

蓮夜「誰のものでもないんだが…」

ヴァーリが動き出す前に雪菜、ユウキ、クロメが既にヴァーリの喉元にそれぞれの剣を当てていた。オレの後ろでもみんなは臨戦態勢は整っているようだ

ヴァーリ「…さすが最強の眷属達だな。今のオレではこのうちの1人にも勝てないだろう」

蓮夜「よくわかってるじゃねえか」

ヴァーリ「身の程はわきまえているつもりだ」

蓮夜「それはいいことだ。3人とももういいよ」

オレの声で剣を消して戻ってきた3人には「ありがとな」と言っって頭を撫でてやった

ヴァーリ「さて、兵藤一誠。君は今何番目に強いと思う？まあ未成ではあるが、上から数えて4桁。1000か1500までの間くらいだろう。いや、宿主のスペックからするというもつと下か。ちなみにそこにいる永遠の皇帝はベスト3に入るだろう」

蓮夜「…何が言いたい」

ヴァーリ「兵藤一誠は貴重な存在だ。十分に育てた方がいい、リア

ス・グレモリー」

一誠「部長！」

一誠が振り返った先にはリアスが立っていた

リアス「白龍皇：何のつもりかしら？あなたが墮天使と繋がりを
持っているなんて。必要以上の接触は…」

ヴァーリ「ふん。二天龍と称された赤龍帝（ウエルシュドラゴン）と
白龍皇（バニシングドラゴン）、赤い龍と白い龍に関わった者は過去碌
な生き方をしていない。あなたはどうなるんだろうな」

嫌味な言い方でリアスに言うヴァーリ。それに対してヴァーリを
睨むリアス

ヴァーリ「今日は戦いにきたわけじゃない。俺もやることが多いん
でね」

ヴァーリそう言って去って行った

リアス含めてグレモリー眷属のみんなは深刻な顔をしてヴァーリ
の背中を見続けている

蓮夜「おいおい、深刻に考えすぎだ」

リアス「蓮夜」

蓮夜「一誠、もしあいつがリアスを攻めてきたらどうする？」

一誠「決まってんだろ！ぜってえ守る!!」

蓮夜「なら、強くないとなあ」

一誠「っ！」

オレはニヤリと笑い学校に向かって行く

授業が始まって一誠はすぐには来なかった。どうやら保健室に
行っていたようだ。そして帰ってきた一誠は現在松田と元浜に殴ら
れていた。一誠が転校してきたゼノヴィアとも知り合いだってい
うのが2人には気に食わなかったみたいだ

オレはその光景を後にソーナに話があるため生徒会室に来たのだ
がどうやらリアスに会いに旧校舎へ行ったみたいだからオレもそつ

ちへ向かった

蓮夜「あーいたいた。ソーナ」

ソーナ「あら蓮夜さん。何か用ですか？」

リアス「蓮夜、私達もいるのだけれど」

ソーナにしか声をかけなかったのを怒ったのか、リアスがそう言うってきた

一誠「あ、ああ。こんにちはリアス」

リアス「ええ」

どうやら機嫌は治らなかつたらしい

ソーナ「それで、要件は？」

蓮夜「授業参観の日、オレ授業休みたくてな。先生に助言してもらえねえかな？」

ソーナ「理由によりますね」

蓮夜「理由は、うちには親がいなくてな。代わりにみんなの授業をオレが見たいなって」

ソーナ「そういうことでしたらお任せください」

蓮夜「助かる」

ソーナはオレの理由を聞いて承知してくれた

朱乃「うふふふ、蓮夜くんはお優しいですね」

話を聞いていた朱乃がオレの腕に抱きついてきた

蓮夜「よせ朱乃」

朱乃「いいではありませんか♪」

蓮夜「でもあつちから全速力で走ってきてるやついるし」

オレが指差した方向から涙を流して大声を出す一誠が走ってきていた

一誠「蓮夜ーー!!なんて羨ましいことを!!!」

朱乃「あらあら、うふふ♪」

蓮夜「はあ、勘弁してくれ」

「翌日」

今日から始まった授業参観には多くの保護者の方々が来ていた。その中オレは今日はみんなの授業を見ることが目的であるからいつもの制服ではなく私服で来ている

「まずはアンナ達からにするか」

オレはそう決めて小等部に足を進める

助かることにここに通っているアンナ、ティナ、犬千代の3人は同じクラスなので一度で済む。3人のクラスに入ると既に授業は始まっていて、算数をやっているようだ

「ではこの問題を、ティナさん。お願いできますか？」

「は、ひゃい！」

こんな大勢に見られているため緊張しているティナはいつもとは違う姿だった。そして前に出て黒板に書いてある問題を解いた

「正解です」

／パチパチパチパチ／

正解したティナに対し保護者の方々から拍手が送られる。もちろんオレも拍手する。そして自分の席に戻るティナと目が合い、ティナはその瞬間顔を真っ赤にして急ぎ足で自分の席に戻った。それを見たアンナと犬千代は同時に保護者の方を向いてオレに気がついた。オレはガンバレの意味を込めて手を振った

／キーンコーンカーンコーン／

授業が終わる合図の鐘が鳴り、子供達は一斉に自分の親の元へ行く。犬千代、アンナ、ティナもオレの元にやって来た

ティナ「お兄さん！来るなら先に言ってください！」

蓮夜「ははは！サプライズだよ」

犬千代「ビツクリした」

アンナ「…でも来てくれて嬉しい」

蓮夜「3人とも頑張ってたな。ティナは噛んじやったけど」

ティナ「忘れてください！」

ティナはまた恥ずかしくなったのか顔を赤くしてオレの腹をポカ

ポカと叩いてきた。その後3人に他も行かなきゃいけないからと言つてクラスから出た。ちゃんと最後に撫でてあげました

―中等部―

今度はレムと雪菜がいる中等部だ。こつちも2人は同じクラスだからありがたいな。こつちの今度の授業は社会の歴史のようだ。奇遇なことその先生が高等部でも授業をしている先生で、オレのことに気がついたのかこつちを見ながら笑みを浮かべた

先生「では復習からいきましょう。姫終さん、1859年に起きた事件はなんですか？」

雪菜「安政の大獄です」

先生「正解です」

先生から指名されて立ち上がった雪菜は悩むことなく答えた。さすが学年主席！

先生「では次にレムさん、翌年の1600年に起きた桜田門外の変で暗殺された人物は誰ですか？」

レム「井伊直弼です」

先生「正解」

こちらも雪菜同様即答するレム。さすが学年次席！

先生「お二人共さすがですね。皆さん拍手ー」

＼パチパチパチパチ／

拍手の中で先生はオレに目を向けた。さては2人を指名したのはオレがいるからか？すると先生の目線に気づいた雪菜とレムがこちらを見てきた瞬間、2人はビククリした表情を浮かべる。オレは2人に手を振ると2人はすぐに前に向き直つて俯いてしまった。その動作は完全にシンクロしていてすごかった

＼キーンコーンカーンコーン／

授業が終わった瞬間2人はこつちにやってきた

雪菜「どういうことですか！蓮夜さん!!」

レム「そうですね。来るなら事前に言ってくれば…」

蓮夜「ちよつとしたサプライズだよ」

雪菜「まったく」

レム「蓮夜くんらしいですね」

蓮夜「はははは…ていうかクラスの男子からの目線が痛いんだが…」

雪菜「ああ…」

レム「それは…」

雪菜とレムと話している最中オレはクラスの男子からのずっと睨まれている

女生徒「2人はモテますからねえ」

雪菜「なっ！何を言ってるんですか！／＼／＼」

レム「そんなことないですよ！／＼／＼」

蓮夜「まあ、そうだろうな」

雪菜「蓮夜さんまで…／＼／＼」

レム「恥ずかしい…／＼／＼」

恥ずかしがっている2人の頭を撫でてオレはクラスから出た

―高等部―

いつも通っている時間に私服でいるのはなんだか新鮮な感じだ。最初は1年からだな。そうしてユウキ達のクラスに行ってみると誰もいなかった。そこには男子の脱ぎ捨てられた制服があったので体育なのだろうと思いい校庭へ足を向けた

案の定校庭ではユウキ達1年生がサッカーをしていた。そこでは丁度ユウキが点を決めていたところだった

ユウキ「いえーい！」

ユウキは家でもクラスでも変わらず元気なようだ。そうユウキの元気な姿を見ると、ふいに腕に誰かが抱きついてきた

蓮夜「クロメ」

クロメ「蓮夜〜♪」

抱きついてきただけでなくオレの腕に頬擦りしてきた

蓮夜「どうしてわかった？」

クロメ「たまたま見かけた」

蓮夜「クロメは参加しないのか？」

クロメ「私のチームは今休憩中だから」

蓮夜「離れなさい」

クロメ「やーだ♪」

話してはくれていても離してはくれないらしい。すると
ピー！

「はい、では次のチーム」

担当の先生が呼びかけている

蓮夜「クロメは行かないのか？」

クロメ「…私のチームじゃないもん」

そうなのかと納得しそうなところに

女生徒「クロメちゃん！始まるよ！」

蓮夜「…嘘をつくなよ」

クロメ「…」

蓮夜「行つてきな」

クロメ「えー」

蓮夜「クロメの頑張つてる姿が見たいなー」

クロメ「行つてくる」キリッ

さつきとは打って変わってめちやくちややる気に満ち溢れている

クロメ。そしてクロメと行き違いにユウキと小猫がやってきた

ユウキ「蓮夜ー！」

蓮夜「うおっと、お疲れユウキ。小猫も」

小猫「どうもです」

ユウキは勢いよくオレに突っ込んできて、その後から小猫がやってきた

ユウキ「蓮夜！見た見た!？」

蓮夜「ああ見たよ。ナイスゴールだったな」

ユウキ「えへへ♪」

まだ抱きついているユウキの頭を撫でる

蓮夜「小猫も頑張ったな」

小猫「♪」

小猫の頭も撫でてやる

その後ゲームの終わったクロメにも同じことをしてオレは校内に入り、3年生の教室へ向かった。その途中オレは大物に出くわした「やあ蓮夜くん」

蓮夜「リアスを見にきたのか？サーゼクス」

サーゼクス「そうだよ。君は授業じやないのかい？」

蓮夜「今日のオレは保護者の代わりだ」

サーゼクス「そういうことか」

そう、そこにいたのはリアスの兄であり現魔王の1人、サーゼクス・ルシファーだった。しかしこれにとどまらずよりすごい大物がいた「蓮夜殿！」

蓮夜「お久しぶりです、ジオ殿」

そこにいたのはジオデイクス・グレモリー（以後ジオ）。サーゼクスとリアスの父親だ

ジオ「全然こつちに顔を出さないからな。ヴェネラナも会いたがっていたぞ！」

蓮夜「それはそれは。今度お邪魔いたしますね」

ヴェネラナとはジオデイクス・グレモリーの妻のヴェネラナ・グレモリーだ。最初会ったときはサーゼクスの姉かと思ったくらい外見が若い人だ

サーゼクス「さて父上、リアスのクラスはすぐそこです」

ジオ「おお、早く行くでしょう！」

ホント元気だなあ。てか親バカと兄バカだな。タツマキとシェーレはリアスとは違うクラスなのでそこで別れた

13年生クラスー

クラスに入ると1番後ろの廊下側にシェーレがいたのでわざとその横に立ってみた

シエーレ「ん？蓮夜？どうしてここに？」

蓮夜「授業参観だからな、見に来た」

シエーレ「そうですか。タツマキは1番前ですよ」

蓮夜「なんであんなとこにいるんだ？」

シエーレ「クラスみんなの総意で『タツマキちゃんは小さいから前の方がいいよ』と」

蓮夜「あらら」

シエーレ「怒ってプルプル震えているのも可愛いとかで盛り上がりました」

蓮夜「想像できちゃうな」

授業は国語、しかも古文だった。オレも古文は好きなので授業に聞き入ってしまった

／キーンコーンカーンコーン／

鐘が鳴ってもタツマキは自分の席から動こうとしなかったので大声で呼んでみることにした

蓮夜「タツマキちゃん」

タツマキ「大声で呼ぶんじゃないわよ！」

タツマキは勢いよく振り向き大声で叫んだ。どうやらオレがいたことには気づいていたみたいだ。そんなことを考えていると

『タツマキちゃん!!』

クラスの全員がオレの真似をしてタツマキを呼んだ

タツマキ「うっさいわよ！」

2人ともクラスに馴染んでいるようでよかった

12年生クラス

最後に2年のクラス。自分のクラスを保護者として見るってなんか変な感じだな

先生「今日の英語の時間は紙粘土で好きなものを作ってください。なんでもかまいません。自分が描いたものをありのまま表現するのです。こういう英会話もあるのです」

あるか!!まったく英語と紙粘土なんの関係もねえだろ

「アーシアちゃん、ファイトよ」

「アーシアちゃん、かわいいぞ」

小声ではあるがアーシアに声をかける女性と男性がいた。男性は片手にビデオカメラを持っている。氣的に一誠の親かな。ていうか十六夜は寝てるし。でも成績はいいからムカつくよな！達也は授業はそっちのけでなんか難しそうな計算してるし：深雪はなぜか窓の外を見てて上の空だし：カナリアは鼻歌歌いながら楽しそうに作ってるな。なんだか、うん：みんな違ってみんないい：のかな……

先生「兵藤くん！」

いきなり先生が一誠を呼んだかと思つてそっちを見ると、一誠は紙粘土でリアスの像を完璧に作っていた

女生徒1「あれリアスお姉様じゃない!？」

女生徒2「そうよ！すごいそっくり！」

先生「すばらしい！君にこんな才能があつたなんて」

一誠「なんか適当に手動かしてただけで」

桐生「手が覚えているぐらい触ってるってわけね」

一誠「こら桐生！お前また！」

男生徒1「くそ！一誠の野郎！」

男生徒「リアス先輩と」

女生徒1「ウソよ！」

女生徒2「リアス先輩がこんな野獣と!？神崎くんならまだしも」

そこで急に場の空気が変わった

深雪「うふふ：皆さん、蓮夜さんとリアス先輩がなんですって？」

やばっ！なんでかわかんねえけど深雪がめっちゃ怒ってる！

カナリア「みんな変なこと言っちゃダメだよ……」

カナリアもなんでそんな怒ってるの！ていうか十六夜は起きろよ

!!達也も止めろよ!!

蓮夜「2人ともストップ！」

深雪「蓮夜さん♪」

カナリア「蓮ちゃん♪」

蓮夜「ほえ？」

オレが声をかけた瞬間場の空気は温まり、同時に2人はオレの両腕に抱きついてきた

深雪「なぜ今日お休みになることをおっしゃってくれなかったのですか！」

カナリア「ホントだよ！寂しかったんだからね！」

蓮夜「そ、それは悪かった」

松田「蓮夜！お前もか！」

元浜「羨ましい！」

いつでもこのクラスは変わらねえな

第27話

蓮夜「達也は何をやっていたんだ？」

達也「ん？新しい実験の再計算をな」

蓮夜「さようで」

達也「何かあったのか？」

蓮夜「いんや」

みんなの授業を見て回ったオレはみんなでお昼を食べている。すると

「魔女っ子の撮影会だって！」

「マジか!？」

そんなバカ騒ぎが聞こえてきた。どうやら体育館でコスプレをしたやつが勝手に撮影会を催しているらしい。でもその撮影会の中心にいるやつのが配が…まさか…オレはその正体を確かめるべく、お昼を中断して体育館へ向かった

ー体育館ー

「もう一枚お願いします！」

「こちらに視線ください！」

体育館に入ると大勢の男子生徒に囲まれている女性を発見した

リアス「あら蓮夜。あなたも来てたのね」

蓮夜「よおりアス。今な」

そこへリアス、一誠、アーシア、朱乃の4人もやって来た

一誠「あれは、魔法少女ミルキーセブンオルタナティブのコスプレじゃないか！」

蓮夜「はあ」

オレはやっぱりかと呟いて頭を抱える

カナリア「あれって…」

ティナ「もしかして…」

蓮夜「お前らが考えてる通りだよ」

みんなが考えていることは容易にわかったのでそう答えた
匙「こら！こんなところで何やってる！ほら、解散解散！」

「横暴だ！生徒会！」

「撮影会ぐらいいいだろ！」

『そうだそうだ!!』

匙「公開授業の日にいらん騒ぎを起こすな！解散しろ！」

『なんだよー』

匙も一応は生徒会なんだよな。ちゃんと仕事してるぜ

匙「あの、ご家族の方ですか？」

「うん」

匙「そんな格好で学校に来られると困るんですが」

「えー…うふっ♪ミルミル☆ミルミル☆スパイラル☆」

せっかく匙が真面目に注意しているのに女性は決めポーズをや
りやがった

匙「だから真面目に…」

一誠「よお匙。ちゃんと仕事してんじやん」

匙「からかうな兵藤」

匙に声をかけた一誠に文句を言い放つ匙。そのとき

ガラガラ！

ソーナ「匙、何事ですか？」

生徒会長登場

匙「いえ会長。この方が…」ソーナちゃん見つけた☆…」

ソーナ「うぐっ！」

一誠「…もしかして」

匙「会長のお知り合いとか…？」

「ソーナちゃん！☆」

女性は舞台から飛び降り、ソーナの元へ走っていく

「ソーナちゃんどうしたの？お顔が真っ赤ですよ？せっかくお姉様との再会なのですから、もーっと喜んでくれないと思うの！♪お姉様！ソーたん！って抱き合いながら百合百合な展開でもいいと思う
のよう☆お姉ちゃんは♪」

一誠「お姉様？」

蓮夜「そいつの名前はセラフオル・レヴィアタン。現代魔王の1人でソーナの姉さんだ」

やっぱりセラだったか：ソーナも苦勞してるな

セラ「ん!?その声は!!はっ!やっぱり蓮くんだー!♪」

オレに気づいて今度はオレの方に走って来て抱きつこうとして来たが、オレはセラの頭を抑えて止めた

セラ「むう：なんで止めるの!」

蓮夜「ケガしたくないからな」

セラ「本当は私に会えて嬉しいくせに☆この恥ずかしがり屋さん♪」

相変わらずめんどくせえな：

リアス「セラフオル様、お久しぶりです」

セラ「あらリアスちゃん、お久ー♪元気してましたか?☆」

リアス「はい、おかげさまで。今日はソーナの公開授業へ？」

セラ「うん!ソーナちゃんたらひどいのよ!今日のこと黙ってたんだから：お姉ちゃんシヨックで、天界に攻め込もうとしちゃったんだから!!」

それは冗談でもやめろ!はあ、今日はジブリールがいなくてよかったです：

ジブリール「お呼びですか?マスター」

蓮夜「しまったああ!!!」

オレの心の声に反応したのかセラがここにいるのを感じたのか知らんが、ジブリールが来てしまった!!!!

ジブリール「おや、そこにいるのはどこの程度の低いクソ悪魔ではないですか」

セラ「あらあら、誰かと思えばちよつと羽が大きいだけのスズメさんじゃない」

2人は睨み合い、その間には火花がバチバチしているのがわかる

蓮夜「ジブリールそこまで。セラも落ち着け」

ジブリール「：マスターがそうおっしやるなら」

セラ「蓮くんが言うなら仕方ないかな…おや？リアスちゃん。あの子が噂のドライグくん？」

リアス「はい。一誠、ご挨拶なさい」

一誠「は、はい！初めまして！兵藤一誠です！リアス・グレモリー様の兵士をやっています！」

セラ「初めまして、魔王のセラフォル・レヴィアタンです☆レヴィアたんって呼んでね♪」

一誠「は、はい…」

さすがの一誠でもちよつと引いてるぞ

ソーナ「お姉様、私はここの生徒会長を任されているのです。いくら身内だとしてもその格好や行動は容認できません！」

セラ「そんなソーナちゃん！蓮くん！ソーナちゃんに怒られた…私悲しい」

蓮夜「いや、妹に迷惑かけるなって言いたいね。オレは。ていうか離せ」

ソーナに怒られたセラはオレに抱きついていていた。昔からこいつはオレとのスキンシップが過剰なんだよな

ソーナ「お姉様！ご自重ください!!」

セラ「大丈夫だよ♪蓮くん容認だから☆」

蓮夜「容認した覚えはないぞ…っ！」

そうしていると背後から…

『蓮夜(さん)(くん)(蓮ちゃん)(マスター)…?』

我が眷属の女性陣がすごい殺気を放っている。しかも…

小猫「……」

朱乃「うふふふ……」

小猫は無言で睨んでくる。朱乃も笑顔ではあるが目が笑っていない。みんなどうしたんだ…

蓮夜「みんな…?どう、したんだ…?なんか怒ってる…?」

これは…オレ、死んだかな…

―自宅―

放課後になってセラがオレの家に行きたいと言い出したが、オレはたまには姉妹水入らずで過ごして欲しいと思い、今日のところは断つた

家に帰った瞬間黒歌にも怒られた。なんとかみんなに弁解して許してもらえたが、今度1人ずつデートすることになってしまった

夕飯も終えようやく落ち着いたところでオレはリビングのDVDデッキに1枚のDVDを入れてスイッチを入れた。それはオレが今日隠れて撮ったみんなの授業映像だ。それを今日来れなかったジブリールと黒歌と見るところだ

黒歌「ティナ噛んだにや！」

蓮夜「顔真っ赤にして可愛かったぞ」

ジブリール「雪菜様とレム様はさすがでございますね」

蓮夜「ああ、2人ともオレの自慢だな」

黒歌「あつ！白音にや！」

蓮夜「ユウキのチームに負けただけど点は決めてたぞ。ユウキもクロメもみんなと仲良くやっていたな」

ジブリール「タツマキ様は皆様に人気なのでございますね」

蓮夜「そうみたいだな。本人は否定しているが…」

黒歌「深雪達にや」

ジブリール「本来ならマスターもここで勉強を行なっているのですね」

蓮夜「そうだな」

黒歌「蓮夜が勉強してる姿も見たかったにや…」

蓮夜「自分で自分では取れないからな」

ジブリール「しかし、よく気づかれませんでしたね。さすが我がマスターでございます」

黒歌「蓮夜は私のにゃ」

ジブリール「ほお…身の程がわからないのでございますか？この駄猫が」

黒歌「身の程がわかってないのはそっちにや…この屑鳥」

いつもながらこいつらのキレるスイッチはなんなのだろうか

蓮夜「2人ともやめい」

ジブリール「きやつ！」

黒歌「にやつ！」

ケンカしそうだった2人にチョップを入れて止めた

その後も撮った動画を存分に楽しんだ。他のみんなはというと、恥ずかしがっていたり褒められて嬉しがっていたりと様々だ

第28話

―翌日の放課後―

昨日朱乃から連絡があり、リアスのもう1人の僧侶を解放するのに立ち会って欲しいと頼まれた。なぜ封印されているかとかは以前からサーゼクスに聞いていた。オレはタツマキと一緒に旧校舎の〃開かずの間〃に来ていた

一誠「ここに?」

アーシア「ここに私と同じ僧侶が」

リアス「深夜は封印の術も解けるから、旧校舎限定で部屋を出てもいいことになってるの。でも中にいる子自身がそれを拒否していて」

一誠「要するに、引きこもり?」

朱乃「でも、この子が一番の稼ぎ頭なのですよ?」

一誠「マジですか!」

祐斗「パソコンを介して特殊な契約を行なっているんだ」

ゼノヴィア「しかし、封印されるほどの力とは一体どんなものなんだ?」

まあそんじよそこらのやつじゃこいつの魔法に太刀打ちできんだろう。するとリアスが魔法を繰り出し扉にかかっている鎖を破壊した

小猫「封印が解けます」

リアス「扉を開けるわ」

そう言っつて扉の取っ手に手をかけるリアス。一誠とアーシアは緊張しているようだ

「いやああああ!!」

扉が開かれ中に入ると突然悲鳴があがった

一誠「な、なんだ!」

リアス「ごきげんよう、元気そうで何よりだわ」

「何事なんですか!」

朱乃「封印が解けたのですよ」

リアス「さあ、私達と一緒に…」

リアスが声のする棺桶の蓋を開ける。その中には

「嫌ですうー…ここがいいです！外こわあい!!」

女子生徒の制服を着て涙目の子が入っていた

一誠「おお！女の子！しかもアーシアに続き金髪美少女!!僧侶は金髪尽くしてことつすか？」

祐斗「ふふっ」

蓮夜「はあ」

一誠「なんだよ木場！蓮夜！」

蓮夜「一誠…そいつは『男』だ」

一誠「えっ？蓮夜、今なんて…？」

リアス「蓮夜の言う通り、見た目は女の子だけどこの子は紛れもなく『男の子』」

一誠、アーシア「えー!!!」

朱乃「うふふ、女装の趣味があるんですわ」

今だ涙目のでうづくまっているその子を優しく抱きしめるリアス

リアス「この子はギヤスパ―・ヴラディ。私の眷属、もう1人の僧侶。一応駒王学園の1年生で転生前は人間と吸血鬼のハーフよ」

ヴァンパイア

アーシア「ヴァ、ヴァンパイア…」

一誠「吸血鬼って、こいつが!?!」

まあいきなりヴァンパイアとか言われても驚くわな

一誠「マジか!?!そんな残酷な話があつていいのか!!」

アーシア「でもよく似合ってますよ？」

一誠「だから余計にシヨックがでかいんだって！引きこもって一体誰に見せるってんだ！」

ギヤスパ―「だ、だって…この方が可愛いもん…」

一誠「もんとか言うな！もんとか！一瞬でもお前とアーシアの金髪ダブル美女を夢見たんだぞ？」

こいつはそういうことしか考えられんのか

小猫「人の夢と書いて儂い」

蓮夜「おお小猫。よく知ってるじゃないか！でもそれは一誠に限る

ことな「よしよし

小猫「はい♪」

朱乃「あらあら、小猫ちゃん羨ましいですわ」ウフフ

今の一誠にびったりの言葉を言った小猫の頭を撫でてやると朱乃がそんなことを言いながら近寄ってきた。タツマキは明らかに敵意をむき出しにするのやめなさい、の意味を込めてタツマキも撫でてやった

リアス「ギヤスパ―？お願いだから外に出ましよう？ね？」

ギヤスパ―「いやですう！」

一誠「ほら、部長が言ってるんだから」

一誠がそう言ってギヤスパ―の腕を掴んだ瞬間、ギヤスパ―が魔法を発動した

タツマキ「主人まで動けなくなるってどういうことよ！」

蓮夜「それが今まで封印されてきた意味なんだよ。ホントだったら赤龍帝宿ってる一誠も動けなきやおかしいんだけどな」

ギヤスパ―「きやああ!!!な、なんで動けるんですか!!!」

蓮夜「なんでって言われてもな」

タツマキ「私だからよ」

蓮夜「ああ、そうだね」

タツマキ「なによ！プイツ」

そしてギヤスパ―は魔法を解除した

一誠「あれ？」

魔法を止めた瞬間みんなには一瞬でギヤスパ―が移動したように見えただろう

アーシア「おかしいです。今、一瞬…」

ゼノヴィア「何かされたのは確かだね」

祐斗「ふふっ」

朱乃「フオービドウン・パロール・レユ停止世界の邪眼。時間を停止させる神器ですわ」

小猫「興奮すると目に写したものを一定時間停止させることができ
るんです」

ギヤスパ―「部長！この人たち止まりませんでした!!」

『えー!!』

朱乃「あらあら」

小猫「当然ですね」

蓮夜「なんで小猫が威張るんだ？」

リアス「あなたはギヤスパーの一言に驚きの顔をして、朱乃はいつも通り笑顔で、小猫はなぜか自分のことのように威張っている

リアス「ホントなの…?」

蓮夜「まあな。一誠、こいつはこの力を制御できないばかりか主人までも止めてしまうというわけで魔王サーゼクスの命でここに封じられていたんだ」

リアス「知ってたのね」

蓮夜「サーゼクスから聞いてた」

リアス「まあいいわ。それに加えて自然と能力が高まっちゃうみたいで、バランスブレイカー禁止化に至る可能性があるのよ」

一誠「禁止化…」

そんな話をしているとギヤスパーはダンボールに閉じこもってしまっ

ギヤスパー「僕の話なんかして欲しくないのに、ひどいですう」

一誠「またこんなところに隠れやがって」

一誠はダンボールを蹴った

ギヤスパー「僕はこの箱の中で十分です!」

まるで聞き分けのない子供だな

朱乃「部長、そろそろお時間です」

リアス「そうね、私と朱乃はこれからトップ会談の打ち合わせに行かなくてはならないの。ユウト」

祐斗「はい部長」

リアス「お兄様があなたの禁止化について詳しく知りたいらしいの。一緒に来てちょうだい」

祐斗「わかりました」

蓮夜「オレ達も行くか」

タツマキ「ええ」

一誠「蓮夜達も行くのか？」

蓮夜「これでもこの世で最強の存在だからな。行かないわけにはいかないんだよ」

リアス「それまであなた達には少しでもギヤスパーの教育をお願いしたいのよ」

一誠「教育…？」

こいつらに任せて大丈夫かね…ん？この気配は…

蓮夜「タツマキ」

タツマキ「ええ、あいつね」

蓮夜「そうみたいだな。みんな、変なやつ来てるから気をつけてな。害はないと思うが」

オレはそれだけ伝えて部屋を後にした

ギヤスパーの教育は困難を極めているらしい。しかしこれはグレモリー眷属の問題だ。できるだけオレは手助けしないことにした

そして数日が経った放課後。オレはとある場所にどでかい気を感じた

蓮夜「これは…ジブリール」

ジブリール「はい、間違いないと思われます」

蓮夜「久々に挨拶しとくか。ジブリール、ついて来てくれ」

ジブリール「マスターの仰せのままに」

オレはその気をする元へジブリールをつれて移動した

― 神社 ―

ここは神社か。普通の悪魔からしたら入れないけど、オレは日本の神達からの加護があるから大丈夫なんだよな。気はこの中からだな

蓮夜「ごめんください」

朱乃「あら、蓮夜くん」

蓮夜「朱乃か。その格好つてまさかここは朱乃の家か？」

朱乃「まあそんなところですね。蓮夜くん達はどうしてここに」

蓮夜「ここに『あいつ』が来てるのが気でわかってな。挨拶にだ」

朱乃「そうでしたか。案内しますわね」

蓮夜「頼む」

オレとジブリールは朱乃に着いて行く。そこには

一誠「蓮夜！」

蓮夜「よお一誠。それと『ミカエル』」

ミカエル「ええ、お久しぶりですね蓮夜くん、ジブリール様」

蓮夜「今日はどうしたんだ？」

ミカエル「いえ、兵藤一誠くんに贈り物を」

蓮夜「そうか。まあ今日はお前がここにいるから挨拶に来ただけだから」

ミカエル「そうですか。ぜひ天界においでください。そろそろガブリエルが持ちません」

その言葉でその場の空気が一気に変わった

ジブリール「マスター、これから私は天界を滅ぼしてまいります。

なあと天撃1発で終わらしてまいります」

蓮夜「物騒なこと言ってるんじゃないよ！やめなさい！」

ジブリール「…わかりました」

蓮夜「まったく…ミカエル、ガブリエルにはそのうち顔を出すって伝えてくれ」

ミカエル「わかりました。ではまた会談のときにお会いしましょう」

一誠「待つてください！少し聞きたいことが」

ミカエル「生憎今は忙しいので、会談の後に」

一誠「必ずお願いします」

ミカエル「約束します。兵藤一誠」

一誠はミカエルから龍殺しドラゴンスレイヤーの剣であるアスカロンをもらったらしい。そして今オレと一誠は朱乃からお茶をもらっている

一誠「あの、1つ聞いてもいいですか？」

朱乃「なんででしょう」

一誠「…コカビエルとの戦いするとき、あいつが言っていましたよね」

朱乃「っ！」

一誠「朱乃さんて墮天使の幹部の…」

朱乃「そうよ。私は、墮天使の幹部のバラキエルと人間との間に生まれた者です」

オレは目を瞑って朱乃の話聞く

朱乃「母はとある神社の娘でした。ある日傷つき倒れていた墮天使の幹部であるバラキエルを助け、その時の縁で私を宿したと聞きま

す」

一誠「…あの、すいません。俺変なこと聞いて…」

オレは目を開けた。朱乃は一誠の言葉には反応せず立ち上がり背中を向け悪魔と墮天使の羽を出した

一誠「その翼…」

朱乃「ええ…悪魔の翼と墮天使の翼、私はその両方を持っています。この汚れた翼、私はこれが嫌でリアスと出会い悪魔になったの。でもその結果生まれたのは墮天使の翼と悪魔の翼を持った悍ましい生き物…この身に汚れた血を宿す私にはお似合いかもしれませぬ」

一誠「朱乃さん…」

朱乃は振り返り続ける

朱乃「それを知って一誠くんはどう感じます？墮天使は嫌いよね…あなたとアシアちゃんの身も心も傷つけ命までも奪い、大切なあなたの町を破壊しようとした墮天使。いい思いを持てるはずがありませんね」

一誠はそこで黙ってします。おそらくどう返していいのかわからないんだろう

蓮夜「お前はバカか？朱乃」

朱乃「っ！蓮夜くん…」

一誠「蓮夜…」

蓮夜「オレなんて神とも同等なこのジブリアルを眷属にしちまったんだ？そのあと天界の奴らからただけ言われたと思う？」

ジブリール「あれは大変でございましたね、マスター」ウフフ

蓮夜「それに一誠とアーシアを傷つけたり、この町を破壊しようとした墮天使とお前は違うだろ。だからそんなの関係ねえ」

朱乃「っ!」

蓮夜「一誠、お前はと思う?」

一誠「えっ、あ、蓮夜の言う通りです!朱乃先輩は優しいお姉さんで、最強の副部長で、とにかくオレは朱乃先輩を嫌いになったりしません!」

一誠は普段はあだが、心優しいやつだ

蓮夜「ほら、だから関係ねえんだよ。変なこと考えすぎだ」

そう言い放つとオレは朱乃に押し倒された

蓮夜「朱乃!」

一誠「おい蓮夜!なんて羨ましい!!」

朱乃「蓮夜くん、私本気になっちゃいました」

蓮夜「…はい?」

朱乃「私、何番でも大丈夫です。でも私のことも考えてくださいね」
ジブリール「うふふふふ…つけあがりましたね、この泥棒悪魔が…
うふふふふ」

やべっ!!ジブリールがキレた!!!これはマジでやべえ!!!!!!

朱乃「少しぐらいいいではありませんか」

蓮夜「とりあえず降りろ!朱乃!!」

朱乃「あん」

その後、朱乃はいつも通りに戻ったがジブリールの機嫌を直すのに3時間ぐらいかかってしまった

第29話

蓮夜「ん…なんだ？」

トップ会談が行われる日の朝、オレは何かの重みで目を覚ました。俺が寝ている両隣にはジブリールと黒歌が、オレの上にはアンナが乗っかって眠っている。時計を確認するともう起きなきゃいけない時間になっていたので仕方ないから起きてもらいたいことにした

蓮夜「3人も起きな」

ジブリール「おはようございます、マスター」

蓮夜「おはよ」

黒歌「まだ眠いにゃ」

蓮夜「なら自分の部屋で寝ろ」

アンナ「zzzz…」

蓮夜「アンナ」

まだ起きないアンナを揺らしながら起こそうとしているが起きない。すると

ジブリール「さっさとマスターから離れなさいな、この駄猫」

黒歌「屑鳥の言っていることは理解できないにゃ」

また言い争いが始まってしまった

アンナ「…蓮夜」

蓮夜「おっ、起きたか」

アンナ「…まだ眠い」

蓮夜「でももう起きる時間だぞ？」

アンナ「…連れてって」

蓮夜「仕方ねえな」

まだ眠いのか目をこすっているアンナを抱き上げて部屋を出る

蓮夜「2人とも早くこいよ？」

いまだに睨み合っているジブリールと黒歌にそう言ってオレは洗面台に向かう

蓮夜（ん？なんであいつがこんなところに…）

オレはあるものの気を感じ取っていた

「夕方」

会談に行く前にオカルト研究部の部室に来ている

リアス「じゃあ行くわよ」

一誠「はい」

リアス「ギヤスパー、いい子で留守番しているのよ?」

ギヤスパー「はい」

ギヤスパーは今日も段ボールに入っている

リアス「何かのシヨックであなたの能力が発動してしまつたら大変なことになってしまうから。わかつてちょうだい」

ギヤスパー「はい」

リアス「小猫と一緒にしてもらおうから」

蓮夜「こつちからも黒歌を残していくから」

黒歌「白音♪」

小猫「姉様!」

嬉しそうに抱き合う2人はホントに仲のいい姉妹だと思えるな

リアス「よろしくね2人とも」

一誠「ギヤスパー、大人しくしてろよ?これ貸してやるから」
そう言つて持つていたゲームを渡す一誠

ギヤスパー「はい!ありがとうございます、一誠先輩」

蓮夜「一応お菓子とかも持つて来たから、小猫も食べな」

ギヤスパー「あ、ありがとうございます…」

小猫「さすが兄様です」

一誠「紙袋もここに置いといてやるからな。寂しくなつたら存分に被れ」

なんだあの薄気味悪い紙袋は。被るって…

そしてオレ達は会議が行われる部屋へ移動する

コンコン

リアス「失礼します」

リアスに続いて中に入ると魔王のサーゼクスとセラフオル、墮天使の総督のアザゼル、天使の長のミカエルが座っていた。そしてそれぞれの後ろにはソーナとソーナの眷属で生徒会副会長の椿先輩、ヴァーリ、ミカエルの御付きなのか紫藤 イリナが立っていた。リアス達はサーゼクスの後ろへ、オレは空いている席に座りオレの眷属のみんながその後ろに立った

サーゼクス「紹介する。私の妹とその眷属だ。先日のコカビエル襲撃では蓮夜くんと共に彼女達が活躍してくれた」

ミカエル「ご苦労様でした。改めてお礼を申し上げます」

アザゼル「悪かったな。俺んとこのもんが迷惑をかけて」

一誠「なんつー態度だ」

一誠と同じくオレもその態度にムカついた

蓮夜「アザゼル、態度を改めろ」

オレは威圧のオーラを出してそう言う

アザゼル「っ！わかった：」

アザゼルは冷や汗をかいて答える

サーゼクス「これで参加者が全員揃った。それでは会議を始めよう」

最初に報告したのはリアスからのコカビエル襲撃の件だ

リアス「：以上が私、リアス・グレモリーとその眷属が関与した事件の顛末です」

ソーナ「私、ソーナ・シトリーも彼女の報告に偽りがないことを証言いたします」

蓮夜「オレもだ」

サーゼクス「ご苦労様、下がってくれ」

セラ「ありがとリアスちゃん、ソーナちゃん、蓮くん♪」

今は大事な会議の場なんだからそのノリはやめろ

サーゼクス「リアスの報告を受けて墮天使総督の意見を伺いたい」

アザゼル「意見も何もコカビエルが単独で起こしたことだからな」
ミカエル「あずかり知らぬ事だ」と

アザゼル「目的がわかるまで泳がせていたのさ。まさか俺自身が町に潜入してたことにはやつは知らなかったみたいだけだな。ここはなかなかいい町だぞ？」

蓮夜「それで納得すると本気で思ってるのか？」

オレはドスの効いた声で言い放つ

蓮夜「単独であろうとなかろうと墮天使がこの町を襲撃してきたことは事実だ。それをお前はヘラヘラしながら単独だからで済みます気か？ふざけんなよ？」

オレはさつきよりも強い威圧のオーラを放つ

アザゼル「っ!!」

蓮夜「さつき言っただぞアザゼル、態度を改めろと。わからないならお前がわかるまでオレ達が日本神話の人達とお前ら墮天使を滅ぼしていいこうか？」

アザゼルの顔は真っ青になり汗もすごい量出ている

アザゼル「…そう、だな。確かにコカビエルが何か企んでいるのがわかったのに何も対策をしなかったのは俺だ。すまなかった」

アザゼルはそう言ってオレに頭を下げてきた

蓮夜「それはオレに言うことじゃねえ」

オレの言葉を聞いたアザゼルは立ち上がりリアス達の方を向いて再び頭を下げた

アザゼル「リアス・グレモリーとその眷属達の諸君、本当にすまなかった」

リアス達はいきなり墮天使の総督に頭を下げられて驚きの表情をする

蓮夜「一誠、これでいいか」

一誠「え、あ…ああ」

アザゼル「すまん」

アザゼルはゆっくりと頭を上げて席に戻った。その顔は先ほどとは別人のように真剣なものだ

ミカエル「しかし問題はそれだけではなくコカビエルが事を起こした動機ですね。あなたに不満を抱いていたという」

アザゼル「ああ、戦争が中途半端に終わっちゃまったってことが相当不満だったらしい。俺は戦争にさらさら興味はなかったんでな」

セラ「不満分子ってことね」

蓮夜「まあこれだけでかい勢力になったんだ。不満分子の1つや2つ出るもんだ。あとはそれをどう鎮圧するかだがな」

オレは嫌味っぽくアザゼルの方を見ながらそう言う

アザゼル「なんも言えなえな」

蓮夜「だがみんな〃和平〃結ぶ気なんだろう？」

『っ！』

みんなの表情から確信になった

アザゼル「その平和を結ぶに置いて考えなければならぬのが赤龍帝、白龍皇、それにお前なんだけどな蓮夜。とりあえずお前らの意見が聞きたい」

ヴァーリ「俺は強いやつと戦えればいい」

アザゼル「戦争しなくたって強いやつは五万というさ。蓮夜みたいにな」

ヴァーリ「だろうな」

オレをそんな餌みたいに使うな

アザゼル「じゃあ赤龍帝、お前はどうか？」

一誠「えっ！えっと、いきなりそんな小難しい話を振られても…」

アザゼル「じゃあ恐ろしく噛み砕いて説明してやろう。兵藤一誠、戦争してたらリアス・グレモリーは抱けないぞ？」

リアス「えっ!？」

蓮夜「お前少し黙れ。一誠、そいつが言ったことは忘れろ。そうだな、戦争したらリアスとアジア、それに大勢の人が死ぬかもしれない。だが和平を結べばそうにはならない」

アザゼル「簡単に言えば、和平を結べば毎日リアス・グレモリーと子作りだぞ？」

一誠「子作り!!!」

蓮夜「アザゼル…」

アザゼル「いいじゃねえか。お前の眷属達も満更じゃないみたいだぞ？」

オレはアザゼルの言葉に「そんなバカなこと」と思いながら後ろを振り向くと

タツマキ「：／／／」

ユウキ「??」

深雪「そ、そんな：私が蓮夜さんと：／／／」

雪菜「：子作り、なんて／／／」

クロメ「蓮夜、私はいつでも！」

シエーレ「??」

ティナ「あわわわわ／／／」

アンナ「??」

犬千代「蓮夜と、子作り…」

レム「：／／／」

ジブリール「マスター／／／」

前を向いても

セラ「そんな、蓮くん♡私はあなたがその気ならいつでも：／／／」

ソーナ「お姉様!!」

蓮夜「お前ら…」

オレはその光景に頭を抱える

一誠「和平でお願いします!!! 平和が一番です!! 部長とエッチしたいです!!!」

完全に後半が目的だろう!

祐斗「一誠くん、サーゼクス様がいらっしやるんだよ……?」

一誠「あつ…」

リアス「もう、あなたって人は…」

一誠「と、とにかく俺の力はリアス様と仲間達の為にしか使いません! これは絶対です!」

一誠、いいこと言うじゃねえか

アザゼル「蓮夜、お前はどうか?」

蓮夜「オレはお前らがオレやオレの大事なものに危害を加えなければ敵対するつもりはない」

アザゼル「そうか」

これでなんとか和平を結ぶ方向で決まるかな

ミカエル「赤龍帝殿、私に話があるのでしたね？」

一誠「約束、覚えていてくださったんですか」

ミカエル「もちろん」

一誠「…アシアを、どうして追放したんですか…？」

アシア「っ！」

一誠「あれほど神を信じていたアシアを、なぜ追放したんですか…？」

リアス「一誠！」

ミカエル「…神が消滅したあとシステムだけが残りました。加護と慈悲と奇跡を司る力と言い換えてよいでしょう。今はジブリール様が変わって神の代行をなさってくれていますが…しかし当初システムに悪影響を与える者を遠ざける必要があります」

一誠「アシアが悪魔や墮天使も回復させてしまう力を持っていたからですか…」

ミカエル「信者の信仰は我ら天界に住まう者の源。信仰に悪影響を与える者は極力排除しなければ、システムの制御ができませんでした」

ゼノヴィア「だから、予期せず神の不在を知ったものも排除が必要だったのですね」

ミカエル「それであなとも、アシア・アルジエントも異端とするしかありませんでした。申し訳ありません」

これ、オレも悪いんじゃない？

蓮夜「2人とも！オレも悪かった!!神がいなくなったときにすぐジブリールと天界に連れてってればこんなことにはならなかったかもしれない！」

オレは誠心誠意2人に謝罪する

ゼノヴィア「頭を上げてくれ。今は悪魔になってしまったが、今の

生活を楽しんでいる」

アーシア「私も大切な友達ができました」

蓮夜「ん？」

あん？黒歌から：そうか

蓮夜「おいおい、邪魔者かよ。誰だ？和平結ぶって言ってるのに裏切るやつは」

オレがそう言った瞬間、窓の外にはたくさんの魔法陣が出現した
一誠「あれは！」

蓮夜「魔法師だな。それとリアス、どうやらギヤスパーが襲われたらしい」

リアス「なんですって!？」

蓮夜「黒歌から連絡があった。あっちも相当な数がいるらしい」
オレからの報告に驚くリアス達

蓮夜「ユウキ、雪菜、シエーレ、犬千代は黒歌達の援護に向かってくれ。遠慮はいらねえ、派手にやれ」

ユウキ「わかった！」

雪菜「わかりました！」

シエーレ「了解です」

犬千代「わかった」

蓮夜「いいよな？サーゼクス」

サーゼクス「ああ、任せよう」

蓮夜「リアス、お前らはどうする」

リアス「ギヤスパーは私の眷属、もちろん行くわ」

蓮夜「了解だ。おいサーゼクス、ミカエル、アザゼル。今のオレは結構キレてる。外のやつはオレらがやるぞ」

オレは3人にそう言っただけで自分の眷属を率いて外へ出る

蓮夜「行くぞみんな」

『はい（おう）！』

第30話

蓮夜「結構な数いるな」

十六夜「ヤハハ、そんな数だけなんて意味ねえだろ」

ジブリール「雑魚の集団ほど意味のないものはありませんね」

タツマキ「ふん！こんなの私1人で大丈夫よ」

クロメ「めんどくさいな」

達也「はあ」

カナリア「みんななんか気合い入ってるね」

レム「クロメさんと達也さんはなんか違いますけど」

ティナ「どうします？お兄さん」

アンナ「…」

蓮夜「我、神崎 蓮夜が汝の枷を解き放つ。来い！四番目の眷獣、」

甲殻の銀霧（ナトラ・シネレウス）！”

オレは眷獣を呼び、辺り一面を霧状態にした。そしてオレはみんなにそれぞれの役割を説明する

蓮夜「カナリアはオレの側でみんなの強化な」

カナリア「うん！」

蓮夜「レムは悪いんだがカナリアの護衛だ」

レム「はい」

蓮夜「他は何の制限もねえ！派手に行け!!」

十六夜「ありがてえ！」

タツマキ「ふん！私1人で十分なのに！」

クロメ「はくい」

達也「わかった」

ティナ「わかりました」

アンナ「(コクツ)」

蓮夜「行けっ！」

オレの号令とともにみんなは姿を消す。そしてオレは空に向かって手を出す

カナリア「あれ？あの子達呼ぶの？」

蓮夜「せつかくの機会だからな。こういう時でもないど体動かせないだろ。それにあとで何言われるかわかんねえし…」

レム「ふふっ、そうですね」

オレはある子達の名前を叫ぶ

蓮夜「レア！ミル！ルカ！」

その声に反応したように3つの大きな魔法陣空に現れ、そこからオレの使い魔である三匹の龍が姿を現した

レア『蓮ちゃんから呼んでくれるなんて！』

ミル『どういう風の吹きまわしかしら？』

ルカ『どうしたの？』

蓮夜「まあ見ての通りだ。今ならどんだけ暴れてもいいぞ？」

オレはニヤリと笑いそう言う

レア『本当!?!』

ミル『あらく、じゃあお言葉に甘えちやおうかしらく』

ルカ『やったー!』

三匹はそれぞれそう言いながら相手へ攻撃し始めた

ティナ「すごい元気になりましたね」

蓮夜「今までほとんどやらせてられなかったからな。ティナはここでいいのか？」

ティナ「はい：／／いつものように、していただきたくて……／

／／

蓮夜「了解だ」

オレはそう言ってその場に座る。ティナはオレの横に寝そべりライフルを構える。オレはそうしたティナの頭に手を乗せる。なんでもティナにとってこうするといつもより数段集中できるらしい。そしてティナの狙撃が始まった

蓮夜「カナリア、頼む」

カナリア「わかった！♪」

カナリアが歌い始めた。これでみんなは魔力も減らないし傷もすぐ回復する。こんな戦いで負傷するやつはいないだろうが：そこへ

蓮夜「アンナ？」

アンナ「…」

アンナが胡座をかいているオレに腰かけてきた

蓮夜「アンナもここでいいの？」

アンナ「私はここからでもできる」

蓮夜「そうだな」

正直これぐらいの戦力であればうちのみんなは一步も動かなくても掃討できるだろう。でもみんな軽い運動がてら動きたいらしい

蓮夜「ん？アンナ、ティナ、ちよつとわりー。行ってくる」

ティナ「はい」

アンナ「(コクッ)」

オレは校舎の方に新たな魔力を感じたので2人のそう告げてティナの頭から手を離しアンナを降ろす

蓮夜「レム、ここはよろしくな」

レム「行つてらっしゃいませ」

オレは校舎に向かって地面を踏み込む

校舎に入った瞬間に一気に爆発した。オレはそこにいるやつらをまとめて防御壁で守った

蓮夜「おいおい、こんなことするやつはどこのだいつだよ」

「ご機嫌よう永遠の皇帝、私はカテレア・レヴィアタン。お見知り置きを」

サーゼクス「どういうつもりだ、カテレア」

カテレア「この会談の逆の解答にたどりついただけのこと。神と魔王がいらないのならばこの世界を変革すべきだと」

セラ「カテレアちゃん、やめて！どうしてこんな…」

カテレア「セラフォル…私からレヴィアタンの座を奪っておいてよくもぬけぬけと！」

セラ「私は…」

カテレア「安心なさい！今日この場であなたを殺して私が魔王レヴィアタンを名乗ります」

アザゼル「やれやれ、悪魔のクーデターに巻き込まれたと思えば」
ミカエル「あなたの狙いはこの世界をそのものというわけですね」
カテレア「ええミカエル。神と魔王の死を取り繕っているこの腐敗した世界を私達の手で再構築し変革するのです」

蓮夜「はあ」

カテレア「：私に何か不満でも」

蓮夜「いや何言い出すかと思えばさ、全く子供みたいな考え方でこんな騒ぎ起こして：」

カテレア「私が、子供ですって：言わせておけば!!!」
ドンツ!!

カテレアがオレに向けて魔法を繰り出そうとした瞬間、カテレアの両肩が撃ち抜かれた

カテレア「ぎやあああああ!!!」

撃った正体はティナだった

ティナ「お兄さんに手出しはさせません」

蓮夜「レヴィアタンの末裔がこんなんじゃないだろ。やっぱりレヴィアタンはセラがいいだろ」

セラ「蓮くん：」

蓮夜「セラ、自信を持って」

セラ「うん：ありがと：」

セラは涙を流し顔を手で隠して座り込んでしまった

カテレア「私が、こんなところで!!!」

カテレアの体が「黒い蛇で」包まれ魔力が上がり傷が治った

蓮夜「その蛇、やっぱりそういうことか」

アザゼル「蓮夜、あれが何かわかんのか？」

蓮夜「ああ、やめとけって言ったんだけどな」

そこへ

ユウキ「蓮夜ー!」

黒歌達を援護し行っていたみんなが戻ってきた

蓮夜「おつかれ、みんなも好きにやっついていいぞ」

『はい（うん）（わかったにや）！』

蓮夜「リアス、一誠、悪いがここはオレ達に任せてもらう。怪我したいなら参加してもいいぞ？」

リアス「いえ、任せるわ」

一誠「悔しいが、ここはお前の言う通りにする」

カテレア「私は無視ですか！」

カテレアは無視されたことに怒りオレを襲ってきた。オレはそれを迎撃しようとするが、その必要はなかった。なぜなら…

グシャツ!!

ミル「蓮ちゃんにお痛はく、許さないよ。ああもう聞こえてないか」

人型になっていたミルの蹴りで跡形もなく砕け散ってしまったのだ

レア「ミルく！」

ルカ「ミルちゃんずるくい！ 私がやりたかったのにく!!」

後からはミルと同じように人型になったレアとルカがやってきた

ミル「早いもの勝ちだもんね。ね、蓮ちゃん」

蓮夜「おい」

レア、ルカ「あー!!!」

ミルはオレの腕に抱きついてきた。それを見て大声をあげるレアとルカ。すると

ガシツ!

オレのすぐ頭上で達也が禁止化の鎧を身に纏ったヴァーリのパンチを止めていた

達也「何のつもりだ？白龍皇」

ヴァーリ「悪いな、こちらの方が面白そうなんだ」

蓮夜「はあ、やっぱり裏切り者はお前か。アザゼルの教育はどうなってるんだ…」

アザゼル「…ヴァーリ！一つ聞きたい。うちの副総督のシエムハザが反抗勢力の団体の存在を察知していた。禍の団（カオス・ブリゲード）

ド」と言ったか」

サーゼクス「禍の団…」

セラ「危険分子を束ねるなんて、相当な実力者じゃないとそんなこと…」

そこでオレはあることに気がついた

蓮夜「そう言うことか。そのまとめ役がお前なんだな？ オーフイス」

リアス「オーフィス！」

一誠「部長？」

リアス「無限を牛耳、神をも恐れられたと言われる最強のドラゴンよ」
リアスがオーフィスについて一誠に教えているようだ

ヴァーリ「確かに俺はオーフィスと組んだ。だが俺もあいつも覇権だとか世界とかには興味がなくてな。力を利用とするから勝手にくっついてきたただけだ」

アザゼル「なるほどな…てつきりカテレアと連んで魔王の座を奪い返しにきたのかと思っただぜ」

セラ「魔王の…？」

リアス「どういうこと！」

リアスやセラは全く見当がついてないみたいだな

ヴァーリ「俺の名はヴァーリ・ルシファー」

サーゼクス「何だと」

一誠「ルシファー！」

リアス「まさか！」

ヴァーリ「俺は死んだ先代魔王の血を引く者で、前魔王である父と人間の母の間に生まれたハーフなんだ」

みんなはヴァーリの言葉におどろきを隠せていない

蓮夜「だから何だ？ お前が元魔王の息子だからって関係ねえな。今悪魔界を統治するのはセラ達だ」

ヴァーリ「だから俺は覇権などには興味が無い。先ほども言ったが俺は強いものと戦いたいんだ。だが兵藤 一誠」

一誠「っ！」

ヴァーリ「君は俺のライバルとしての存在であるのにあまりに弱すぎる。弱すぎて笑えるぐらいな」

一誠「何だっ!」

ヴァーリ「君と俺には天と地ほどの差がある。いや、ありすぎる」
一誠「だから、どうしたって言うんだ!」

ヴァーリ「だから俺は今のお前になど興味はない。今の俺が戦いたいのはお前だ!永遠の皇帝、神崎 蓮夜!」

蓮夜「あ?」

ヴァーリ「ん?興が乗らないか?ならこうしよう、今からお前の大切な者を殺そ:グハッ!」

蓮夜「黙れ:」

オレはヴァーリ言うおうとしたことを遮るようにヴァーリを殴り飛ばす。飛ばされたヴァーリの纏っていた鎧は碎け地面に蹲っている

ヴァーリ「ははっ、すごいな。たった1発でこの破壊力か:」

ヴァーリはまた立ち上がり再び鎧を身に纏う

蓮夜「おいおい、まだ実力差がわかんねえのか?お前がさつき言ったことと同じだ。オレとお前は天と地の差、いや、もう虚数の彼方ほどの差があるんだぞ。お前じゃあオレの眷属にすら勝てねえよ」

ヴァーリ「ならお前のその眷属を殺してみようか:」

バタン!

ヴァーリはその言葉を発した瞬間、前のめりに倒れた

蓮夜「やってみろよ」

その理由はオレがヴァーリの目にとまらないスピードでヴァーリに一撃を食らわしたからだ

蓮夜「おい、そこにいるんだろ?」

オレの声かけで結界が破壊され、空から1人の人物が降りてきた
「今こいつが殺されては困るのでな」

蓮夜「美猴、闘戦勝仏の末裔か」

美猴「こいつを殺さないでくれたのは感謝する」

蓮夜「いいからさっさと連れて行け。いいか?みんな」

サーゼクス「ああ」

アザゼル「：仕方ねえか」

ミカエル「私も構いません」

セラ「うん」

蓮夜「ということだ。早く行け」

そう言うと美猴はヴァーリを連れて消えていった

残党狩りも既に完了していた。よって三勢力トップ会談襲撃は幕を閉じた

冥界合宿のヘルキヤット 第31話

朝、それは必ず来るものでこの人間界に住んでいる以上絶対に起きないといけないわけで…

オレはゆつくりと目を開ける

朱乃「あらあら、おはようございます♪」

蓮夜「朱乃!?!なんでここに」

朱乃「昨日の晩にお邪魔させていただいたのですわ」

蓮夜「でも誰が入れたんだ…」

朱乃「シエーレさんですわ」

蓮夜「シエーレ…」

オレが起きるとオレの上に朱乃が「裸」でいた

蓮夜「まあこの際それは後で聞くとして…早く降りて服を着ろ!」

朱乃「あらあら、私の体はお気に召しませんか?」

蓮夜「そういうことじゃねえ。常識の問題だ」

朱乃「いいではありませんか」

バタン

朱乃がさらにオレに詰め寄ろうとした時部屋のドアが開いた

シエーレ「朱乃さん…何をしているんですか?」

蓮夜「シエーレ!」

そこにはシエーレが何ともドス黒いオーラを纏いながら立っていた

朱乃「うふふふ、蓮夜くんを起こしていただけですわ」

シエーレ「それなら裸のならなくてもいいではないですか…」

朱乃「朝は人肌が恋しくなるものですから」

うふふと不気味な笑いをしながら静かに言い争う2人。そんな中、オレの布団がモゾモゾと動いた。オレはそつと中を確認してみると

小猫「兄様…」

ティナ「…お兄さん」

小猫とティナがオレに抱きつきながら寝ていた。まだ完全には起きてないらしく、寝ぼけ状態でオレを呼んでいる

蓮夜「2人とも、まだ寝てて大丈夫だぞ」

ティナ「なら…もう少しだけ…」

小猫「さすが、兄様…です…」

オレは今の現状を2人に見せないべく、2人の頭を優しく撫でてもう一度眠らす

ちなみに朱乃とシエーレの静かな戦闘はそれから30分続いた

―学校―

なぜうちに朱乃と小猫がいたかというところ、昨日部活の新しい顧問に
なぜかアザゼルがなったらしい。そこアザゼルからグレモリー眷属
の戦力増強のためグレモリー眷属はリアス含めて一誠の家で暮らす
ことになったらしい。だが小猫は黒歌がオレのところにいるため、朱
乃は自身の正体を知っていて尚且つ同じような境遇のジブリールが
うちにいるからこつちで暮らすことになったらしい。アザゼルめ、何
にも言わずに勝手に決めやがって…！発シメるか

そんなことを小猫と朱乃から聞きながらオレは登校した。オレの
眷属のみんなは黒歌以外不満げだったがオレが追い返すのも何だと
言うのと渋々承知してくれた

そして明日から夏休み。うちのクラスの3バカトリオはいつもの
ようにバカ騒ぎをしている

松田「いよいよ明日から夏休み！」

一誠「おう！紳士の夏！俺達の夏だ！」

元浜「夏といえば海にプールだ！オレのスカウターにも磨きがかか
るぜ」

スカウターって、それただのメガネだろ

桐生「変態トリオは夏の計画？」

元浜「なに！」

一誠「誰が変態トリオだ！」

松田「消えろ、桐生 愛香！メガネ属性は元浜で間に合ってたんだ！」
桐生「ふん！そんな変態メガネと一緒にしないでくれる。属性が汚れる」

元浜「なんだと！」

属性が汚れるってどういうことだ？

一誠「元浜のメガネはな女子のバストを瞬時に数値化できんだぞ！」

元浜「貴様は…80・5ってところか」

蓮夜「おい3バカ」

一誠「蓮夜！お前も俺達をバカにするのか！」

蓮夜「実際にバカなんだからしようがねえだろ」

3バカ「「うっ！」」

蓮夜「お前らがどんな夏休みを過ごすかは自由だけどな。変なことやってみろ。オレが制裁を加えるからな」

一誠「ひっ！」

元浜「お、お前1人など、おおお恐れるに、たらんわ…！」

松田「そ、そうだ！」

蓮夜「なら助っ人を呼ぶか。達也ー」

達也「なんだ？」

蓮夜「元浜が深雪を卑猥な目で見てたぞ？」

その瞬間達也は普段から目つきが悪い方なのに一層元浜を睨みつける

達也「元浜…ちよつと来い」

元浜「えつ、ちよつと、うわあああ！」

達也は元浜の首根っこを掴んで教室から出た

蓮夜「おーい十六夜、松田お前と遊びたいらしいぞー。お前なんか相手にならんらしい」

十六夜「へえ、松田。ならお外で遊ぼうか」

松田「ちよつ！俺、そんなこと一言も、ぎやあああ！」

十六夜も達也同様松田を持って行った

蓮夜「さあて一誠。お前は何かいい…？」

オレは手をポキポキ鳴らして一誠に歩み寄る

一誠「すいませんでしたああああ!!!」

一誠は勢いよく土下座して頭を地面につけている

蓮夜「わかればいいさ」

オレは自分の席に戻る。達也と十六夜も少しして帰ってきた。ガクブル状態の元浜と真つ白になった松田を引きずって

ーオカルト研究室ー

オレは今眷属全員を連れてオカルト研究室の部室へ来ている。なんでもリアスから夏休みのことについて話したいことがあるらしい

一誠「なあ木場、お前は夏休みの予定とかあるのか？」

祐斗「ああ、一誠くんは初めてのだったね」

アーシア「小猫ちゃんは何かするんですか？」

小猫「兄様と姉様と過ごします」

黒歌「白音、どこ行きたいにや？蓮夜が連れて行ってくれるにや」

蓮夜「オレかよ…」

そうな他愛もない話をしているとリアスと朱乃が戻ってきた

リアス「みんな揃ってるわね」

リアスはソファアーに座り話し始めた

一誠「冥界に帰る？」

リアス「夏休みの間故郷に帰るの。毎年のことなのよ？ってどうしたの、一誠」

一誠「部長が突然帰るって言い出しすから、俺を置いて帰っちゃうのかと思いましたよ…」

一誠はそう勘違いしたようで涙を浮かべている

リアス「そんなわけないでしょ。あなたと私はこれから1000年、1000年単位で付き合うのだから安心しなさい。あなたを置いて

なんか行かないわ」

一誠「はい部長」

リアス「そういうわけでも明日からみんなで冥界に行くわ。長期旅行の準備をいってちょうだい」

一誠「えっ」

アーシア「私達もですか？」

リアス「主人と下僕なのだから同行するのは当然よ」

アーシア「生きているのに冥界へ行くなんて緊張します！死ぬ気で行きたいと思います」

ゼノヴィア「主に仕えていた身が地獄に送ったもの達と同じ場所に足を踏み入れるとは、悪魔になった元信者にはお似合いだね」

蓮夜「それを言うなら今現在神代行のジブリールが悪魔なんだぞ」

ジブリール「そうでございますね」

グレモリー眷属のみんなはそうだったという顔をする

アザゼル「俺も冥界へ行くぞ」

一誠「アザゼル先生」

先生…？

リアス「あなたいつの間にも！」

アザゼル「俺の気配を感じられないようじゃやっぱ修行が足りないようだな…グハツ!!」

アザゼルはいつもリアスが座っているイスに現れたのでオレは朱乃と小猫のことを黙って決めた腹いせに1発殴った

アザゼル「何すんだ！蓮夜！」

蓮夜「オレはお前の気配を感じ取れるんでね。なぜ朱乃と小猫のことを勝手に決めた？」

オレはもう1発殴る勢いで手をポキポキ鳴らす

アザゼル「今日伝える予定だったんだ！本当ならお前の家に住むのも今日からのはずなんだ」

蓮夜「は？朱乃、小猫…」

オレはその言葉を聞いて朱乃と小猫の方を見る

朱乃「うふふ♪」

小猫「∴／／／」

朱乃は笑顔で、小猫は俯いて何も言わない

蓮夜「はあ、もういい。話を戻してくれ」

リアス「あなたをここに呼んだのは、あなたも夏休み中冥界へ帰るのか聞きたかったからよ」

蓮夜「帰るが、なんでだ？」

リアス「お母様があなたを連れてこいとうるさいのよ」

蓮夜「ああ∴」

その後オレは冥界へ帰ったときにグレモリー家へお邪魔することを約束した

余談だがソーナにもリアスと同じことを聞かれ、理由はセラが連れてこいとうるさいらしい。これはオレのせいなのか∴

ー翌日ー

オレ達とリアスは別行動で冥界へ帰る。グレモリー眷属は悪魔専用の列車で帰るようだ。オレ達はいつも通りオレの魔法陣で帰る

冥界に帰るとそこには懐かしい顔ぶれが揃っていた

ユウキ「お姉ちゃん！」

「ユウキ！おかえり」

クロメ「ただいま、お姉ちゃん」

「ああ、おかえりクロメ」

レム「お姉様、ただいま帰りました」

「ええ、おかえりなさいレム」

「ティナ、おかえりなのだ！」

「お、おかえりなさい」

「ティナやんお久ー」

「ティナ、蓮夜。戦おう」

「小比奈さん落ち着いて、おかえりなさい」

ティナ「ただいま戻りました、みなさん」

蓮夜「また後でな」

シエーレ「皆さん、出迎えありがとうございます。あわわわ、メガネ
メガネ」

シエーレがお辞儀したらメガネを落とした

「相変わらずね、シエーレ」

「シエーレは本当ダメだなー」

「おかえりみんな！蓮夜、久しぶりに一緒に鍛錬するか!？」

「蓮夜！またお前はこんなに可愛い女の子を侍らせやがって！嫌味か
！オレに対する嫌味なのか!？」

「みなよく戻ってきた」

「ようやく帰ってきたんだ」

「みんな久しいな」

蓮夜「また今度なブライト。ラバは相変わらずだな。ナジエンダ、
そいつは？」

そこにいたのはユウキの姉である藍子。クロメの姉であるアカメ。
レムの姉であるラム。ティナと同じ呪われた子供達でオレが引き
取った藍原あいはら えんじゆ、延珠えんじゆと布施ふせ みどり、緑きりはら ゆずき、桐原きりはら ゆずき、弓月ゆづき ひること蛭子こひな、そして
千寿せんじゆ かよ、夏世かよ。クロメやアカメ、シエーレと同じ暗殺部隊に所属してい
た「ナイトレイド」のマイン、レオーネ、ブライト、ラバック、スー
さんことスサノオ、チエルシー、そしてナイトレイドのボスであるナ
ジエンダ。ナジエンダのとなりには見知らぬ若い男が立っている。

ナジエンダ「ああ紹介しよう。新たにナイトレイドに加わったタツ
ミだ」

タツミ「タツミです！よろしくお願いします！」

蓮夜「そう固くならなくていいよ。神崎 蓮夜だ。よろしくな、
タツミ」

オレは自己紹介をしてタツミと握手をする

蓮夜「他のみんなは？」

ナジエンダ「もう屋敷に集まっているさ。お前達の戻りを心待ちに

しているぞ」

蓮夜「そうか。じゃあ帰るか」

オレの一言にみんなは返事をしてオレの屋敷に向かう

ちなみに屋敷へ戻り途中オレは延珠、弓月、小比奈を順番に肩車した。それをテイナ、緑、夏世、犬千代、アンナは羨ましそうに見ていた

第32話

―屋敷―

屋敷に着いたオレ達は荷物を自分の部屋に持っていき大きな広間に集まった。そこにも懐かしい顔ぶれが勢揃いしていた。そんなオレは前に立ち、集まってくれたみんなに挨拶をする

蓮夜「みんな、とりあえずただいま。今日は集まってくれてありがとう。みんなに会えて嬉しい。今はこれくらいにしてこの後夕飯までは自由に過ごしてくれ」

オレは最後に「解散!」と言ってキッチンに行き、夕飯の準備に取り掛かった。手伝いとしてスーさん、タツミ、レム、藍子、深雪が手伝ってくれる

蓮夜「みんな悪いな、手伝ってもらって」

レム「何言ってるんですか、普通なら主人である蓮夜くんによってもらう方が変なんですよ」

深雪「そうですよ」

藍子「それにみんなの方が早くできるしね」

蓮夜「ありがとな。しかしタツミもなかなか手際がいいな」

タツミ「俺村暮らしだったから、自然と身に付いたんです」

スサノオ「タツミの料理のできは俺が保証する」

蓮夜「スーさんのお墨付きなら頼りになるな」

料理中はほとんどタツミのことや、逆にオレのことをタツミに話したりしていた

蓮夜「そういえば、あいつらはまだ帰ってないのか?」

藍子「うん。でも夕飯には帰ってくるよ」

蓮夜「またうるさくなりそうだな」

深雪「仕方ありませんね」

レム「皆さん蓮夜くんに会えて嬉しいですよ」

そうだといいんだがな

ー夕飯ー

大勢で作ったので予定より早く作り終わった。オレらはそれをさつき行つた大広間へ運んでいった。そこには既にパーティー用の丸いテーブルが何台も置かれていた

オレはみんなを呼び、先ほどと同様前に出た

蓮夜「みんな、さつきも言ったがホントに集まってくれてありがとう。今日は楽しんでくれ！じゃあ、乾杯！」

『乾杯!!』

みんなはオレの号令に返す

「蓮夜ー！」

蓮夜「おおナツ。久しぶりだな」

大声で来たのはナツ・ドラグニル。有名な組織、妖精の尻尾（フェアリーテイル）の1人だ

ナツ「おう！相変わらず飯美味えな！」

蓮夜「たくさんあるから、遠慮しないで食べよ。グレイもな」

ナツの横にいるのはグレイ・フルバスター。こっちも妖精の尻尾の1人だ

グレイ「おう！ああ！ナツてめえ！それオレのだぞ！」

ナツ「早いもん勝ちだ！」

そのまま2人は食べ比べ競争を始めてしまった

「蓮夜ー！」

「蓮夜さんー！」

蓮夜「おかえりルーシイ、ウエンデイ」

次にやって来たのは同じく妖精の尻尾の一員であるルーシイ・ハートフィリアとウエンデイ・マーベル、エルザ・スカーレットだ

ルーシイ「蓮夜こそおかえり！」

ウエンデイ「おかえりなさい！」

蓮夜「エルザも今日は楽しんでくれ」

エルザ「ああ、久しいメンツも揃つてることだしな」

蓮夜「あんま飲みすぎんなよ」

エルザ「わかっている」

エルザはそう言って酒瓶を片手に行ってしまった

「蓮夜ー♪」

「蓮兄ー♪」

蓮夜「おい、抱きつくな。ミラ、リサーナ」

今度は妖精の尻尾で全勢力で女優としても有名であるミラジェー
ン・ストラウスとその妹のリサーナ・ストラウスだった

ミラ「いいじゃない。久しぶりなんだから」

リサーナ「そうそう。蓮兄全然帰ってこないんだもん」

蓮夜「悪かったな。エルフマンは？」

リサーナ「あつちで男どもと飲んでるよ」

リサーナが指差した方でミラの弟でありリサーナの兄であるエル
フマン・ストラウスが「漢ー！」と叫びながらワイワイやっていた

ルーシイ「ミラさん！リサーナ！」

ウエンデイ「お二人ともズルいです！」

ミラ「あら、なら2人もやればいいじゃない」

リサーナ「そうだよ。蓮兄は心が広いから何人でも相手してくれる
よ」

蓮夜「人を遊び人みたいに言うなよ」

オレはそう行って他にも行かなきゃと告げてその場を離れた

「お、おーい蓮夜ー」

蓮夜「レオ、よく来たな」

レオ「当たり前だろ」

「ちよつとー、私は無視ー？」

蓮夜「そんな気はなかったんだがな。すまんエリカ」

エリカ「ウソウソ、大丈夫だよ」

オレは達也と深雪の友達である西城（さいしじょう）レオンハルトに呼ばれ、そ

こには同じく達也と深雪の友達の千葉 エリカがいた

蓮夜「しかし、相変わらず2人は一緒にいるんだな」

エリカ「ちよつと、蓮夜くんまでそんなこと言うの？」

レオ「ぎつき達也からも同じことを言われたぜ」

深雪「お二人は本当に仲がいいのね」

達也「そうだな」

エリカ「違う！」

エリカは深雪の言葉に猛反対する

蓮夜「そういえば美月達はもうしたんだ？」

エリカ「はあ、美月とミキは用事で来れないんだって」

深雪「雫とほのかも家の都合で来れないときつき連絡が…」

蓮夜「そつか。それは残念だな」

まあ長期でここにいるわけだし、時間が空いたら会いに行くか。特にほのかは達也にめちやくちや会いたいだろうしな

オレは「じゃっ」と言ってその場を離れる

その後飲み物を持ちながら歩いていると誰かが後ろから勢いよく抱きついて来た。その正体は延珠だった

延珠「蓮夜、こつちに来るのだ！」

蓮夜「わかったから引つ張るな」

延珠はオレの服を引つ張りどこかへ連れて行く

小比奈「あー、蓮夜だー」

「おやおや、久しぶりだね。蓮夜くん」

蓮夜「影胤さん。今日は来れたんですね」

影胤「ああ、お邪魔させてもらってるよ」

小比奈の隣にいる仮面を被り燕尾服とシルクハットを身につけているのは小比奈の実の父親である蛭子ひるこ 影胤かげたねさんだ。ほとんどは外で仕事をしているので小比奈はこつちで面倒を見ているのだ

「久しぶりですね、蓮夜さん」

蓮夜「蓮太郎、なんか大きくなったな」

蓮太郎「なんすかそれ」

蓮夜「はははは！木更も元気そうだね」

木更「はい！これ全部食べてもいいんですか!？」

蓮夜「ああ、好きなだけ食べな」

そしてまだ高校生で木更の元で民間の警備を頑張っている
里見 蓮太郎と蓮太郎が所属している会社の社長である天童 木更
も来ていた。木更は完全に食い物狙いだろ

「オレ達に挨拶はなしか？ボーイ」

蓮夜「わかってるよ。妹が構ってくれないからってそう落ち込む
な、玉樹」

玉樹「うるせえよ！そ、そんなんじやねえ…！」

オレの言ったことに焦る弓月の兄の片桐 玉樹。凶星かよ…

蓮夜「彰磨さんもよく来たな」

彰磨「久しいな蓮夜」

蓮太郎の兄弟子である薙沢 彰磨さん。蓮太郎や木更と同じ道場
で腕を磨いた武人だ

弓月「おにい、恥ずかしいなあもう！」

蓮夜「そう言ってるな」ナデナデ

弓月「く／＼／／」

緑「彰磨さんは里見さん達に会えて嬉しそうです」

蓮夜「そうだな」ナデナデ

緑「く／＼／／」

2人の頭を撫でてやると2人とも顔を赤くする

玉樹「あー！俺の妹になにやってやg…」おにいうるさい！…ガ
ハッ！そんな…妹よ…

玉樹は弓月にひと蹴りされてダウンしてしまった

蓮夜「夏世は楽しんでるか？」

夏世「はい、でも蓮夜さんに会えなくて寂しかったです」

蓮夜「…すまん」

夏世「そう思うならもう少し頻繁に帰って来てください」

蓮夜「…善処する」

夏世「(ジ…:…:)」

蓮夜「？」

夏世「(ジ…:…:)」

夏世は無言でオレを見てきた。オレはそつと夏世の頭に手を乗せ

る

蓮夜「こ、こうか…?」

夏世「正解です♪」

よかつた…

延珠「蓮夜！妾にもナデナデするのだ！」

小比奈「蓮夜！私も！」

ティナ「お兄さん！」

その後子供達全員の頭を撫でさせられた

チエルシー「蓮夜く、こつちにも来てよ」

子供達からやつとのこと解放されたところに今度はチエルシーに連行された

レオーネ「お、来たな。おら蓮夜！久しぶりなんだから酒を注げ！」

蓮夜「道理がめちやくちやだな」

そう言いながらもレオーネのグラスに酒を注ぐ

ナジエンダ「まあこういう時間だからな。少しは羽目を外してもいいだろう」

蓮夜「そうだな。しかしナイトレイドも変わったな。まさかメインが惚気るとはな」

メイン「ぶふつ!!な、ななに言ってるのよ！そんなわけ、ないじゃない！」

蓮夜「さつきからタツミばっか見てんのか？」

メイン「っ！／＼／＼」

メインは顔を真っ赤にして黙ってしまう。その現況のタツミはスーさんやブラートと話していた。シエーレはメインの横でクスクスと笑っている。クロメは姉のアカメと一緒に食事をしているのが見て取れる

チエルシー「ねえ蓮夜く、私には何も無いの〜?」

蓮夜「そう言われてもな…何すればいいんだよ」

チエルシー「そんなの自分で考えなよ」

チエルシーはピイツとそっぽを向いてしまった

蓮夜「はあ…手持ちが何もないからこれで我慢してくれ」ナデナデ
チエルシー「くま、今日はこれで勘弁してあげる♪」
オレは「それはどうも」と言っつてその場を離れる

「雪菜―！雪菜！雪菜―！」

少し離れたところから雪菜の名前を連呼する声が聞こえて来たのでその声のする方に行つてみた。すると雪菜が1人の女性に抱きつかれて頬擦りされていた

雪菜「紗矢華さん」

蓮夜「相変わらず仲いいな」

紗矢華「神崎 蓮夜！私の雪菜に変なことしてないでしょうねえ！！？」

蓮夜「してねえよ。信用ねえな」

紗矢華「あ、当たり前でしょう！それに私はあなたのことなんて、き…嫌いだし…！」

「照れ隠しでもそんなことを言つてはダメですよ、紗矢華」

「お兄さん。お久しぶり、でした」

そこへやって来たのは飲み物を持ったラ・フォリア・リハヴァインと彼女と瓜二つの叶瀬 夏音かなせ かのんだった

紗矢華「殿下！私は別に照れ隠しなどは…！」

ラフォリア「久しぶりですね、蓮夜」

蓮夜「ああ、ラフォリアと夏音は来て大丈夫だったのか？」

夏音「はい。せっかくですからお兄さん達と会つてこいとこのこと、でした」

蓮夜「そっか」

ラフォリアはとある王国の王女なのだ。とある事情で夏音と身内であることを知り、夏音も今はそつちで暮らしている

「まったく、前にあつた時よりも女の子増えてない？」

「さすが蓮夜だな」

「学業も怠つてはいないだろうな」

「…」

飲み物を片手に近づいて来たのはコンピューターのことに關しては右に出る者はいない藍羽あいは 浅葱あさぎと裏では情報屋として活動している八瀬やぜ 基樹もとぎ、魔術師でありながら小学生並みの体格の南宮みなみや 那月なつきとこの屋敷の専属メイドであり普段是那月ちゃんのお手伝いをしてい
るアスタルテだ

蓮夜「そんな言い草はないんじゃないか？浅葱」

浅葱「事実でしょ」

基樹「お前はどんどんハーレムになってくな」

蓮夜「基樹、お前帰つてこれなくなるレベルで殴り飛ばしてやろうか？那月ちゃんも変わりねえみてえだな」

那月「私を那月ちゃんと呼ぶな。まあ問題児が何人かいるが問題はない」

那月ちゃんはちゃん付けで呼ばれることにひどく抵抗があるらしい。しかしみんな是那月ちゃんと呼び続けている。ちなみに那月ちゃんは人間界で高校の先生をしている

蓮夜「アスタルテもここの掃除とかありがとな」

アスタルテ「問題ありません」

アスタルテはこんな風に必要最低限のことしか口を開かないのだ

他にも今日来れなかったやつらにはいるがユウキは姉の蘭子と、レムも姉のラムと、犬千代とアンナはティナ達と、黒歌とカナリアは妖精の尻尾のメンバーと、ジブリールは深雪達と楽しく過ごしているようだ。タツマキと十六夜の姿は見えないがそれぞれ自分の時間を過ごしているのだろう

この帰省は楽しくなりそうだな

第33話

ー翌日ー

今日オレはリアスに呼ばれてグレモリー家の食事に招待されたのだ。だがみんなを連れて行くわけには行かないから今日のところは珍しく仕事のない妖精の尻尾のメンバーと一緒に邪魔することにした

昨日のうちに帰って来ていたメンバーに加え、新たに今日の朝合流したガジル・レッドフォックスとレヴィ・マクガーデン・ジュビア・ロクサーの3人を加え、グレモリー家の屋敷に向かった。道中オレはルーシィとリサーナに両腕をがっしり組まれてた。後ろからはウエンデイとミラ、レヴィからすごい睨まれている気がした…

ーグレモリー邸ー

目的地に到着すると屋敷の扉が開き、中からグレイファイアが出て来た

グレイファイア「遠い中お越しいただきありがとうございます。中でジオテイクス様方がお待ちです」

蓮夜「こつちこそお招きありがとな」

オレ達はグレイファイアの後に続いて屋敷内に入っていく。そしてグレイファイアがとある部屋のドアを開けるとそこにはリアスに似た若い女性が立っていた

「あら、お久しぶりですね。蓮夜さん」

蓮夜「ああ、久しぶりだなヴェネラナ。お招き感謝するよ」

彼女がサーゼクスやリアスの母であるヴェネラナ・グレモリーだ

ヴェネラナ「ゆっくりしてらしてね。リアス達もすぐくると思うので」

蓮夜「わかった」

オレは部屋から出て行くこうとするがヴェネラナに腕を掴まれ阻まれた

ヴェネラナ「蓮夜さんは『私の部屋』でお休みになって」

『はいー!!!』

ヴェネラナの一言に大声をあげる女性陣

蓮夜「遠慮するよ」

ヴェネラナ「それは残念。でもあなたが来たいときならいつでもいいですからね♪」

夫がいるにも関わらずこのスキンシップは変わんねえな

その後すぐにリアス達が到着してみんなで夕飯の席を囲んでいる。ちなみにオレの隣はミラとウエンデイだ

ジオ「リアスの眷属諸君、そして蓮夜殿と御付きの者方、我が家だと思つて気を楽にしてほしい」

蓮夜「ジオ殿、始める前に少しよろしいか？」

ジオ「構わんよ」

蓮夜「改めて本日はお招きいただきに感謝する。知らぬ者もいるだろうから今日オレと一緒に出席してくれた者達を紹介する。ナツ」

ナツ「ああ。ナツ・ドラグニルだ」

グレイ「グレイ・フルバスターだ」

ルーシイ「ルーシイ・ハートフィリアです」

エルザ「エルザ・スカーレットだ」

ウエンデイ「ウエンデイ・マーベルです」

ミラ「ミラジェーン・ストラウスよ」

エルフマン「その弟のエルフマン・ストラウスだ」

リサーナ「その妹のリサーナ・ストラウスです」

ガジル「ガジル・レッドフォックスだ」

レヴィ「レヴィ・マクガーデンです」

ジュビア「ジュビア・ロクサーですわ」

精霊の尻尾のメンバーが順番に自分の名前を言っていた

サーゼクス「まさかかの有名な精霊の尻尾と君が知り合いだったとはな」

リアス「精霊の尻尾！」

一誠「部長知ってるんですか？」

朱乃「少数で悪魔、天使、墮天使のどの勢力とも互角に渡り合うこ

とのできる有名な組織ですわ」

驚きを隠せないリアスに変わって朱乃が説明する

蓮夜「まあオレ達とは数年前から協力関係ってことで今ではオレの大事な仲間だ」

ルーシイ「：／／／」

ウエンデイ「：／／／」

ミラ「蓮夜ったら：／／／」

リサーナ「もう：／／／」

レヴィ「：／／／」

若干5人ほど顔を赤くしているがオレは気にせず食事に手をつける。一誠やアーシア、ゼノヴィアは慣れない手つきで進めている。ナツやガジルはそんなの関係なしにバクバク食ってるが…

一誠「どうしたんだ？」

ギヤスパ「こんな広い場所で食事なんて、緊張で味がわかりません」

ギヤスパ「も緊張しているようだ

ジオ「ときに兵藤 一誠くん」

一誠「はい」

ジオ「ご両親はお変わりないかな？」

一誠「はい、おかげさまで2人とも元気です。家をリフォームしていただいてとても喜んでいきます」

ジオ「いやあ、私はもつと大きな城を用意しようと思っていたんだが…」

一誠「お城!？」

リアス「お父様!こちらの文化を押し付けては…」

ジオ「だからせめて若いメイドを50人はつけよう」と

一誠「メイド!」

一誠はメイドという言葉にテンションがあがり、勢いよく立ち上がる

ジオ「しかし」そんなことをしたら一誠の生活に支障がでます!」と娘に諫められてしまったな。はははは!」

一誠「さすが部長：わかってらっしやる…」

ジオ「ときに兵藤 一誠くん」

一誠「はい！」

ジオ「今日から、私のことをお義父さんと呼んでくれて構わない」
それは気が早いんでないかい…？」

ヴェネラナ「あなた、性急ですわ。まずは順序というものがあるでしょう？」

リアス「もう！お父様お母様ったら！」

リアスは恥ずかしくなったのか顔を真っ赤にして立ち上がり、部屋を出て行ってしまった

ヴェネラナ「では私は蓮夜さんのことを『旦那様』とお呼びしましょうかしら♪」

蓮夜「は？」

『えー!!!』

ジオ「ヴェ、ヴェネラナ…？それはどういう…」

ヴェネラナ「そのままの意味ですよ」ウッフ

いきなりヴェネラナが変なことを言いだしたかと思いきやさつきまで静かだった女性陣がオレに詰め寄る

ミラ「ちよつと蓮夜どういうことよ!？」

リサーナ「蓮兄！」

蓮夜「あいつが勝手に言ってることだろう！」

レヴィ「人妻!?人妻がいいの!？」

ルーシイ「蓮夜ヒドいよ！」

ウエンデイ「蓮夜さん…」

ミラとリサーナがオレをブンブン揺らしながら、レヴィは大声で、ルーシイとウエンデイは涙を浮かべながらオレを問い詰めてくる

朱乃「うふふ、私は何番目でもよろしいですわ」

小猫「兄様：ヒドいです」

朱乃はいつも通りの笑顔で、小猫も涙を浮かべながらこっちを見てくる

蓮夜「勘弁してくれよ」

ヴェネラナ「うふふふ♪」

その後帰ってからその5人はやけ酒をしたらしく、深夜にオレの部屋に忍び込んできてオレは一晩中5人のご機嫌をやらされた

ー翌日ー

今日はアザゼルに呼ばれてリアス達の特訓の見学に来ている。何でもオレ達の意見が聞きたいらしい

アザゼル「よし、みんな集まってるな。人間界の時間で20日間、特訓メニューを作った。蓮夜達には見学で来てもらった」

一誠「20日も特訓すんのかよ」

アザゼル「一誠、まずはお前からだ」

一誠「えっ」

どおおん！

ものすごい音と共に1匹の龍が近づいてきた

一誠「昨日のドラゴンのおっさん！」

蓮夜「タンニーンか。懐かしいな」

タンニーン「蓮夜ではないか。そこまで強くなってしまったのか」

蓮夜「まあな」

魔龍聖（ブレイズ・ミーティア・ドラゴン）のタンニーンは元ドラ

ゴンの転生悪魔だ。一誠の特訓にはもってこいだな

アザゼル「お前の専属トレーナーだ」

一誠「なっ！」

タンニーン「ドライグを宿す者を鍛えるなど初めてだ」

アザゼル「修行中に禁止化に至らせない。ま、死なない程度に気張れ！」

蓮夜「レア達もいるか？」

アザゼル「それじゃあマジで死んじゃうからな。今回は遠慮してく」

一誠「みなさん、もう少し言方ってもんが…うわっ!!」

タンニーンが一誠の首根っこを掴み持ち上げる

リアス「一誠」

一誠「部長く…」

リアス「気張りなさい！」

一誠「そうでした…優しい部長も修行のときは鬼のしごきになるんです。うわあああ!!」

一誠はその言葉を最後にタンニーンに連れていかれてしまった

その後眷属1人1人にアザゼルが考えた特訓メニューを伝えていった

リアスは基礎練習だけではなく王としての機転と判断力を高める修行

朱乃は彼女にとって憎悪の存在であるバラキエルとの自分にある血を受け入れる修行

祐斗は彼の剣の師匠と一緒に禁止化の持続の修行

ゼノヴィアは聖デユランダルを自分の意思で使いこなす修行

ギヤスパーは町に出て引きこもりを克服する修行

小猫は格闘に加え戦術の修行。これだけはアザゼルでも教えられないので黒歌がつく

アーシアは遠距離回復の修行

オレらも何もやらないということではなく、眷属の1人1人にオレと一対一の戦闘を繰り返した。戦い方は様々だ。殴り合い、魔法のぶつけ合い、剣術。まあどれでもオレは負けなしだけどな

―屋敷―

その夜、オレの屋敷にはたくさんのおドラゴンが集結していた。それらは全部オレ達の使い。オレの使い魔であるレア、ミル、ルカに加え、ユウキの使い魔である流星龍（シューティングスタードラゴン）“スター、雪菜の使い魔である青眼の白龍（ブルーアイズホワイトドラゴン）”のアイズ、達也の使い魔である赤悪魔の龍（レッツ

ドデーモンズドラゴン)のアカ、深雪の使い魔である。氷結界の龍(トリシューラ)のシューラ、黒歌の使い魔である。迅龍(ナルガクルガ)のナル、クロメの使い魔である。幻龍(バハムート)のゲン、シエーレの使い魔である。海龍(タマミツネ)のタマ、レムの使い魔である。風翔の古龍(クシャルダオラ)のシャル、アンナの使い魔である。赤紅眼の黒炎龍(レッドアイズブラックフレアドラゴン)のクレア、ティナの使い魔である。天魔の業龍(ティマツト)のティア、犬千代の使い魔である。武者龍(ボルメテウス武者ドラゴン)のボルス、カナリアの使い魔である。夢幻龍(ラティアス)のラティが勢揃いしていた。こんなに名の知れたドラゴンが集まっていたら3勢力が束になっても勝てないな…アハハ

今はみんなそれぞれ人型になって主人との交流を楽しんでいる…はずなんだがな…

ラティ「んくお兄ちゃん♪」

ルカ「えへへ♪蓮くくん♪」

ここにいるドラゴン達の中でも年少組にあたるこの2人はまだまだ甘えん坊で、さつきからずっとオレから離れようとしな。ラティはオレの使い魔じゃないんだけどな…

蓮夜「2人ともそろそろ離れないか…?」

ルカ「やくだく」

ラティ「お兄ちゃんが全然呼んでくれないのが悪いんだからね」

蓮夜「お前の主人はカナリアだろ」

どうやら気がすむまでこのままらしい

ティア「あの2人は相変わらずよのう」

シャル「てか蓮夜ってあの2人だけには甘くない?」

フレア「まったくだ」

アイズ「でもあの2人はまだ甘えたい時期なのかもしれないね」

シューラ「それでもベツタリしすぎですわ」

レア「あの子は…!」

ミル「(今度寝てる間に忍び込んでおうかしら)」

アカ、ナル、ゲン、ボルス「「はあ…」」

その他の使い魔の女性陣はこっちを見ながら何やらブツブツ言っている。男性陣はなんかため息をついている。誰か助けてくれよ…

第34話

「パーティ会場」

オレも悪魔でありこの世で最強な存在であるためパーティには参加してくれとサーゼクスから頼まれた

今のオレとオレの眷属のみんなは男性陣はタキシードを女性陣はドレスを来ている。会場へ向かう中たくさんの人からの視線がうちの眷属達に注がれていた

蓮夜「みんな悪いな。付き合わせて」

タツマキ「本当よ！なんで私が！」

ティナ「まあまあタツマキさん……」

黒歌「なんか落ち着かないにや」

カナリア「にゃんちゃんはいいつも和服着てるからね」

雪菜「少し落ち着きませんね」

ユウキ「動きにくいね」

レム「シエールさん！スカートめくれちゃってます！」

シエール「あらら、すいません」

アンナ「…変な感じ」

犬千代「犬千代もそう思う……」

深雪「すぐ慣れますよ」

十六夜「ヤハハ」

ジブリール「面倒でございますね」

達也「諦めろ」

クロメ「蓮夜、どう？」

蓮夜「ああ、みんな似合ってるぞ」ニカツ

オレがみんなに向かってそう言うと女性陣は揃って赤面した

パーティ会場には既にリアス達は到着していた

祐斗「こんな上級クラスの悪魔達が一堂に会するなんて僕も初めて見たよ」

ゼノヴィア「まさに圧巻だね」

蓮夜「そりやあそうだろ。こんなん滅多にねえからな」

一誠「おう、蓮夜、つてなんだその格好！」

蓮夜「上級悪魔はドレスアップが必要なんだよ」

一誠「そうなのか。でもみんな綺麗だな…ウへへ」

蓮夜「一誠、お前殺されたいか…？」

うちの眷属達を変な目で見ている一誠にオレは言い放つ

一誠「すいませんしたああ!!」

リアス「くれぐれも粗相のないようにね」

蓮夜「言うの遅いだろ」

朱乃「蓮夜くん、よくお似合いですわ♪」

蓮夜「ありがとな。朱乃も似合ってるぞ」

朱乃「あらあら、うふふ♪照れてしまいますね♪」

朱乃は頬に手を当てて恥ずかしがる

小猫「兄様。カツコいいです」

蓮夜「ありがとな」ナデナデ

小猫「〜♪」

小猫にも褒められたので頭を撫でてやる。そこへ

ソーナ「ご機嫌よう、リアス、蓮夜さん」

リアス「ご機嫌よう、ソーナ」

蓮夜「おう」

リアス「そちらの合宿はどう？」

ソーナ「まずまずね」

セラ「いらっしや〜い、ソーナちゃん☆」

ソーナ「お、お姉様！」

そこへセラが場の空気を読まず走ってこっちへやってきた

リアス「ご無沙汰しています、セラフオール様」

セラ「あ、リアスちゃん。赤龍帝くんも元気そうで何より♪」

一誠「は、はい…」

蓮夜「セラ。ちつとは魔王らしくしたらd…「蓮くん！その格好素

敵すぎー!!!」…はあ…」

また大声を出しながらオレに迫って着たのでセラの頭を抑えて止

める

セラ「もう、蓮くんのイケず…」

蓮夜「うちの連中の視線が痛いからそういうのはやめてくれ」

背後からは複数の冷たい視線が感じ取れる。オレはセラの頭から手を離し、リアスとソーナに一言声をかけてサーゼクス達が壇上へ向かった

サーゼクス「ミカエルはもうすぐ到着するそうだ」

アザゼル「護衛を任せたバラキエルの連絡だと、オーデインもこっちに向かっているらしい」

サーゼクス「バラキエル殿に護衛を？」

アザゼル「念のためな。蓮夜の仲間にも護衛を任せている」

蓮夜「オレのところのもんからも連絡は入ってる。今のところ問題なく来ているみたいだ」

アザゼル「北欧の神々には主神オーデインが悪魔と同盟を結ぶのをよく思わないのもいるらしいからな」

サーゼクス「どこにも似たようなものいるようだな」

アザゼル「問題はそういうやつらを禍の団が引き入れてるってことだ」

蓮夜「まあそういうやつらの邪魔をさせないためにもオレらがここにいるんだ」

サーゼクス「すまないが頼らせてもらおうよ」

サーゼクスはオレにそう言って頭だけを下げ

蓮夜「問題ねえよ。ん？はあ…若手はこれだから…十六夜、達也、頼む」

十六夜「ああ！」

達也「わかった」

オレの指示に答えた瞬間2人は姿を消した

サーゼクス「何から何まで申し訳ない」

それから数分としないうちにオーデインが到着した
アザゼル「よお、ご苦労だったなバラキエル」

「蓮夜、ただいまー!」

蓮夜「おっと。ご苦労様、ヒメ」

舞姫「うん!」

「ヒメに触れるな!」

蓮夜「ヒメから来たんだから仕方ねえだろ」

舞姫「仲良くしないとダメだよ、ほたるちゃん」

ほたる「ヒメがそう言うなら…チツ…」

舌打ち…

オレに勢いよく飛びついて来たのが天河てんかわ舞姫まいひめ、通称ヒメで、その

後に続いて来たのはヒメが大好きすぎる凜堂りんどう ほたるだ

「はあ、やっと着いた」

「足手まといがいてどうなるかと思ったがな」

「はいはい、そうですね」

「こいつは普通の受け答えさえできんのか」

「おにい言われてるし、ウケる。あ、蓮にい」

蓮夜「霞と壱弥はもう少し仲良くできないのか」

壱弥「無理だな」

霞「そうこちらが申しているの」

蓮夜「はあ、明日葉、お疲れさん」ナゲナゲ

明日葉「うん／＼」

後からケンカしいながら入って来たのは朱雀すざく 壱弥いちやと千種ちぐさ 霞かすみで

昔ちぐさから中あすはが悪い。その後オレの元に駆け寄ってきたのは霞の妹の

千種 明日葉だ

この5人に今回のオーディインの護衛を頼んだ

アザゼル「久しぶりじゃねえか。北の国のじじい」

オーディイン「ふん、久しいの。悪ガキ墮天使」

サーゼクス「お久しゅうございます。北の主神オーディイン様」

オーディイン「サーゼクス、招きに生じてきてやったぞい」

セラ「ようこそいらっしやいました、オーディイン様」

セラはお嬢様のようにスカートを摘んでお辞儀する

オーディイン「うくん、いかなセラフォル」

セラ「はい？」

オーデイン「せつかくの宴だと言うのに若い娘がそんな色気のない姿でどうする」

セラ「…では！ミルルン☆ミルルン☆スパイラル☆」

セラはまた魔法少女に変身した

オーデイン「ほう、それは何じゃ？」

セラ「あら、ご存知ないですか？これは魔法少女ですわよ☆」

オーデイン「ほう、なかなか悪くないのお」

蓮夜「はあ、このエロじい」

オーデイン「なんじゃと！蓮夜、相変わらず儂には辛辣じゃのお！」

「オーデイン様ご自重ください！ヴァルハラの名が泣きます！」

オーデイン「お前は固いのお。それだから未だに勇者の1人も貰い手がないんじゃ」

「なっ…う…うえええん！どうせ私は彼氏いない歴〓年齢のヴァルキリーですよ！」

蓮夜「はあ…女性泣かせんなよ爺さん。ほら、ロセも泣かないで」よしよし

ロスヴァイセ（以後ロセ）「うっ…うう…蓮夜さくん…」

蓮夜「久しぶりだな。また綺麗になったか？」

ロセ「えっ！そ、そんな！綺麗だなんて…／／もう、蓮夜さんたら…／／」

泣いてたと思ったらいきなり顔赤くしてニヤニヤしだした。忙しいやつだな

オーデイン「こいつはうちのロスヴァイセじゃ。器量はいいんじやがこのように固くてのう。男の1人もできん」

そこへ

ミカエル「お待たせして申し訳ないありませんでした。オーデイン殿、あいも変わらぬご壮健ぶり嬉しく思います」

ミカエルとお付きの紫藤 イリナが到着した

ミカエルが到着したことでようやくみんなへの発表ができる

サーゼクス「悪魔、神、墮天使の3勢力は過去を反省し同盟を結ん

だが再び争いを起こさせないよう皆の力を借りたい。どうかよろしくお願いする。オーデイン殿、意見がなければ調印を」

オーデイン「ん…」

っ！これは！

『異議あり』

オーデインが調印をしようとしたところにどこからともなく声が聞こえる

オーデイン「やはり貴様か…愚か者めが」

そして天井のほうで魔法陣が開き声の主が現れた

「我こそは北欧神、ロキだ」

アザゼル「これは珍客ですな」

サーゼクス「ロキ殿、北欧の神といえども其方にこの場を荒らす権利はない」

ロキ「我らが主神殿が我ら以外の神話体系に接触するのは耐え難い苦痛でな」

オーデイン「ロキよ。今すぐヴァルハラに戻るなら許してやらんでもないが…」

ロキ「許す？ふざけるな老いぼれ」

ロセ「主神になってことを！」

ロキ「他の神話体系と結んだことは我らが迎えるべきラグナロクが実現できないではないか」

アザゼル「どっかで聞いた話だな、おい！てめえ禍の団と繋がってやがるな？」

ロキ「協力関係にあるのは認めよう。だがこれは私の意思だ。出でよ！私の愛しき息子よ！」

ロキがそう唱えると1匹の大きな獣が出現した

グワアアア!!

蓮夜「うるせえよ、犬っころ」

ドガツ!!

オレの1発のパンチでその獣は吹っ飛んでいった。ホントなら1発で終わらせられるんだが、この場を血みどろにするわけにはいかな

いから加減した

蓮夜「とりあえず動きを封じて移動させるか。ジブリール！」

ジブリール「はい、マスター」

オレの声でオレと共にジブリールがロキと獣に一時封印の魔法をかける。ここで始末してもいいんだろうが一応ロキも北欧神、オーディンの意向を聞かないでやるのも問題なのでこの措置をとることにした

ロキと獣の背後に魔法陣が出現し、そこから出た鎖がロキ達の動きを封じ魔法陣に引きずり込んだ

ロキ「クツ！神崎 蓮夜!!!」

ロキはそう叫びながら封印された

サーゼクス「ありがとう蓮夜くん。助かったよ」

蓮夜「あれぐらいならここに誰でもできんだろ。それよりもこれからどうするんだ？」

サーゼクス「うむ。そのことについてこれから話し合う予定だ」

オレはそう聞いて話し合いが行われる部屋へ移動した

話し合いの結果、各国の魔王クラスの者が戦えばそれこそ戦争へと発展しかねない。そこでオーディンが「ミヨルニルを持つてくるまで足止め役を選出することで決まった。そこでその場に足止め役を買って出たのはリアスだった

サーゼクス「足止め役を買って出ると…？」

蓮夜「転送だけなら何人でもできるが、いいのか？」

アジユカ「厳しい戦いになるぞ？」

リアス「覚悟の上です」

リアスは不安ではあるが覚悟を決めた目をしていた

セラ「ウフツ、志願者はあなただけじゃないみたいね」

その声と共に開かれたドアに立っていたのはソーナだった。そう、リアスがくる少し前にソーナはセラに自分も足止め役を志願してきたのだった

リアス「ソーナ」

ソーナ「私達シトリー眷属より3名、志願いたします」

そこにはソーナ、椿先輩、匙の3人が立っていた

セラ「どうしてもって聞かなくて。まあ今回のことは私達の失態でもあるしリアスちゃんもこの子も魔王の身内だから納得できる人選とも言えるんだけど」

アザゼル「既に2人は決まってるんだ。人選に費やす時間はねえぞ？」

リアス「2人？ってことはまた蓮夜!?!」

蓮夜「またって何だよ。今回はオレは大人しくしてろ、ここにいる全員から言われちまった」

ミカエル「今回、こちらからは…」

リアス「イリナさん!」

ミカエル「彼女は戦力として申し分ありません」

リアス「お任せを」

ロセ「相手はアースガルドの神、私も参ります」

サーゼクス「オーデイン殿がミヨルニルを転送するまでの間、時間を稼いでくれ」

それを聞いたリアスとソーナは気合を入れた顔をして部屋から退出した

セラ「…蓮くん……」

蓮夜「わかってるよ。手は出さないが近くで見守ってればいいんだろ？」

サーゼクス「すまないな」

蓮夜「お前らが心配なんはよくわかってっからな。まあ死なせはしねえよ」

先ほどオレはやれないとは言ったがそれは戦闘に参加しないだけの話であって、近くで観察しないわけではない。いくら魔王の2人でも格上の相手に自分の妹達が挑むものに心配ないわけがない。だから危険と判断したらオレが介入することになった

外へ出てジブリールが張った魔法陣の上にアーシア、ギヤスパー以

外のグレモリー眷属とソーナ達3人、ロセとイリナが立ち転移していった。そのすぐ後で

蓮夜「んじやあオレも行きますか。霞と明日葉、あと黒歌、悪いんだが着いてきてくれ」

霞「あいよ」

明日葉「わかった」

黒歌「了解にゃん」

オレもその3人を連れて転移した

放課後のラグナロク 第35話

オレ達は戦場に着いた瞬間知覚妨害の魔法陣を形成しそこから戦闘を観察することにした

蓮夜「さて、リアス達はどこまで戦えるかな」

明日葉「そんなんわかりきってんじゃない。あのロセねえはともかく、他は確実に死ぬでしょ」

蓮夜「…霞、相変わらずお前の妹は容赦ねえな」ボソボソ

霞「そこが明日葉ちゃんのいいところだけだな」ボソボソ

明日葉「なんか言った？」

霞「な、なんでも…」

蓮夜「そうそう、ただ明日葉はいつ見ても可愛いって言うってただけだよ…」アハハ

明日葉「っ！／＼／＼」

明日葉は蒸気が出るんじゃないかってぐらい顔を真っ赤にした

黒歌「蓮夜、封印が解けるにや」

蓮夜「わかった。霞は一応射撃準備をしておいてくれ」

霞「へいへい」

黒歌の声と共にロキを抑えていた封印が解けた

—————

匙「敵は北欧の神か。修行明けからキツイぜ…だが、これも会長の夢を実現するためだ」

一誠「会長の？」

匙「冥界に下級悪魔でも通えるようなレーティングゲームの学校を作るのが会長の夢なんだ」

一誠「へえ、会長が…でも今回の件とどんな関係があるんだ？」

匙「下級悪魔の学校なんて言う悪魔もいるんだ」

一誠「悪魔は貴族社会だしな」

匙「だからさ他のの神話体系と和平を結べればさ」

一誠「なるほど。悪魔社会も変わるかもってことか」

匙「俺な、会長の学校で先生になるのが夢なんだ」

一誠「へえ、いい夢じゃねえか」

匙「会長と俺の夢を邪魔するやつはたとえ北欧の神様だろうと好きにさせるわけにはいかねえんだ！」

一誠「ああ、お互い頑張ろうぜ！」

一誠と匙はそこで硬く激励しあった

リアス「くるわよ」

リアスの言葉と共に封印の魔法陣は光り輝き、砕け散った

ロキ「神崎 蓮夜、小癩なマネを。しかし永遠の皇帝もこの程度か」

ロセ「ロキ様！主神に牙を向けるなど許されることではありません！しかるべき公正な場で意を唱えるべきです！」

ロキ「オーデインのお付きのヴァルキリー。優秀と聞いているが神の相手には程遠い」

ロセ「聞く耳持たずですか…」

ロキ「ふっ、しかしラグナロクの前座にしてはあまりに貧弱」

ロキはそう言っただけで先ほどの獣を再び呼び出した

グアアアア!!

ロセ「フェンリル！」

グアアアアア×2

ロキはフェンリルだけではなくその子である2匹も呼び出した

ロセ「フェンリルの子、ハティとスコール！」

キエエエエ!!

続いて今度はドラゴンを呼び出した

リアス「五大龍王の一角、ミドガルズオルムまで…」

イリナ「伝説の魔物達をあんなに…」

リアスが言った五大龍王の1匹であるミドガルズオルムは終末の大龍（スリーピング・ドラゴン）ともティアマツトやタンニーンに並ぶドラゴンである

ロセ「おそらく龍王を模造したものでしょうが…」

匙「取り囲まれちまった」

ロキが呼び出した魔獣達はリアス達を逃さないように取り囲む
リアス「怯んだら負けよ。とにかく今は、時間を稼ぐことだけ考え
ましょう」

一同『はい!』

ロキ「神を相手にしたことを後悔せよ!」

ロキの合図と共にリアス達に襲いかかる魔獣達

蓮夜「始まったな」

黒歌「これはちよつと厳しいにや」

霞「いやいや、ちよつとどころじゃないでしょ」

明日葉「…」

この戦闘はどうかやら気合いでどうこうできるものじゃないのが
ぐわかった。それぞれの修行の成果に期待するしかないな

そう思っていると各々その修行の成果を見せ始めた。祐斗、ゼノ
ヴィアの騎士組は前よりも剣の扱いが上手くなっている。2人で
フェンリルを相手できている。小猫も黒歌のおかげで仙術をおりま
ぜ上手く戦っている。そのおかげが一誠と協力しながらフェンリル
の子を1匹相手している。だが一誠はマジでこのままじゃ死ぬぞ。

霞「蓮夜、本当にあいつが赤龍帝なのか?下手したら死ぬよ?」

蓮夜「ああ事実だ。タンニーンの話じゃ禁手化の一步手前まできて
いるらしい」

黒歌「あれじゃあ白猫の足手まといにや!」

蓮夜「あいつも頑張つてはいるんだが、実際そうなんだよな」

それに問題はまだある。ミドガルズオルムに対するのはリアス、
ソーナ、そして朱乃だった。そこで朱乃が先制の攻撃を仕掛けるが、
それは今までと同じの雷のみであった。修行が成功したなら今頃そ
の雷は雷光に変わっているはずであるのに…まだ自分の気持ちを整
理できていないようだ

蓮夜「朱乃はまだダメか…」

明日葉「蓮にどういうこと？」

蓮夜「あいつホントは光も放てるはずなんだ。だが自分でそれを受け入れられないみたいでな」

明日葉「だからあの人から半分だけど墮天使の気配がするんだ」

蓮夜「そういうこった（今のままじゃ勝てねえぞ、朱乃）」

オレはどうか乗り越えてほしいと思いつつながら観察を続ける

戦闘では椿副会長がミドガルズオルムが先生の放った炎を鏡で跳ね返していた。あれ神器かな。便利そうな能力だねえ…そしてリアス、ソーナの攻撃も始まった

そして違う方を見てみると、ロセとイリナがフェンリルのもう一方の子どもの相手をしていた。よく見るとイリナには翼が生えている。どうやら転生天使となったみたいだな

しかし、オレの目には未だにどうすればいいかわからずモヤモヤした表情を浮かべている朱乃の姿が入っていた。そしてこの場で一番役に立っていないのを実感し、悔しい表情を浮かべている一誠も目にしていた

蓮夜「はあ…仕方ねえ」

オレはそう言つて結界を解き、大声で叫ぶ

蓮夜「おら朱乃!!お前いつまでウジウジ考えてるつもりだ!!!」

朱乃「っ!蓮夜くん…」

リアス「蓮夜!」

みんな一瞬オレの声に反応するがすぐに戦闘に気を戻した

蓮夜「いつまでその状態のままにする気だ!前にも言ったが、他の墮天使とお前は関係ねえって言ったろ!!お前はお前だ!だから自分自身を受け入れろ!心配すんな、どんな朱乃でもみんな受け入れてくれる!もちろん、オレもな!」

もうオレができることは何もねえ。これでダメだったら打つすべはねえ…オレがそう思っている中、朱乃が口を開く

朱乃「私は姫島ひめじま 朱璃しゆりと墮天使バラキエルの娘!そして!リアス・

グレモリーの女王、姫島 朱乃!」

片方の翼を悪魔の、もう一方に墮天使の翼を生やしそう宣言した朱

乃。受け入れたんだな…

朱乃「„雷光”よ！」

そう言い放った朱乃の右手には雷が、左手には墮天使の光の力が発動し、その2つが組み合わさり雷光となった。その力は一瞬でミドガルズオルムを痺れさせるほどだった

蓮夜「やればできんじゃない。さて次は…」

ロセとイリナは無事フェンリルの子の1匹を倒し、祐斗とゼノヴィアもフェンリルを抑えていた

蓮夜「一誠！お前はここにきて何も感じないのか!？」

一誠「うるせえ！悔しいに決まってるだろ!!」

蓮夜「なら今することはなんだ!?!一刻も早く禁手化に至ることだろ

!!

一誠「わかってんだよ！だけどどうしたらいいかわかんなんだよ

!!

蓮夜「ドライグからも聞いているはずだ。禁手化には劇的な変化が必要だと。自分にとつてそれは何かもう一度考えろ！」

一誠「劇的な…変化…はっ！」

何か思いついたらしいな。オレは座り直す

一誠「部長！おそらく禁手化するためには部長の力が必要です」

リアス「私でいいならどんなことでも力を貸すわ」

一誠「…おっぱいを突かせてください！」

……………はっ？

リアス「…わかったわ。それであなたの思いが成就できるのなら…あいつらマジで意味わかんねえ

明日葉「…キモっ」

蓮夜「あいつらマジでか」

黒歌「蓮夜も突きたいのかにや?♪」

黒歌は自分の胸を持ち上げて尋ねてくる

蓮夜「からかうのはやめろ」

黒歌「別にからかってないにや♪蓮夜がしたいならいつでもいいにや♪」

明日葉「ダメ！」

黒歌「にや！」

ふざけている黒歌を両手で勢いよく押した明日葉。その顔は赤くなっている

明日葉「蓮に何もそういうのはダメ！」

蓮夜「なんでオレが怒られるんだよ」

明日葉「だって…で、でも蓮にいが、その、どうしてもって…言うなら、私の…」ボソボソ

霞「明日葉ちゃん、お兄ちゃんそういうのはよくないと思うな」

明日葉が最後に何か言ってたけど、それは霞の声によって遮られた霞「そういうのはもう少し大人にな…グハツ!!」

明日葉「おにいマジでウザい！」

途中で話を止められた明日葉は霞をなんどもふんずける。戦闘見ろよ

明日葉「はっ！蓮に待って！」

蓮夜「うおっ！」

オレは勢いよくきた明日葉に目隠しをされた

蓮夜「何だ！どうした！」

明日葉「いいから！今は見ちゃダメ…」

蓮夜「…わかったよ」

そして目隠しをされてもその声は聞こえてしまった
リアス「…イヤん」

ドライブ『至った！本当に至りやがった！』

蓮夜「…マジで至りやがったのかよ」

一誠「赤龍帝(ウェルシュドラゴン)、禁手化(バランスブレイカー)！主人の乳を突いて参上だぜ！」

はあ、もう何も考えたくねえ…

しかし一誠はさきほどとは比べられない力を得た。フェンリルの子を殴り飛ばせるほどだ

ロキ「雑魚どもめが。なかなかやるではないか」

ロセ「ロキ様、どうかお考え直しを。今ならまだオーデイン様も…」
ロキ「勘違いも甚だしいな。私は貴様らの過ちを正しているのだ
ロセ「…やむを得ません！」

ロセがロキに口撃を仕掛ける。そっちに意識のいったロキになにやらロープのようなものが繋がった。ロキは解こうとするが全く解けない。そしてそのロープに黒い炎のようなものがまとわりつく

ロキ「これはヴリトラの邪怨か」

匙「ヴリトラの呪いはたとえ神でもそう簡単に払えるものじゃないぜ！」

ソーナ「向上心の強い悪魔は厄介ですよ？悪神ロキ」

その傍ららでは一誠がミカエルから譲り受けたアスカロンでもう1匹のフェンリルの子を一突きにしていた

一誠「ロキ！」

ロキ「じやかしい悪魔とドラゴンだ！」

ロキは自身の力を上げヴリトラの呪いを断ち切り

ロセ「ロキ様、なりません！そんなことをしてしまつては、冥界だけでなく全ての神話の体系が！」

ロキ「ラグナロクが早まるだけにすぎん。元よりそれが私の悲願なのだからな！」

ロキは頭上に巨大な魔法陣を形成し、嵐のような突風が引き荒れる。続いて氷が礫となり押し寄せてきた

霞「ここらが限界なんでない？」

蓮夜「…」

オレ達の眼の前では祐斗の頭に氷の礫が直撃し、フェンリルを抑えきれなくなつてしまった

ロキ「ラグナロクの前に我が子に食われるがいい。雑魚にふさわしい最後だ」

ロキは空へ魔法を放ち、それはレーザーとなり雨のように一気に降り注いだ

ババババ！！

大半の者は防御魔法が間に合い防げたが、祐斗とゼノヴィア、そし

て匙はもろにそれを受けてしまった

第36話

ロキの攻撃を受けてしまった祐斗、ゼノヴィア、匙の3人はソーナと椿先輩から何か液体のようなものをかけられてケガが回復した。あれがどんなケガでも一滴で治してしまうという、フエニツクスの涙か

さあて一度崩れかけた体制が戻り始めてる。ここからはどうなるかな…すると

ロセ「間に合いました！」

一誠「何だ!？」

そこへようやく例のブツが届いた

ロセ「ツール様の武器、どんな敵にも裁きの一撃を与える絶対の槌！」

ロキ「ミヨルニルだと!？」

ロセ「オーデイン様よりそこに赤龍帝がいるなら彼に任せよとのことです」

一誠「俺!？」

ロキ「オーデインめが!」

ロキはミヨルニルを何とかしようとして移動を試みるが、それは復活して匙によって阻まれた

匙「行かせねえよ!」

リアス「一誠」

一誠「はい、部長!」

一誠はミヨルニルめがけて飛んでいく

蓮夜「(あいつら周りが見えてねえな)…霞」

霞「あいよ」

パアアアアン!

オレの合図で霞が狙撃した。その狙いは一誠に噛み付こうとしたフエンリルだった

リアス「っ!蓮夜!」

蓮夜「詰めがあめえよ。さっさとやれ」

一誠「ありがとよ！行くぜロキイイイ!!」

一誠はミヨルニルを手にしロキめがけて振りかぶった。しかしその瞬間、ミヨルニルが消えてしまった…

一同『っ!』

ロキ「ふふふ、ははははは！やはりとっておきは最後まで取っておくべきだな！」

ロキの手にはなにやら円形の道具があった

ロセ「あれは！強制転移装置！なぜあなたが!!」

ロキ「そんなことはどうでもいい。間も無くラグナロクが始まる終焉の黄昏に殉ずるがいい」

ロキの言葉で空間が歪み始めた

蓮夜「限界だな。なあロセ」

ロセ「…はい。残念ながらミヨルニルがなければもう…」

蓮夜「…みんな、よく頑張った！悪神相手にここまでできれば十分だ。あとはオレ達に任せろ」

オレは立ち上がりそう叫ぶ

蓮夜「3人はフェンリルを頼む」

霞「あいよ」

明日葉「ん」

黒歌「わかったにや」

フェンリルを3人に任せ、オレはロキと相對した

ロキ「永遠の皇帝、貴様も邪魔を」

蓮夜「ああ、他の神話の方々に迷惑だからな」

ロキ「ふん！なら止めてみよ！」

ロキはさつきよりも断然強い魔力の一撃を放ってきた。しかしオレはそれをワンパンで蹴散らした

蓮夜「こんなもんか」

ロキ「クッ！」

蓮夜「さつきと終わらせるか。我、神崎 蓮夜が汝の枷を解き放つ。

来やがれ！7番目の眷獸、夜摩の黒劍（キファ・アーテル）！」

オレの提唱で出現したのは三鉈の形をした巨大な劍だ

ロキ「〃意思を持つ武器」（インテリジエンスウエポン）！裁きの剣だ?!?バカな！」

蓮夜「バカにすんなよ。そいつキレんぞ」

そう言っているときには夜摩の黒剣はロキの頭上へ移動していた

蓮夜「あくあ。はあ、ご愁傷様…」

オレは手を合わせ合掌をする。そして夜摩の黒剣はロキめがけて落下していった。それも能力である重力を一杯にかけて

ロキ「お、おのれええええ!!!」

ロキは跡形もなく消滅した

蓮夜「お前は相変わらず喧嘩っ早いな。誰に似たんだか…」

オレは消える前の夜摩の黒剣に言っておいた

フェンリルの方も黒歌が出した鎖で動けなくなっているようだ

蓮夜「3人ともお疲れ」

そうは言ったものの3人に疲れの表情は全くない。リアス達の方を見てみるとみんなは驚きすぎて言葉も出ないような表情をしている

蓮夜「どうしたみんな」

一誠「どうしたじゃねえよ！オレ達がフェンリルの子供を倒すのにだってめっちゃくちや苦戦したのに、そのフェンリルをたった3人で軽々とだぞ?!」

匙「そうだ！どんだけ強い人たちだよ!?!」

みんなも一誠と匙の言葉に頷いている

黒歌「ところで蓮夜。こいつどうするにゃ?」

蓮夜「そうだな。なんかそこにこいつ欲しそうに見てる奴がいるんだけど」

オレが指差す方には

「やはりバレていましたか。私はヴァーリチームのアーサーと申します」

蓮夜「じゃあこいつ欲しがってるのはヴァーリってことか」

一誠「ヴァーリ!」

アーサー「その通りです。つきましてはそのフェンリルをお譲りい

ただきたいのですが」

霞「いやいや、なに言っちゃってんの？」

蓮夜「すまないが敵に塩送る趣味はないんだ」

アーサー「そうですか。残念です。では…」

アーサーは転移していった

明日葉「それで蓮にい。ホントにどうするの？」

蓮夜「うくん…ペットにでもするか。ユウキ達も喜ぶだろ」

明日葉「そう」

蓮夜「いいか？ロセ、リアス、ソーナ」

ロセ「え、は、はい。オーデイン様には私から報告しておきます」

リアス「私も構わないわ」

ソーナ「私も異論ありません」

蓮夜「なら黒歌、よろしく」

黒歌「わかったにや♪」

黒歌はフェンリルに近づき目を見て妖術でフェンリルに催眠をかける。それが終わって鎖を解くとオレに懐いてきた

蓮夜「さすがだな」

黒歌「当たり前にや♪」

そしてオレ達はグレモリー邸へ帰還した

帰ってきたオレ達はとりあえず休んでくれ言われて各々が自分の部屋に戻った。しかしオレだけは事後報告として集まりに参加しなければいけなかった

オーデイン「今回は、いや、今回もじゃが…本当に蓮夜がいてくれて助かった。まさかロキの奴がそんな隠し球を持っていたとは…」

ミカエル「しかしロキ殿はそちらの重要な神。よろしかったのでしようか…」

オーデイン「時代は変わらなければならん」

悪神でも神は神、やはり北歐的には痛手なのだろうか

アザゼル「しかし、ようやく赤龍帝が禁手化に至ったか」

蓮夜「ああ。今までとは段違いに強くなったと思う」

アザゼル「だがヴァーリと戦うにはまだまだ足りんな」

蓮夜「そうだな。あいつとやるならまだ修行が必要だ」

「いくら禁手化を成功したと言っても、その扱いや持続時間はヴァーリには遥かに劣る。そこは一誠次第だな」

蓮夜「そうだサーゼクス、1つオレから提案なんだが」

サーゼクス「何だね？」

蓮夜「オレは悪魔だ。だがどちらかと言えば人間の方に近い。だからオレはオレ達だけの『新しい勢力を作ろうと思う』」

一同『っ！』

サーゼクス「…確かに君と君の眷属達だけで我々三勢力を圧倒するだけの力があるが」

蓮夜「だからだ。オレが悪魔側にいるだけで三勢力が同等にならないと言う輩もいるそうさ。だったらオレが中立の立場に立てばいい。悪魔、墮天使、天使の全てと手を組む中立としてな。そう思ったんだ」

オーデイン「ふむ、良い考えかもしれんな」

蓮夜「メリットは他にもある。オレには多くはないが日本神話の方々と交流がある。もしオレが独立したとなればその人達とも同盟が組める。ヴァーリ達の禍の団がどんな戦力を有しているかわからない以上、戦力は多く且つ幅広い方がいいと考えるが…どうだ？」

アザゼル「オレは賛成だぜ？その方が蓮夜も動きやすいだろ」

蓮夜「面倒ごとを押し付けやすいの間違いじゃないのか？」

アザゼル「そ、そんなわけないだろ…」

アザゼルは明らかに凶星の顔をする

ミカエル「私も異論ありません」

サーゼクス「…わかった。いいだろう」

蓮夜「ありがてえ。ついでにで悪いんだがそれぞれのところこの情報を公開しといてくれ」

オレはそう言って部屋を出た

―屋敷―

オレは自分の屋敷に戻り全員を広間に集め、さつき決めたことの情報話を話した

蓮夜「…というわけだ。タツマキ達には前々から話してたから大丈夫として、他の奴らがこれからどうするか聞きたくて集まってもらった。別に今すぐ結論を出す必要はない。オレ達が帰るまでに言ってくればいい。では解散！」

その場では答えは聞かず、とりあえず今日のところは解散にした。そしてオレは行かなければいけないところがあったので雪菜や深雪に言って屋敷を出た

―天界―

オレはミカエルが帰るのを機に天界へ顔を出すことになっていた

天界に到着してミカエル達天界の偉い奴らがいるという宮殿に案内された。宮殿の中に入ると

「蓮夜様〜!!」

蓮夜「うおっ！」

長い廊下の奥からもの凄いスピードでこっちにきた1人の天使にそのスピードのまま抱きつかれたので危うく倒れるところだった

「もう、会いに来るの遅すぎですよ!!」

蓮夜「わ、悪かったな。久しぶりだな、ガブリエル」

ガブリエル「はい！お待ちしておりました!!」

蓮夜「このままじゃ歩けないからとりあえず離れてくれ」

ガブリエル「はっ！し、失礼しました！では参りましょう♪」

そう言っただけで離れてはくれたのだが今度は右腕をガツチリホールドされてしまった

彼女の名は熾天使ガブリエル。天界でミカエルを含む四大天使の

中の1人である。前に天界が危機に見舞われたときに危うく命を落としていたところからオレが救ったところからこういう風になってしまった。よく墮天しないよな…

とある部屋に案内され、そこには残りの四大天使のラファエルとウリエルの姿もあつた

ラファエル「蓮くんお久ー」

ウリエル「こらラファエル！大恩人の蓮夜様になんて無礼を！申し訳ありません！」

蓮夜「大丈夫だから。大恩人とかもやめろ。もうすぎたことだ」

ラファエル「そうだよ。ウリちゃん堅いんだよ」

ウリエル「お前はもつとシヤキツとせい！」

いつものほほんとしているラファエルと自分にも他人にも厳しいウリエルじゃあこうもなりますね

ミカエル「皆さん早く席についてください」

ラファエルとウリエルの口論をミカエルが止める

ミカエル「今日は皆さんに大事な話があります。それは蓮夜くんを筆頭に、新たな勢力が作られました」

ガブリエル「そうなんですか!?では、私もそちらに…」

蓮夜「待て待て！四大天使の1人が抜けるのはマズいだろ！」

ガブリエル「それなら私は早急に墮天します！」

蓮夜「落ち着け！」
ベシツ！

ガブリエル「ひゃん！」

オレはなんともおバカなことを言い出したガブリエルをチョップして止めた

ミカエル「今あなたにいなくなられるのは困るのですが」

ガブリエル「でも！」

目元に涙を浮かべて懇願するガブリエル

蓮夜「はあ…」

ラファエル「蓮くん蓮くん。じゃあこう言ってみ」

蓮「ん？」

時間自分の部屋に閉じこもったらしい…

第37話

―人間界―

天界を出たオレは今度は人間界に一度戻り、日本神話のみなさんに会いに出かけた。これからもしかしたら手を貸してもらおう機会が訪れるかもしれないので話し合いに行くのだ

オレは手土産を持って京都の山奥に入っていた。そして数分歩いたところで人払いの結界が張ってある場所に行き着いた。そこには既にお迎えが来ていた

「蓮夜兄様〜!」

蓮夜「おおサクヤ。久しぶりだな」

サクヤ「はい!サクヤはずっと待っていました!」

蓮夜「ありがとな」ナデナデ

サクヤ「えへへ♪」

サクヤは本名木花咲耶姫(コノハナサクヤヒメ)と言い繁栄の神とも言われているがまだ子供っぽく甘え上手である

「こらサクヤ。もう少し大人しくなさい」

「まあまあ、サクヤも蓮夜さんに会えて嬉しいのですよ」

蓮夜「久しぶり、ウズメ、クシナダ」

クシナダ「はい、お久しぶりございます」

ウズメ「本当にこちらにいらっしやるのは何年振りですかね」

蓮夜「アハハハ…」

ウズメは本名天鈿女命(アメノウズメノミコト)と言い芸能の女神である。クシナダは本名奇稲田姫(クシナダヒメ)と言い農業、特に稲作を司る神と言われている

ウズメは嫌味つたらしくオレを所謂ジト目で睨んできた

クシナダ「ウズメさんもそこまでで…蓮夜さん、中で皆様がお待ちです。特にアマテラス様が…」

蓮夜「ああ、なんかすまないな」

サクヤ「蓮夜兄様はサクヤと手を繋いでれば中に入れるよ♪」

蓮夜「そうか。なら頼む」

サクヤ「はい♪」

それでオレはサクヤと手を繋ぎ中に案内された。その後からウズメとクシナダが続いた。なぜか冷たい視線を感じる気をするのは気のせいかな…？

中には大きな神社があり、普通なら悪魔は入れないんだが今はサクヤ達のおかげで入れる。もしここに単独で入ろうとすればこの結界を壊さないといけないが、そうなることは一生ないだろう

大広間へ案内されオレは中に入りクシナダ達は中に入ったのを確認すると襖を閉めた。そこには2人の男性と2人の女性が座っていた。オレはその4人の前に正座し挨拶をする

蓮夜「この度は突然の来訪を快諾していただき、ありがとうございます
ます」

「いやいや、私達と君の仲じゃないか」

「そうですよ。友達の家に遊びに来る感覚でいらっしやって構わない
のですよ」

蓮夜「お、お言葉ありがとうございます…さすがにそれは…んっ！

改めて、おひさしぶりです。イザナギさん、イザナミさん」

イザナギ「ああ」

イザナミ「お久しぶり」

向かって右側に座っているのが伊奘諾（イザナギ）さん。向かって左側に座っているのが伊邪那美（イザナミ）さんだ。このお二人が国生みと神生みを行なったおかげで今の日本がある

「…」ソワソワ

そしてオレの右側でソワソワしている女性が目に入った

蓮夜「えっと、来て早々申し訳ないのですが少々粗相を許してもら
いたいのですか…？」

イザナミ「さつきも言ったでしょう？…ここでは何の遠慮もいりませ
んよ」

イザナギ「イザナミの言う通りだ」

蓮夜「ありがとうございます。じゃあ…」

オレは右側を向いて手を広げる

蓮夜「ほら、おいで」

「れ、蓮夜ー!!」

女性はオレの言葉を聞いてオレに飛び込んできた

蓮夜「しばらく顔を出せなくてすまなかったな、アマテラス」ヨシヨシ

アマテラス「本当だよ!すつごく寂しかったんだから!」

オレに抱きついてきたアマテラスは本名天照大神(アマテラスオオミカミ)と言い太陽神であり、太陽、光、慈愛、真実、秩序を象徴する

蓮夜「スサノオも久しぶり」

スサノオ「ふん!」

オレはアマテラスの頭を撫でながら顔だけ振り向いて残りの座っていた男性に言った

彼はスサノオ。本名は須佐之男命(スサノオノミコト)と言い海を支配する海の神だ

蓮夜「なんか怒ってる?」

スサノオ「当たり前だ!アマテラスやツクヨミがどれだけ面倒だったかお前にはわかるまい!」

蓮夜「ああ、そのなんだ…すまんかったな」

スサノオ「ふん!悪いと思ってるなら後で少し鍛錬に付き合え」

蓮夜「わかった。そう言えばそのツクヨミはどうしたんだ?」

スサノオ「お前が全然来ないから部屋に閉じこもっておるわ」

蓮夜「あちやゝ」

ツクヨミは本名月夜見尊(ツクヨミノミコト)と言い月の神だ。オレがここに来た当初は全く喋ろうとしない、とても静かな子だったからな

イザナギ「本当はすぐに話し合いをしたいのだが、そこにはツクヨミもいてもらわなくては困るのだな」

イザナミ「申し訳ないんだけどツクヨミのどこへ行ってあげて」
蓮夜「わかりました」

お二人のお願いじゃ聞かないわけにもいかないな。と言ってもお願いされなくても言ってたけどね。でもその前に

蓮夜「あの、そろそろ離してくれないかな…」

アマテラス「いや！」

アマテラスは断固として離してくれない

蓮夜「すぐ戻ってくるから」

アマテラス「いや！」

蓮夜「…じゃあ1つだけしてほしいことやってやる。どうだ？」

アマテラス「っ！なんでも？」

蓮夜「オレのできる範囲なら…」

アマテラス「…わかった」

アマテラスはようやく離してくれた

オレはイザナギさんとイザナミさんに「失礼します」と言って退出し、スサノオに案内されツクヨミがいる部屋の前に立った。襖を開けると中は真っ暗で部屋の隅っこで膝を抱えて蹲っている少女が目に入った

蓮夜「スサノオは戻っててくれ」

スサノオ「わかった」

オレは1人で中に入り、その少女の前に膝をついた

蓮夜「ツクヨミ」

オレが名前を呼ぶと少女はゆっくりと顔を上げた

「にい…さま…う？」

蓮夜「ああ、来るのが遅くなってすまない」

オレがそう言い終えるとギョツとオレに抱きついてきた

ツクヨミ「兄様！兄様！」

蓮夜「おう！オレだよ」

オレはオレの首に手を回してワンワン泣き始めたツクヨミを優しく抱きしめ背中をさする

―数分後―

ツクヨミが落ち着いた後ころで体を離してツクヨミの顔を見る

ツクヨミ「申し訳ありません。見苦しいお姿を…」

蓮夜「気にするな。会いに来なかつたオレが悪い」

ツクヨミ「そんな！兄様がお忙しいのはわかつていました。勝手に期待した私の落ち度です」

蓮夜「それでもだ。オレがお前を泣かしてしまった。ホントにすまない」

オレは頭を下げる

ツクヨミ「頭を上げてください！こうして会いに来てくださつただけで私は嬉しいですので…／／／」

蓮夜「ありがとう」

ツクヨミ「ー！／／／」

オレは頭を上げて笑顔でお礼を言うとツクヨミは部屋の暗さでもわかるくらい赤面した

蓮夜「さて急で悪いんだが少し話したいことがあつてな。みんなのここに行けるか？」

ツクヨミ「はっ！はい！」

オレは「よし」と言つて部屋を出ようとするとツクヨミが手を握つてきた

ツクヨミ「…ダメ、ですか…？／／／」

蓮夜「まさか」

オレはその手を握り返しさっきの大広間へ向かつた

蓮夜「戻りました」

アマテラス「あー！」

大広間へ戻つた瞬間アマテラスが発狂した。うるさい

イザナギ「おお、戻つたか」

イザナミ「あらあらツクヨミちゃん」

ツクヨミ「く／／／」

ツクヨミは恥ずかしいのかオレに隠れてしまった

イザナギ「では全員揃ったことだし、始めようか」

蓮夜「あ、ウズメ達も呼んでもらっていいですか？できればみんなに聞いてほしいので…」

イザナミ「わかりんました」

それから1分もしないうちにウズメ、クシナダ、サクヤも部屋へ来て、オレは今までの出来事とこれからのオレのありようについて説明した

イザナミ「そう、そんなことが…」

蓮夜「禍の団が今後どういう行動を取るかわからないので、日本神話の方々は是非同盟を結んでほしいのです。別に3勢力と結ばなくてもいいです。オレとだけでも交友的でいていただけたら幸いです」

イザナギさんを見ると腕を組み目を瞑って考えていた。そしてその状態のまま口を開いた

イザナギ「蓮夜くん。我々日本神話は他の三勢力とはわからんが、少なくとも君とは敵対する意思はない。こちらとしても君とは友好的でありたいと思う」

イザナギの言葉に部屋の中にいるみんなが頷く

蓮夜「ありがとうございます！」

オレはこのとき何が何でもこの人達が守る「日本」を必ず守ると決意した

イザナギ「さあ！難しい話はこのままで。せつかく蓮夜くんが来たのだ。今日は大いに盛り上がるのではないか！みな！宴の準備だ！」

一同『はっ！』

イザナギさんの声と共に慌ただしく宴の準備が始まった。オレも何か手伝おうとしたんだがアマテラスやウズメから「大人しくしてて！」と一喝されてしまったので、準備ができるまでサクヤと遊んでいた

宴は盛大に開かれ食事はとても豪華なものだった。余興ではウズメが舞を踊ったり、スサノオが剣舞をやっている中にオレが乱入した

りと楽しく過ごせた。悪酔いしたイザナギさんにすごい絡まれて大変だったがとてもすごいい時間だった

宴会が終わり酔いつぶれてしまったイザナギさんを自室へ運び、オレは帰ろうとしたんだがもう遅いからって今日は泊まることになってしまった

蓮夜「何から何まですみません」

イザナミ「いいのよ。今日はあなたのおかげでとても楽しめたもの」

蓮夜「ありがとうございます」

サクヤ「兄様！今日はサクヤと一緒に寝ましょう！」

ツクヨミ「ダメ！蓮夜兄様は私と寝るの」

2人はそう言いながらオレの両腕を引つ張り合う

イザナミ「あらあら」

ウズメ「はあ…」

クシナダ「…」

アマテラス「…」プルプル

オレらのやり取りをイザナミさんは嬉しそうに笑顔で、ウズメは手で顔を覆いたため息をついている。クシナダは無言で睨んでくるし、アマテラスはなんかプルプルと震えている

アマテラス「ダメ！」

唐突にアマテラスが叫んだ

蓮夜「ど、どうした…?」

アマテラス「蓮夜は今日私と寝るの！」

蓮夜「えっ、いや…オレは1人で…」

アマテラス「蓮夜さつき約束したよね?なんでも1つだけ言うこと

聞くって！」

蓮夜「あ、ああ…」

アマテラス「だから私と寝るの！」

蓮夜「…わかったよ」

オレはそんなことに使っていないのかと内心思いながらもそのお願いを受け入れた。だが…

ツクヨミ「兄様！アマテラスだけズルい！」

サクヤ「そうですね！お姉様にだけなんてあんまりです！」

クシナダ「鼻真はよくありませんよね…？」

3人がどんどんオレに迫ってくる

蓮夜「…わかった。お前らの言うことも1つだけ聞こう」

そう言った瞬間さつきまでとは別人のように満面の笑みを浮かべる3人

ツクヨミ「じゃあ明日の朝、一緒にお散歩してください…／／／」

蓮夜「そんなことでもいいのか？」

ツクヨミ「はい／／／」

蓮夜「なら喜んで」

サクヤ「じゃあ兄様。これからサクヤと一緒に風呂に入りますよ
う♪」

蓮夜「ブフツ！サ、サクヤ!？」

ウズメ「サクヤ！あなた何言って…！」

サクヤ「ダメ、ですか…？」ウルウル

蓮夜「うっ！」

ウズメが怒鳴ったと同時にサクヤはオレに抱きついて上目遣いに再度お願いしてきた

蓮夜「…わ、わかった」

サクヤ「やったー！じゃあ早く行きましょう♪」

蓮夜「その前に、クシナダはどうするんだ？」

クシナダ「私は今後のために取っておくことにします♪忘れないで
くださいね♪」ウフフ

その笑顔にオレは今後そんなお願いをされるんだろうと少し不安
になった

その後オレは約束通りサクヤと風呂に入り、アマテラスと一緒に寝
て、次の日の朝に近くをツクヨミと散歩した。アマテラスは寝ている
間ずっとオレの腕を掴んでいたのか起きたとき腕が痺れていた。そ
してお昼少し前にオレはお暇することにした

蓮夜「大変お世話になりました」

イザナギ「いやいや、こちらも有意義な時間を過ごせたよ」
イザナミ「またいらしてね」

蓮夜「はい、ぜひ」

サクヤ「蓮夜兄様帰っちゃうの…?」

蓮夜「ごめん。また来るからな」

ウズメ「蓮夜様も忙しいのだ」

クシナダ「またすぐ会えますよ。ね?」

蓮夜「そ、そうだな」

クシナダはまたすぐ来るよね?とでも言いたそうな顔をしながら
オレの方を見てきた

アマテラス「またすぐ来るのよ!」

ツクヨミ「お待ちしています」

蓮夜「ああ。約束する」

オレは最後にみんなに「じゃ」と言っ山を下った。次はいつ来れ
るかな…

第38話

―屋敷―

オレは人間界から帰ってきて帰省の終わりが翌日となった。そこでみんなこれからのことを聞くため広間に集まってもらった。そこにはオレがいなかったときにこつちに合流したという達也や深雪達の友達である光井みつゐ、ほのかや北山きたやま、雫しずく、柴田しばた、美月みづきや吉田よしだ、幹比古みきひこも来ていた

オレは前に出る。それに続いて前に出たのはオレの眷属のみんなだった。そしていつものみんなからは全く違う雰囲気で片膝をつきその膝に同じ方の腕を乗せ頭を下げた。そしてタツマキが代表して宣言するように言い始める

タツマキ「我々は汝、神崎 蓮夜様の眷属としていついかなるときもお側に仕える次第です。故にこれから先も我々は王のお側に…」

その言葉と共にみんなは頭を下げる

蓮夜「ああ。これからもよろしく頼む」

オレはその行為に感謝を込めてそう言った。それを聞いたみんなは下がっていき、次に精霊の尻尾のメンバー全員が前に出た。タツマキ達とは違いみんなは立ったままである。代表してエルザが口を開いた

エルザ「私達精霊の尻尾は神崎 蓮夜の勢力に属そうと思う。しかしそれにはいくつか条件がある。一つ、表面上は属していても精霊の尻尾という組織として動かさせてもらう。二つ、我々も手を貸す代わりにそちらもこちらの要請があったときは手をかしてもらおう。以上の2つを守ってくれるなら我々はお前の勢力に加担しよう」

蓮夜「条件のことは理解した。せっかくだからみんなにも聞いてもらいたい。オレの勢力に入ったからといってオレはみんなに制限をかけるつもりはない。よって今まで通りの生活をしてくれて構わない。簡単に言えば自由にしてくれ。そしてオレはオレに味方してくれるやつのは何が何でも守ると決めている！だからオレにできることなら何でも言ってくれ。最優先で手を貸す！エルザはこれで

いいか？」

エルザ「ああ。最初から心配などしてはいなかったが、改めて聞いて確信した。お前にはそれだけの価値がある」

エルザは一度精霊の尻尾のメンバーの顔を見て再度オレに向き直る

エルザ「改めて宣言しよう！我々精霊の尻尾は今日をもつて神崎

蓮夜の勢力に加入する！」

蓮夜「ありがとう。感謝する」

オレは精霊の尻尾のメンバー1人1人の顔を見渡してそう告げる
それと入れ替わりに出てきたのはナイトレイドのみんなだった

ナジエンダ「ナイトレイドは神崎 蓮夜の勢力に属すこととする」

蓮夜「いいのか？」

ナジエンダ「ああ。私達のほとんどは君に命を助けられた者だ。何でも言ってくれ」

蓮夜「ありがとう。助かる」

そして次に前に出て来たのは蓮太郎や呪われた子供達だ

延珠「蓮夜！妾達も蓮夜の勢力とやらに入ることにしたぞ！」

蓮夜「それはありがたいんだが、ホントにいいのか？蓮太郎」

蓮太郎「ああ。ここにいる全員あんたに恩がある」

木更「里見くんの言う通りよ」

玉樹や彰磨さんはその言葉に頷く

蓮夜「わかった。ありがとう」

オレはみんなの決意の目を見てそう言った

今度はレオやエリカ達、魔法科高校生組だ

エリカ「私達は別に勢力に入ることはないんじゃないかって結論になつたわ」

蓮夜「そうか」

レオ「だけどな、俺らはもう蓮夜や達也とは友達だ。だから何かあつたら呼んでくれ！すぐ行くからよ！」

レオの言葉に他のみんなも力強く頷く

蓮夜「ありがとう。そのときは頼らせてもらうよ」

そう言つて元の場所に戻ろうとするが、「あつ」という何か思い出したかの声をあげた雫が振り返る

雫「そうだ蓮夜さん、七草先輩から伝言。『なんで私には連絡がなかったの？今度その辺のことも含めて家にいらしてね』だって…」

蓮夜「げっ！忘れてた…」

雫が言つた七草先輩とはレオ達の通っている高校の2個上の先輩で、名前を七草^{さえぐさ}真由美^{まゆみ}。家が代々の名家でいわゆるお嬢様である

蓮夜「（結構怒つてんだろうな…ん？ということは香澄と泉美も！はあ…）」

オレがそんなことを考えていると既に前には紗矢華達がいた

紗矢華「ちよつと神崎 蓮夜！聞きなさいよ！」

蓮夜「あ、わりー」

紗矢華「つたく…高神^{たかがみのもり}の杜から正式な通達があつたわ。高神の舞威媛である私、煌坂紗矢華は神崎 蓮夜の勢力に加わるわ」

蓮夜「わかつた」

紗矢華「か、勘違いしないでよね！私が入るのは雪菜のためなんだから！」

蓮夜「わかつてるよ」

紗矢華はなぜか顔を真っ赤にして雪菜のためと強調して言った

ラフオリア「紗矢華、ここにきてまで照れ隠ししなくてもいいじゃないませんか」

紗矢華「で、殿下！」

ラフオリア「神崎 蓮夜、私にはアルデギア王国の王女ですのであなたの勢力に加わることはできません。ですがアルデギア王国は全面的にあなたに協力させてもらいます」

蓮夜「おじさんやおばさんは納得してるのか？」

夏音「お願いしたら大丈夫でした」

蓮夜「ああ」

オレは夏音がお願いしたら断れないな

ラフオリア「だからこれからもよろしくお願いしますね、神崎 蓮夜」

夏音「お願いします、お兄さん」

蓮夜「おう。おじさん、おばさんにもお礼を言つといてくれ」

那月「まったく…」

那月「私は腰に手を当てながらため息をついた」

蓮夜「那月ちゃんはどうする？」

那月「私をちゃん付けで呼ぶな。私は今まで通りだ。お前の勢力とやらには入らん」

蓮夜「そうか、わかった」

那月「アスタルテはこれまでと同じようにここでメイドをやらせる。本人の希望だ」

アスタルテ「…」

蓮夜「了解だ。またよろしくな、アスタルテ」

アスタルテ「Accept」

アスタルテは変わらぬ表情で『承認』と言う

その後にはヒメ達が出てきた

ヒメ「私は蓮夜と一緒にいるよー！」

ほたる「私はヒメに従う」

蓮夜「お、おう…」

ヒメの要点をすっ飛ばした発言とほたるの睨みにオレはどう言っているかわからなくなってしまった

明日葉「おヒメちゃん要点抜かしすぎ。ウケる」

壱哉「ここにはまともに話せるやつはいないのか」

霞「ならあんたが言えればいいじゃん」

こいつらは…

蓮夜「お前らはオレ達のところにくるってことでいいんだな…？」

ヒメ「うん！」

ほたる「不本意だが」

明日葉「うん…」

壱哉「オレに命令はするなよ？」

霞「おう」

蓮夜「わかった」

また壺哉と霞がケンカしそうだったからオレから聞いてしまった
そしてみんなの意向を聞いたところで解散し、帰省最後のパーティ
を盛大に行った

―次の日―

明日から学校が始まるためオレは今日眷属のみんなと帰る。屋敷
はオレがいない間精霊の尻尾の本拠地として使うことになった。オ
レ達より先に蓮太郎達やエリカ達、ラフオリア達やヒメ達を見送つて
から人間界の自宅に転移した

家に着くとそこには朱乃と小猫が帰っていた

朱乃「あらあら、お帰りなさい」

蓮夜「おう、もう帰つてたのか。小猫も」

小猫「はい」

オレはとりあえずみんなに荷物を置きに行かせオレ自身は朱乃と
夕飯の支度を始めた

朱乃「明日から学校ですけど、蓮夜くんは宿題は大丈夫ですか？」

蓮夜「ああ。帰省前に全部終わらせといたからな」

朱乃「さすがですわね。一誠くんやゼノヴィアちゃんはまだまだそ
うですよ」

蓮夜「だろうな。こつちもユウキとクロメが昨日まで終わってなく
てな。雪菜の鬼監視のもとやってみたいだ」

朱乃「あらあら。目に浮かびますわね」

実際何度も助けを呼ぶ声は聞こえていたが、甘やかすなど雪菜に念
を押されていた。そういうのに厳しい雪菜は本物の鬼のように見え
たとユウキとクロメは言っていたな

蓮夜「朱乃はバラキエルと仲直りできたのか？」

朱乃「蓮夜くんのおかげで完全ではないですが距離は縮まったと思
います」

蓮夜「ならよかった」

合宿後も一向にバラキエルを父とは認めなかった朱乃も踏ん切り

がついたようだな

その後夕飯を食べ各々明日の準備をしてから床についた

―翌日―

朝になりオレは重い瞼を開けるとオレに抱きつく何かに気がつく。オレはまたユウキでも乗り込んできたのかと思っただけの疑いもなく布団をめくった

蓮夜「……へ？」

紗矢華「……すう……すう……」

そこにはオレの予想に反してなぜか紗矢華がパジャマ姿で眠っていた。オレは驚きで一瞬思考が停止してしまった

紗矢華「……ん、んん……はっ！」

紗矢華は目を覚まし瞬時に今の状況を理解したのか、勢いよく起き上がった

紗矢華「ち、違うのよ！神崎 蓮夜！私はその……たまたま、そう！たまたまよ！」

蓮夜「たまたまオレのベッドで寝れる状況が知りたいよ」

紗矢華「そ、それは……」

「何してるんですか……？」

蓮夜、紗矢華「っ！」

いきなりドスの聞いた声がドアの方からしたのでその方を見てみると、そこには雪菜がハイライトの消えた目をして立っていた

蓮夜「雪菜！」

紗矢華「違うの雪菜！これは誤解で！」

雪菜「そうですか……ではなぜ紗矢華さんが蓮夜さんのベッドにいますか……？」

紗矢華「それは……」

この状況はヤバいな。なぜかわかんないが雪菜はめちやくちやキレてる……なんとかせねば……

蓮夜「ゆ、雪菜…？」

雪菜「はい、なんででしょうか…？蓮夜さん…」

蓮夜「今日の放課後買い物に付き合っただけ…放課後は何か予定があるか…？」

雪菜「えっ？いえ、今日は委員会もないですし…」

雪菜の目にだんだんとハイライトが戻ってきた

蓮夜「なら一緒に来てほしいんだけど、お願いできるか…？」

雪菜「それはつまり…放課後デート、ですか…？」

蓮夜「えっ…あ、ああ…そういうことに、なるかな…」

雪菜「そう、ですか…わかりました。お伴します」

蓮夜「助かる…」

雪菜にハイライトが戻り満面の笑みを浮かべ部屋を出て行った

蓮夜、紗矢華「はあ〜〜〜」

オレと紗矢華は2人揃って緊張の糸が切れて上がっていた肩を下ろした

蓮夜「し、死ぬかと思った」

紗矢華「雪菜、相変わらず怒らすとヤバいわね」

蓮夜「で？どうしてここに？」

紗矢華「今日から私もここに住むのよ。それにあなたの高校のあなたのクラスに転入するわ」

蓮夜「なんで昨日のうちに言わねえんだよ」

紗矢華「言おうとしたわよ！でもあなたもう寝てたんだもの」

蓮夜「はあ…とりあえず着替えるから外に出ててくれ」

紗矢華「ーっ／／わ、わかったわよ…」

紗矢華が出たのを確認してオレは制服に着替えた。その後の朝食の場で紗矢華が新たにここに住み、オレ達の学校に通うことになったのをみんなに話した

ー学校ー

学校では既にオレのクラスに転校生が来ることは噂になっていた。

朝のホームルームの時間になりその転校生が入ってきた。しかも
2人〃

「紫藤 イリナです。皆さん、よろしく願いします」

一誠「イリナ！」

紗矢華「煌坂紗矢華よ。よろしくの前に1つ言っておくわ。私は
男〃が大嫌いな。だからその神崎 蓮夜以外の男子は近づかな
いでちょうだい」

もう1人の転校生はイリナだった。それに紗矢華はもう少しまと
もな挨拶をしろよ。達也と十六夜はどうなんだ…

松田「おお！桐生の情報は！」

元浜「確かだったか！」

イリナ「あ、一誠くん。同じクラス？」

松田「一誠貴様！あの子と知り合いなのか!？」

イリナ「兵藤 一誠くんは私の幼馴染なんでくす♪」

イリナはウインクをしながらそう発言した

元浜「それに蓮夜！お前はもしま、もう1人の子と付き合ってるの
か!？」

紗矢華「はあ!？」

元浜の言葉に紗矢華が反応する。しかし問題はそこではない。今
の元浜の発言でクラス内の雰囲気ガラリと変わった。その原因は
…深雪とカナリアだ…

深雪「蓮夜さん…そうなんですか…?？」

カナリア「今の話は本当なのかな…蓮ちゃん…?？」

深雪とカナリアが笑顔なんだが目が笑っていない状態でこつちに
近づいてくる

蓮夜「んなわけないだろ！確かに紗矢華のことは嫌いじゃないが深
雪とカナリアのことだってちゃんと好きだぞ」

オレがそう言うときつきまで寒かった教室内が一気に温まった

深雪「そ、そんな…//蓮夜さん、こんな人前で…私のこと愛し
てるだなんて…//」

カナリア「もう//蓮ちゃんたら//正直者なんだから//

／／えへへ／／／

深雪とカナリアは2人して急に両頬に手を当て嬉しがりだした

その日の授業中2人はずっとご機嫌でクラスの男子（達也と十六夜以外）からはずっと睨まれていた

第39話

―放課後―

今日の授業がすべて終わりオレは今雪菜と紗矢華と一緒にオカルト研究部に来ている。そこにはイリナの姿もあつた

ゼノヴィア「元気そうで何よりだ」

アーシア「また会えて嬉しいです」

イリナ「私もよ！アーシアさん、ゼノヴィア！」

イリナはそう言って2人に抱きついた。しかし

アーシア「きゃっ！」

ゼノヴィア「うわっ！」

イリナ「どうしたの？」

ゼノヴィア「君の胸に下げた十字架が…」

アーシア「チクチクして…」

イリナ「あ、そっか。悪魔は十字架ダメなのよね。ごめんなさい」

悪魔にとって十字架は目にしたくないものベストスリーには入る
だろ

ギヤスパ「あの人って教会側ですよね？」

祐斗「うん。どうしてこの学校に…」

一誠「それに蓮夜？なんでもう1人の転校生がここにいるんだ？」

蓮夜「リアス達がきたら話すよ」

やはり紗矢華がここにいるのは不思議なようで一誠が聞いてきた

そこへ朱乃を連れてリアスが部室にやってきた

リアス「みんな揃ってるわね。紫藤 イリナさん、あなたの来訪を

歓迎するわ」

イリナ「リアスさん。あぁリアス部長、そしてみなさん。よろしく

お願いしま〜す」

一誠「部長、これって…」

アザゼル「オレは知らないって言ったんだ」

一誠の質問に答えながらアザゼルが現れた

一誠「アザゼル先生」

アザゼル「禍の団という敵対組織がある以上墮天使と悪魔でここを守るんじやバランスが悪かろうとミカエルが律儀に寄越してきたのさ」

祐斗「同盟を結んだわけですし」

朱乃「断るわけにはいきませんわね」

イリナ「ミカエル様の祝福を受けて転生天使となった私がいればさぞ心強いことでしょう。アーメン♪」

自分で言うんだな…

ゼノヴィア「人間が天使になれるなんて、私も驚いたよ」

アザゼル「神の消滅で天使が生まれなくなったからな。悪魔や墮天使が用いてた技術を応用したんだろ」

イリナ「カードに習った編成でK（キング）が率いるA（エース）からQ（クイーン）の1人にこの私も選ばれたの」

祐斗「なるほど。こちらはチェスでそっちはトランプということか」

アーシア「どれで、イリナさんはどの札なんですか？」

イリナ「よくぞ聞いてくれました。私はエースよ。ミカエル様のエースという光栄な配置をいただいたの。ああ！もう死んでもいい！ミカエル様〜」

アーシア「今のイリナさんの人生の糧はミカエル様なんですわ」

ゼノヴィア「ああ、主を失っても救いはあるのさ。私達同様にね」

アーシア「はい」

いい話なんだろうけど、その主の代行をしてるのはうちのジブリールなんだけどな…まあ特にこれといってすることはないんだけどリアス「それで蓮夜。その子の紹介をしてもらえるかしら？」

蓮夜「ん？ああ、そうだな。紗矢華」

紗矢華「ええ。初めまして、煌坂 紗矢華よ。そこそことそこの男以外はよろしく」

紗矢華はそう言いながら一誠と祐斗とアザゼルを指差す

リアス「どういうことかしら…？あまり私の下僕を侮辱されたくない

いのだけれど…」

蓮夜「悪いな。こいつは根っからの男嫌いだな。マジで近づかない方がいいかもしれん。それに紗矢華は呪詛と暗殺の専門家で雪菜よりも実力は上だ」

朱乃「あらあら」

祐斗「本当なのかい…?」

雪菜「はい」

祐斗は信じられないとも言いたげな表情で雪菜に聞く

蓮夜「紗矢華、あれ出して」

紗矢華「わかったわ」

オレの指示を聞いた紗矢華は目を閉じ手を少し前に出す。そこに一本の剣が出現した。その瞬間部屋の中にいるやつら全員の色が悪くなった

一誠「なあ蓮夜。気のせいかな…?その剣から雪菜ちゃんの持ってた槍と同じくらいよくない感じがするんだが…」

蓮夜「それもそのはずだ。能力はほとんど一緒だ。悪魔、堕天使、天使の全てに有効な武器だ。それに加えて何個か別の能力もある」

オレはリアス、アザゼル、イリナの順に見ながら紗矢華の出した武器の説明をした

蓮夜「だが安心しろ。変なことさえしなければ害はない」

紗矢華「なによ!その言い方!私は害虫じゃないのよ!」

蓮夜「…ああ、悪かったよ。あ、そうだ。雪菜」

雪菜「はい?」

蓮夜「ちよつとおいで」

雪菜「?」

オレは手でこいこいとやりながら雪菜を自分の元に呼んだ。呼ばれた雪菜はなぜ呼ばれたか全くわかっていないみたいだ

オレの元に来た雪菜の頭に手を置く

雪菜「く!／／／」

雪菜は突然のことに声が出なくなっている。そのとき

紗矢華「雪菜に気安く触るなあああ!」

紗矢華が持っていた剣で襲いかかってきた。オレはそれを親指と人差し指で挟んで止めた

蓮夜「こんな風にこいつは雪菜のことを溺愛してるんだ。だから今のオレみたいに無闇に雪菜に何かすると、もれなく紗矢華が襲ってくるから気をつけてな」

一同『コクツ』

蓮夜「悪かったな。いきなり頭撫でて」

みんなが頷いたのを確認してからオレは雪菜の頭から手を離れた

雪菜「あ…」

蓮夜「ん？どうした？」

雪菜「…い、いえ！／＼／＼」

心なしか雪菜の顔が赤い気がするが気のせいかな

蓮夜「紗矢華ももういいだろ」

紗矢華「ふん！」

逆に紗矢華の機嫌が悪くなってしまった

蓮夜「はあ…てなわけでオレの大事な仲間の煌坂 紗矢華だ。みんな仲良くしてやってくれ」

リアス「え、ええ…さつきは酷いことを言っでごめんなさいね。部長のリアス・グレモリーよ。煌坂 紗矢華さん、あなたを歓迎するわ」
リアスと紗矢華は握手をしてその日は解散となった

オレは先に紗矢華を帰らせてから、約束であった雪菜と商店街へ出た

蓮夜「さて、今日は何食べたい？」

雪菜「え、付き合っただけって夕飯の買い物ですか…？」

蓮夜「ああ。なんかダメだったか？」

雪菜「いいえ！」

なぜか少しご機嫌斜めになってしまった

その後なんとか機嫌を治してもらいたいと思ってどうしたらいいか考えていると、クレープで手を打ってくれた

蓮夜「(ん?) 雪菜…」

雪菜「はい…これは兵藤先輩とアルジエント先輩。それともう一つ

悪魔の気配が…」

蓮夜「ああ。行ってみよう」

オレ達はその気配がする方へ向かってみると、そこには予想通り一誠とアーシア、そして若い悪魔の姿があった

オレと雪菜は交差点の角に姿を隠して見ていたがその悪魔がアーシアの前に片膝をつきアーシアの手をとってその甲にキスした。どんな関係なんだろうな

「家」

蓮夜「ただいま」

雪菜「ただいま帰りました」

レム「お帰りなさい」

家に帰るとレムが出迎えてくれた

蓮夜「荷物置いたらすぐ行くから待っていてくれ」

そう行つて靴を脱ごうと下を向いたら、知らない靴がそこにあつた

蓮夜「誰か客か？」

レム「ええ、その…お客様というか、なんとというか…」

蓮夜「どうしたんだよ」

とりあえずオレは自分の部屋に行く前にリビングに寄つた

リビングのドアを開けるとソファの周りにみんなが集まっていた

蓮夜「どうしたんだ？」

ユウキ「あ、蓮夜。おかえり」

蓮夜「ただいま」ナデナデ

ユウキ「えへへ」

ユウキがオレの方を向いてそう言ってくれたので一応頭を撫でておいた。それから集まりの中心を見てみると…

蓮夜「ロセ…？」

そこには体育座りをして涙を流しているロスヴァイセがいた

蓮夜「どうしたんだ？お前。オーデインと一緒に帰ったんじゃない？」

ロセ「うううう…」

クロメ「なんか置いてかれちゃったみたい」

蓮夜「マジか」

ロセ「ひどい！こんなにもオーディン様のために働いている私を置いて帰ってしまわれるなんて！」

ティナ「そのうちお迎えが来るんじゃない？」

ロセ「どうせおっパブとやらで頭がいつぱいなんだわ！どうせ私は仕事ができない女よ！彼氏いない歴〓年齢ですよ！」

大の大人がまるで親と逸れた子供のように泣き始める

シエーレ「あらあらどうしましょう」

犬千代「蓮夜、どうする？」

蓮夜「どうするって、追い出すわけにもいかないだろ」

ここで追い出したならそれこそ屑な人間になってしまう。あ、オレ悪魔だった：まあそんなことはどうでもいい

蓮夜「ロセ、オーディンが来るまでここにいろよ」

ロセ「…いいんですか？」

蓮夜「ああ。部屋もまだあるから大丈夫だ」

ロセ「うううう：ありがとうございます」

こうして紗矢華だけのはずが、また1人の住人が増えた

蓮夜「さて、夕飯の支度するからみんな解散。深雪、悪いんだがロセに部屋まで案内してやってくれ」

深雪「かしこまりました」

蓮夜「ありがとな」ナデナデ

深雪「い、いえ／＼／」

ロセのことを深雪に任せたオレは一度部屋に戻るのも面倒になったので、そのままキッチンに入った

レム「お手伝いしますね」

蓮夜「ああ、頼むよ」

レム「はい。今日は何にしたんですか？」

蓮夜「今日は紗矢華の歓迎も含めて中華にする」

レム「いいと思います。さすがは蓮夜くんです」

蓮夜「褒めても何も出ないぞ」

レム「そうなんですか？」

蓮夜「…これでいいか？」 ナデナデ

レム「はい♡」

いきなり上機嫌になったレムと夕飯を作り、その後紗矢華とロセを
合わせてみんなでの夕飯を楽しんだ

ちなみに朱乃と小猫は一誠の家でイリナの歓迎会をやるらしいか
ら今日はこっちはいない

第40話

ロセと紗矢華がうちに住むことになった次の日、オレはいつも通りに部屋で目が覚めた。まあ誰かがオレのベッドに潜り込んでいるのは日常茶飯事なので驚かないが、今日はなんか多くね？

延珠「…んあ、蓮夜あ…」

既にオレの顔を抱き枕の代わりにして寝ている延珠がいる。とりあえず延珠をどかして布団をめくると

翠「…すう…すう……」

弓月「…zzz……」

夏世「…すう、んん…すう…」

小比奈「…蓮夜…斬る…」

ティナ「…お兄さん……」

子供達が勢揃いで眠っていた。小比奈は物騒すぎる…

蓮夜「オレ、捕まるんじやね…？」

コンコン、ガチャ

木更「蓮夜くん、入るわね」

そこへ木更が一応声はかけてるんだがこっちの返事を聞かずに入ってきた

蓮夜「それ入る前に言えよ」

木更「細かいこと気にしないの。さて、みんなを迎えに来ました」

蓮夜「ああ、ほれ起きろー」

オレはみんなに寝ているみんなに声をかける

延珠「…蓮夜、おはよう…なのだ…」

延珠は目を擦りながら体を起こす

翠「…おはようございます」

ティナ「…おはようございます、お兄さん」

翠とティナはまだ眠いのか目を半開きで起きた

夏世「あ、蓮夜さん。おはようございます」

夏世はさすがで、みんなよりもはつきりと起きた

弓月「…zzzz…」

小比奈「…zzzz…」

だが弓月と小比奈はまだ起きない

蓮夜「おい弓月、小比奈。起きな」

オレは2人の体を揺らす

弓月「…ん、ふあく…あ、おっはよく」

小比奈「…ん……」

なんとか2人も起きてくれた

蓮夜「てかなんでみんながいるんだよ」

木更「この辺に事務所を移転したの。で、蓮夜くんの家が近くだ

よって言ったらみんなが行くって」

蓮夜「なんでオレが寝てから来るんだよ」

ティナ「私の部屋でみんなであそんでたら、いつの間にかいい時間になってしまっ……」

夏世「延珠さんの提案で、どうせだったら蓮夜さんと寝ようってことになりまして」

蓮夜「そういうことね」

まあティナも近くに友達が来たことで嬉しかったんだろうな

その後はみんなで朝食を取った。その場で木更から延珠達がティナの学校へ行くことになったのを聞かされた

―学校―

イリナ「はいは〜い。私、借りレースに出ま〜す」

カナリア「あ、私も〜」

桐生「決まりね」

今オレのクラスでは今度やる体育祭の競技に誰が出るかを決めてるところだ。今はイリナとカナリアが借り物レースに立候補して実行委員である桐生が黒板書いている

ちなみにオレは達也と十六夜と一緒にリレーに強制的に決められ

た。深雪はクラスの男子全員から『うちのクラスの女神にそんな労働はさせられない!』となんの競技にも選ばれなかった。しかしそれではかわいそうということになり、競技前にその競技をするやつに「がんばれ」を言う係というわけのわからない係になってしまった

桐生「じゃあ次は二人三脚」

最後に二人三脚を決めるようだ

桐生「兵藤、脇のどこ破けてる」

一誠「マジか？」

一誠は〃手を上げて〃自分の脇のどころを確認する

一誠「どこも破けてなんか…」

桐生「はい決まりー」

一誠「あん？」

桐生は二人三脚のところに兵藤と書いた

一誠「あ!騙したな桐生!」

桐生「あんたは二人三脚よ。あいては…」

一誠「ん?アーシア?」

一誠が振り向いたところには一誠に決まったのと同時に手をちよ

こんとあげたアーシアがいた

桐生「決まりね」

桐生が二人三脚の最後のところにアーシアの名前を書いて選出の時

間は終了となった

この日オレ達は体育の時間があるんだが、まあ予想通り体育祭の練習となった

イリナ「勝負よ、ゼノヴィア」

ゼノヴィア「臨むところだ!」

あるところではイリナとゼノヴィアが短距離の勝負をしていたり

達也「十六夜」

十六夜「ヤハハ」

またあるところでは達也と十六夜がめちやくちや力を抑えてバト

ン交換の練習をしたりしていた

しかしそんな中に

松田「しかしあんなに高速で動かれては…」

一誠「うむ！おっぱいの動きが把握しづらい！」

元浜「やはり運動のときの揺れはは適度な揺れが一番だ」

松田「見てみるよ」

その視線の先には

松田「やはりいいなあ。大きいのも」

元浜「ちようどいいのも」

一誠「目が離せないぜ！」

松田、元浜「体操着最高！」

ガシツ！

蓮夜「へえ：お前ら、覚悟はいいな：？」

達也「懲りないようだな：」

達也は元浜の方を、オレは一誠と松田の方をそれぞれ掴む

3バカ『ひっ!!!』

蓮夜「ちよつと向こうに行こうか：」

達也「拒否権はないぞ：」

オレと達也は3バカを人の目につかない校舎裏に連れて行き、特別指導を行った

↓放課後↓

今日の放課後はアンナを連れてオカルト研究部を訪れた

蓮夜「デイオドラ・アスタロト？」

一誠「ああ、この頃アーシアに手紙やらプレゼントやらを送りつけてくる迷惑な若手悪魔だ」

蓮夜「なんでアーシアに？」

リアス「以前からアーシアのことを想っていたらしくて、この前会って告白されたらしいのよ」

一誠「それでオレは今朝アーシアがお嫁に行く夢を見ちやうし！」
蓮夜「そんな大袈裟な」

一誠はその夢を思い出したからなのか、大泣きし始めた

一誠「うっせえ！もしアンナちゃんがお嫁に行っちゃったらお前は
何も思わないのか!?!」

蓮夜「っ！」

一誠がオレの膝の上に乗っているアンナを見ながらオレに言ってきた。オレはそこにあるアンナの姿を見て想像する…

蓮夜「ガハッ！」

一誠「なっ!?!わかつただろう!?!」

蓮夜「…悪かった、一誠。これは…かなりキツイな…」

オレは久々に大ダメージを負った。そこでアンナがオレの腕をとって自分の体を包み込むように移動させた

アンナ「…私は、どこにもいかない。蓮夜のいるところが私の居場所だから」

蓮夜「アンナ…」

オレはその言葉に心を打たれ、泣きそうになるのをグツと堪えてアンナの頭を撫でる

イリナ「いい話ね」

朱乃「あらあら、アンナちゃんはそれほど蓮夜くんのことを想っているんですね。なんだか妬いてしまいますわ」

小猫「さすがは兄様です」

アンナは恥ずかしくなってしまうたのかオレの片方のもう片方の腕に顔を埋めてしまった。ホント感情豊かになったな

―夜―

夕飯も済ませ風呂にも入って後は寝るだけってところに悪魔回線の連絡が入った

蓮夜「もしもし」

『私だ。サーゼクスだ』

蓮夜「どうした？こんな時間に」

サーゼクス『すまないね。実はレイティングゲームのことで相談があつてね』

蓮夜「ああ夏休み中にやろうとしていたことか？」

サーゼクス『そうだ。あのときはロキの襲来で開催は中止になってしまったが、全員の希望で近々開催されることになった』

蓮夜「いいじゃねえか。それで相談てのは？」

サーゼクス『君にも参加してもらいたくてね』

蓮夜「それはいいけどよ。本気か？」

実際若手悪魔とオレ達じゃ一方的な試合になっちまうぞ

サーゼクス『ここからが相談なんだ。これから戦争は起こさせないつもりだが、禍の団がいる限り安心はできない。その日のための準備が必要だ』

蓮夜「何が言いたんだよ」

サーゼクス『確かに一人一人の力は重要だが、私は〃チームワークも重要だと考えている』

蓮夜「…まさか」

サーゼクス『そのまさかだ。君には〃若手悪魔全員で組んだチームの相手をしてもらいたいんだ』

そうきたか。確かに悪い考えではねえな。さすがサーゼクスか

蓮夜「こっちは別にいいんだが、若手どものやつらは納得するのかわ？」

サーゼクス『その辺をわからせる意味もあるんだ』

蓮夜「…OKだ。その役割引き受けた」

サーゼクス『ありがとう。詳細は追って連絡する』

連絡「わかった」

オレはそこで通信を切った

まあいくら若手悪魔が全員いるつつつてもまだまだオレらには及ばない。何個かの制限はつくだろうな。オレはそんなことを考えながら内心ワクワクしていた

―翌日の放課後―

今日も朝から体育祭の練習があったが、正直逆に加減する方が難しい…

そして放課後になりオレは帰ろうとしていたが、急にオカルト研究部の部室に魔力を感じ、そこからこの前やつ、ディオドラ・アスタロトの気配を感じた

蓮夜「みんな、先に帰っててくれ」

レム「わかりました」

クロメ「私と一緒に行く」

クロメはオレの隣に来てそう言った

蓮夜「じゃあ頼む」

クロメ「うん」

オレはクロメと共にオカルト研究部の部室に転移した

蓮夜「よーす」

一誠「蓮夜！」

オレが部室に転移すると一誠がオレを呼んだ

ディオドラ「おや、邪魔が入ってしまったね。今日はこれです。けれど僕は諦めません」

ディオドラはそう言いながらアジアの前に跪き手を取る。この前見たときと同じように

ディオドラ「僕達の出会いは運命だ。世界の誰もが僕達の出会いを否定しても僕はそれを乗り越えてみせる」

オレはそこでクロメにアイコンタクトをする。クロメはオレの言いたいことがわかったのか神器を出してそれを構えた

ディオドラ「愛しているよ。アジア」

一誠「アジアに何しやがる！」
パシッ

ディオドラがまたアーシアの手の甲にキスをする前に一誠が彼の肩を抑えてそれを止めた。ディオドラは一誠の手が肩に触れた瞬間それを払った

ディオドラ「話してくれないか。薄汚いドラゴンくんに触れられるのは、ちよつと…」

ジャキン！

ディオドラ「っ！」

ディオドラはいきなり出てきた刀に驚いて怯んだ

クロメ「無能なヒヨっ子悪魔がいつまでもここにいられるのも、ちよつと…」

ディオドラ「クッ！」

クロメはディオドラの口調を真似して言うど本人は何も抵抗できなのが悔しそうにただ睨んでくるだけだった

蓮夜「クロメ。もういいぞ。早くしないとそいつチビっちまう」

クロメ「それもそうだね」

クロメは刀を話して鞘に収めた

アーシア「一誠さんにそんなひどいこと、やめてください」

ディオドラ「そうか、理解した。赤龍帝、兵藤 一誠。次のゲームで僕は君を倒すよ。そうしたら、アーシアは僕の愛に応えてほしい」

まだ懲りねえかよ…

一誠「負けるわけねえだろ！ディオドラ・アスタロト！お前が言った薄汚いって言ったドラゴンの力、存分に見せてやるさー！」

ディオドラ「どうだかね」

一誠はディオドラを睨みながら宣言した。当の本人は軽く流しているようだが

蓮夜「ええつと、ヒルドラ・ドロドロシユラバくんだったけ？」

ディオドラ「ディオドラ・アスタロトだ」

蓮夜「なんでもいいよ。用が終わったんら帰ってくんない？早くしないと…」

オレはそこで一気に威圧の気をぶつける

蓮夜「…消すぞ」

ディオドラ「っ!!!」

ディオドラは焦って魔法陣を展開させて転移していった
その後リアスに感謝の言葉をかけられて部屋を出た

その夜、町の中で一誠と小猫の近くでヴァーリの気配がしたがすぐ消えたのでほっとくことにした

第41話

今日はリアス達のレイティングゲーム当日。初戦はあのデイオドラ・アスタロトらしい。オレ達もその観戦に来たのだが、何かがおかしい：ゲームが始まるのに会場に両者とも来ない。それに何やらイヤな気配がする

蓮夜「みんな。一応用意しといてくれ」

オレの言葉にみんなは頷き、それぞれ自分の神器を出したそれから数分しないうちに空には幾多の魔法陣が出現した

蓮夜「あの紋章は…」

雪菜「はい。あれは禍の団に属する旧魔王派の悪魔達です」

蓮夜「…そ、そうなのか」

紗矢華「あなた、わかってたんじゃないの？」

蓮夜「いや、全然知らなかった…」

紗矢華「あなたねー!」

一同『はあ…』

そういうことの知識はほとんど皆無なオレにみんなからため息が送られた

蓮夜「今度も結構な数いるな」

十六夜「いい運動にはなるがな」

タツマキ「こんなの私1人で十分よ!」

十六夜とタツマキはやる気満々でだが、ここにこいつらがいるってことは他のどこもいるだろうな

蓮夜「オレ達は移動するぞ。みんな、*〴〵*呼んで*〴〵*いいぞ」

みんなはオレの言いたいことがわかったのかそれぞれその名前を呼ぶ

蓮夜「レア、ミル、ルカ」

ユウキ「おいで、スター!」

雪菜「アイズさん、お願いします」

達也「アカ」

深雪「シユーラさん」

黒歌「ナル〜」

クロメ「ゲンさん」

シエーレ「タマ、来てください」

レム「シャルさん」

アンナ「クレア：」

ティナ「ティアさん、お願いします」

犬千代「：ボルス」

カナリア「ラテイちゃ〜ん」

それぞれが自分の使い魔を呼ぶとその声に応じて大きな魔法陣が出現し、そこからみんなが姿を現した

ルカ『うわー、またいつぱいいるねー』

ゲン『ほお、久々に暴れられるというわけだな?』

クロメ「いや、ゲンさん達が本気で暴れたらそれこそ世界が滅んじゃうよ」

ボルス『承知している。そうならぬよう加減はする』

犬千代「よろしく」

ラテイ『ラテイはそんなことよりお兄ちゃんと遊びたい!』

フレア『ラテイ!お前はまたそうやって抜け駆けする!』

シユーラ『蓮夜さん!いくらラテイさんが一番年下だから甘やかしすぎですわ!』

蓮夜「なんでオレが怒られるんだよ。とりあえずここは頼んだ。終わったら各自戻っていいし、人の姿なら待っててくれても構わない」

使い魔一同『了解』

使い魔達はそれぞれ戦闘（もはや蹂躪?）を開始した。オレ達それを見て転移しようとしたんだが、そこにアザゼルから通信が入った

蓮夜「アザゼルか?」

アザゼル『あのドラゴン達は蓮夜達のか!』

蓮夜「そうだが。なんか急に出てきたからお願いしといた。なんかダメだったか?」

アザゼル『いや、そうではないんだが：今回はお前に頼らずに殲滅

しようと思ってたんだがな』

蓮夜「そうだったのか。だからオレには何の連絡もなかったんだな。なんか悪かったな」

アザゼル『いや、こちらとしては被害が少なくて済むからありがたい』

蓮夜「まああいつらなら10分しないで終わるから大丈夫だろ。オレ達はリアス達のところに行く。どうせあの、ああ…名前なんだっけ？」

ロセ「ディオドラ・アスタロトです」

蓮夜「そう、そのなんちゃらくんが絡んでんだろ？」

アザゼル『お前名前覚える気ないだろ…まあその通りだ。裏で禍の団と繋がっていやがった』

蓮夜「わかった」

オレはそこで通信を切ってみんなと転移した

転移した先にはさっきの場所と同じぐらいの旧魔王派の悪魔がいたが、その中で対抗している人物がいた

蓮夜「オーデイン」

ロセ「オーデイン様！」

オーデイン「お主ら、来てしまったか…」

蓮夜「ああ…なんかオレの力は借りないやらなんたらか」

そこには北欧の主神、オーデインがいてオレの顔を見るやしかめっ面をした

オーデイン「まあその話は後じゃ。力は弱いがなんせ数が多くてな。ちと力を貸せい」

蓮夜「ああ。みんな」

みんなは戦闘を開始した。オレはいつも通りその場に座り込み、横にはティナがライフルを構える。オレの後ろにはカナリアが立ち歌い始めた。オレはティナの頭に手を乗せ戦況を観察する。そしてそ

れと同時にリアス達の戦いも観察する

こつちの戦闘は順調に進んでいるのでリアス達の戦況を見ていると、一誠、小猫、ギヤスパ、ゼノヴィアのチームとリアス、朱乃、祐斗のチームで別れて戦っていた。一誠の方は一誠があのだレスなんたらつていうハレンチ極まりない必殺技を使ったが相手には効かなかった。オレの視界はそこで遮られた

レム「れ、蓮夜くんは…見ちゃダメです…／＼見るなら、その…レムので…／＼」

蓮夜「ああ、とりあえず落ち着けレム。なんか変なこと言ってるから」

オレの目を手で覆ってきたのはレムだった。レム自身も恥ずかしいのか言っている言葉が途切れ途切れになっている

レムが手を離れた時には一誠達の戦闘は終わっていた。しかしリアス達の方は苦戦を強いられているように見える。そこにまた通信が入った。今度は小猫だった

蓮夜「小猫か。どうした？戦闘中だろ？」

小猫『兄様、お願いがあります』

蓮夜「ん？」

オレは小猫から言われたことを実行するため通信を切つてすぐに今度は朱乃に通信を繋いだ

蓮夜「朱乃か？」

朱乃『蓮夜くん？悪いのですが今は戦闘中で…』

蓮夜「ああ…そいつらに勝つたら今度一緒に出かけよう」

ホントにこんなことで戦況が変わるのか？と思いつながら一応言つてみた。すると

ドガアン！

朱乃の魔力が一気に増大した。それはリアスも同じくで、2人の魔力でその戦場である神殿が崩壊してしまった

女性陣『（ジー）』

蓮夜「…えっ」

その光景に驚きながら振り向くと、既に戦闘を終わらせていた女性

陣はオレを睨んでいた

蓮夜「だ、だって小猫が泣きそうな声でお願いしてきたから…」

女性陣『(ジー)』

蓮夜「…すみませんでした」

オレは最高の謝罪、土下座をして謝った

一応みんなの許しを得て、今度はみんなでリアス達のその後を観察する

リアス達はディオドラの元へたどり着き、今は禁手火した一誠がディオドラを殴りつけているところだった。しかしディオドラは魔法障壁を発動し、一誠は力を増加しながらその壁を殴りつけているが、壊すには少し足りないようだった

蓮夜「達也、頼む」

達也「わかった」

達也は銃型の神器をその壁の方に向かって構えた。そして引き金を引くとその壁は綺麗さっぱりと魔法粒子まで「分解」された

壁が消えたことにより一誠の拳はディオドラの右肩を捉えた。おそらく右腕はいっただろう。その後ディオドラは戦闘不能となり、アーシアは解放された

しかしここで予期せぬ惨事が起こった。戦闘が終わりアーシアが祈りを捧げると、一筋の光と共にアーシアは消えてしまった

蓮夜「どういうことだ…」

そのことには遠くから見ているだけのオレには理解できなかった。オレがどうしてか考えているとリアス達の前に1人の悪魔が現れた

蓮夜「ん？おいおい、ここでお出ましかよ…」

オレはそこである気配に気づく

蓮夜「みんな、ここを頼む。もし一誠があれになったら、雪菜と紗矢華で解いてやってくれ」

雪菜「わかりました」

紗矢華「わかったわ」

オレはそれだけ言ってその気配の元へ移動した

「蓮夜か…久しい…」

蓮夜「ああ、久しぶりだな。〃オーフィス〃」

そこには禍の団のトップである無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）のオーフィスだった。またそこにはサーゼクスとアザゼルも来ていた

蓮夜「お前はまだグレードレッドとケンカしてんのか？」

オーフィス「…ケンカ、ではない…我は静寂を取り戻すだけ」

蓮夜「だからなんでお前はそんな静寂が好きなんだよ…」

っ！これは…

蓮夜「ちっ！なっちまつたか…」

サーゼクス「なにがだね？」

蓮夜「一誠が覇龍（ジャガー・ノート・ドライブ）になった」

アザゼル「なにつ！」

サーゼクス「本当か!？」

蓮夜「まあ大丈夫だろ。向こうにはみんながいるし、それに助っ人が来ているみたいだからな」

アザゼルとサーゼクスは驚いているが、オレ自身はそんなに心配はしていないかった

蓮夜「さてオーフィス。お前は禍の団を抜ける気はないのか？」

オーフィス「…我はグレードレッドを倒して…静寂を…」

蓮夜「それは聞いた。だがお前は静寂しか知らないからそれしか考えられないんだよ」

オーフィス「…」

オレはこの機にオーフィスを説得しようと試みる

蓮夜「静寂以外も体験してみればいいんじゃないか？」

オーフィス「…どうすればいい」

蓮夜「ん…とりあえずうちに来るか？あとはそれから考えればいいさ」

オーフィス「…わかった。我、禍の団抜ける…」

蓮夜「そうか」

オーフィスはわかってくれた。そこへ次元の狭間から珍客が現れた

サーゼクス「赤龍真帝、グレードレッド！」

アザゼル「まさかこんなところで拝めるとはな」

グレードレッドはこっちに気づいてはいるもののそのまま同じ速度で飛んでいる

蓮夜「あの野郎、オレらは無視か」

オーフィス「…グレードレッド、久しい…」

グレードレッドはそのまま何も言わずに次元の狭間へ帰っていった

その後オレはオーフィスを連れてリアス達の元へ戻った。そこにはヴァーリ、美猴、アーサーもいてオーフィスが禍の団を辞めると言ったら、反対のやつが襲いに行くかもしれないと言われたので、返り討ちにすると返しておいた

一誠は覇龍になったがすぐ雪菜と紗矢華の神器のおかげで元に戻れたようだ。アーシアもヴァーリ達がたまたま次元の狭間で見つけてくれたらしい

一誠はいきなりの覇龍化で魔力も底を尽きたらしく、今は気絶している。カナリアが回復させてくれたおかげで魔力やらなにやらは回復した

とりあえずその場は収まったので帰ることにした。しかしロセがまた置いてかれてしまった…

ロセ「うううう…ひどい、オーデイン様ったらひどい。私、あんなに頑張ったのに…また私をお忘れになってお帰りになるなんて…」

深雪「またそのうちお迎えが…」

ロセ「ダメよ！主神が帰っているのに護衛である私が後からのこのこと戻ったらどのツラ下げて戻って来たって怒られて左遷されてし

まうわ！これはリストラよ…」
オーデインもホントに適当だな…

第42話

デイトドラのこともあって少し時間が空いてレイティングゲームは再開された。やはり多くの者が予想した通り、バアル家の次期当主であるサイラオーグ・バアルチームが一番の勝ち星であるらしい。リアス達も頑張っているとは思うのだが、やはり経験不足、一回の戦いで満足してしまつてその後の油断を突かれたりして苦戦していた

しかしながら現魔王の2人の妹であるリアス・グレモリーとソーナ・シトリーのチームの対戦はとても見ものだった。特に赤龍帝である一誠に果敢に挑んでいった匙には魔王からも拍手があがっていた。最後は一誠に軍配があがったのだが匙の印象は悪魔が全体に残つただろう

さて、オレ達のレイティングゲームなのだが予定していた日が駒王学園の体育祭の日と被つてしまったので、体育祭が終わったあとにやることとなった。しかし既にオレ達に課される制限の内容は伝えられていた。一、オレは眷獣の使用を禁止。二、悪魔の駒の能力の禁止（例えば騎士ならスピード強化なしなど）。三、魔法は魔王レベルまでおさえること。四、開始30分は攻撃してはいけない。五、全員使い魔禁止。そして若手悪魔の1人であるデイトドラが消されてしまったことにより、特例でイリナが参加することとなった

ー体育祭ー

今日はいよいよ体育祭当日。みんながこれまで頑張ってきた集大成だ。そして今年は5年に一度の初等部、中等部、高等部合わせて行われる大体育祭らしい。初めて知った：

あ、ちなみにロセが駒王学園の教師になった。ちなみにちなみにオレ達のクラスの公民を担当するみたいだ

さて、開会式と準備体操が終わり種目が始まるみたいだ。最初は障害物競争だったかな。100メートルコースにハードルやらネット

やらが置かれていった。そしてその種目に参加する選手が呼ばれ生徒が出ていった

カナリア「あ！蓮ちゃん蓮ちゃん、ちよちよだよー！」

蓮夜「ああ、そうみたいだな」

オレ達の目線の先には周りの初等部生とは全然雰囲気が違う蓮夜がいる。オレはカナリアと一緒に手を振るとそれに気づいた犬千代は軽く頷いた。手を振るのは恥ずかしいかな。スタートの合図とともに犬千代は飛び出し軽々と障害を乗り越え堂々の一位を獲った

蓮夜「さすがだな」

犬千代は一位の旗の前に立ちオレの方を向いてピースサインをしてきた

障害物競争が終わり次は100m（初等部は70m）走になった。この競技には初等部からは延珠と弓月が、高等部からはクロメユウキが参加しているみたいだ。うちのクラスからはゼノヴィアとイリナが参加していた。ユウキなんて並んでるときにオレにピョンピョンジャンプしながら手を振ってきたので係の人に注意されていた。まあ言うまでもなく2人とも一位になっていた

その後男子による組体操や女子によるダンスで午前の部は終了し、お昼時間となった

延珠「蓮夜！妾の活躍見てくれたか!？」

蓮夜「ああ、見てたよ。おめでとう」ナデナデ

延珠「〜♪」

弓月「私はー？」

蓮夜「もちろん見てたさ。すごかったぞ」ナデナデ

弓月「〜／／／」

今日は初等部や中等部も一緒だからみんなが集まってご飯を食べている。周りの男どもからは殺気立った視線で見られているが気にしない

蓮夜「それにしても雪菜、どうしたんだその格好？レムも」

雪菜「み、見ないでください！／／／／」

レム「〜！／／／」

レムと雪菜は体操服ではなくチアの服を着ていた

レム「えつと…クラスの男子全員から土下座で頼まれてしまつて…

／／／

雪菜「あんなことされて頼まれたら、断れなくて…」

蓮夜「土下座つて…でも2人とも似合ってるぞ」

雪菜「な、なに言ってるんですか！／／／」

レム「…恥ずかしいです／／／」

普段こんな格好はしなのでかなり恥ずかしいらしいな

ユウキ「蓮夜ー、ボク達にはー？」

クロメ「何もないのー？」

犬千代「…鼻真、よくない」

蓮夜「えつ？あ、ああ…そうだな」

オレはなぜかぷくつと頬を膨らましているユウキと半目でこつちを見てくるクロメと犬千代の頭も撫でてやった

お昼時間も終わり午後の部に突入した。午後の1発目は借り物競争だ。最初は初等部なんだがアンナとティナ、翠や夏世が、中等部からはレム、高等部からはユウキとイリナ、カナリア、そしてシエーレが参加する

最初に初等部から始まり、その最初に出たのは夏世だった。オレはどんなお題だろうと思いつながら見ていると、夏世は真つ直ぐこつちへ来た

夏世「蓮夜さん。一緒に来てもらえますか？」

蓮夜「ん？オレか？」

オレはそう言われて夏世と一緒にゴールした

蓮夜「お題は何だったんだ？」

夏世「これです」

夏世が見せてくれた紙には『頼りになる人』と書かれていた

蓮夜「へえ、こんなのなのか。ありがとな」ナデナデ

夏世「く♪こちらこそ」

オレはそのお題に嬉しく思つて夏世の頭を撫でて自分の席に戻つた

次はティナだ。と思つたらティナもこつちに来た
ティナ「お兄さん、来てください」

蓮夜「またか？」

オレは今度はティナのお題にヒットしたらしい

蓮夜「ティナのお題は何だったんだ？」

ティナ「私のはこれでした」

ティナが引いた紙には『集中できるもの』と書いてあった

蓮夜「これ人でもいいのか」

ティナ「わかりません。でも私にとってお兄さんの隣が一番に集中
できるので／＼／＼」

蓮夜「そうか」

そういえば戦闘のときにオレの隣にいるのはそういう理由だった
な

次の参加者はアンナだ。アンナもオレの方にトテトテと小走り
やってきた

アンナ「蓮夜」

蓮夜「はいよ」

オレはもう何を言われるかわかったのですぐ席を立った

蓮夜「で、アンナのお題は？」

アンナ「…」

アンナは無言で紙を開いた。そこには『大切なもの（人）』と書かれ
ていた

蓮夜「アンナ…」

アンナ「私にとつてのこれは蓮夜だから」

蓮夜「そっか。ありがとう」ナデナデ

アンナ「…うん」

オレはもう嬉しくて手が勝手にアンナの頭を撫でていた

次は翠だ。スタートの合図とともにお題の紙の置いてある台に駆
け出し、1枚の紙を取りそれを広げる。そこで翠はその場で固まって
しまった。他の子は各々借り物を借りようと右往左往しているが翠
は全然動かない。もしかや体調でも悪いのかと思つたら、翠もオレの方

にやってきた

翠「れ、蓮夜…さん…あの、一緒に…来て、ください…」

蓮夜「お、おう。大丈夫か？」

翠「大丈夫です」

翠はオレの顔を見ようとはしないでオレの手を取り駆け出した

蓮夜「翠、お題は何だったんだ？」

翠「ひやつ！え、あの…秘密、です…」

秘密にされてしまった。そんなに言いふらしてはいけないお題だったのかな…

初等部が終わり中等部の番となった。レムは2組目のときだった。そのレムもお題の紙を見た瞬間オレの方に来た

レム「蓮夜くん、お願いします」

蓮夜「なんかオレ率高くね…？」

オレはそうは言いつつもレムに手を引かれゴールした

レム「ありがとうございます」

蓮夜「いいよ。お題聞いてもいいか？」

レム「いいですよ」

レムはそう言って紙をオレに見せてきた。そこには『神崎 蓮夜先輩』…は？

蓮夜「なんでオレの名前が…？」

レム「蓮夜くんは中等部でも人気ですから。女子の実行委員の子が採用したんだと思います」

蓮夜「なんだよそれ…オレはそんな大層なやつじゃねえのにな」

レム「そんなことありません。蓮夜くんは永遠に『英雄』^{ヒーロー}です」

蓮夜「…ありがとな」ナデナデ

レム「♡」

まあそう言われて悪い気はしなかった。恥ずかしいけど…
そして高等部。初っ端はユウキ。わかるところが…

ユウキ「蓮夜ー！」

蓮夜「はいはい」

ユウキは一直線にこつちに来た

蓮夜「お題はなんだよ」

ユウキ「え？『好きな人』だよ？」

蓮夜「おまつ！悩んだりしないのかよ…」

ユウキ「なんで？ボクの好きなのは一生蓮夜だけだよ？もちろん家族のみんなも好きだけど」

こんな場所なのになに言ってるの？みたいな顔で言われた

蓮夜「まあありがとな」ナデナデ

ユウキ「えへへ♪」

なんかオレだけ何往復もしてるから、変に疲れてきた。いや実際は疲れてないんだけど精神の問題だ。しかしそれとは裏腹にカナリアは近づいてきた

カナリア「蓮ちゃん蓮ちゃん」

蓮夜「はあ…」

カナリア「ええ、ひどくなくい」

蓮夜「ああ：わりー」

オレはついたため息をしてしまった

蓮夜「で、カナリアは何のお題だったんだ？」

カナリア「これ♪」

カナリアが持っている紙には『寝るときにがあると安心するもの』とあった

蓮夜「これオレじゃなくていいだろ！」

カナリア「えー。だって蓮ちゃんがいる方がよく眠れるもん」

蓮夜「そういう問題じゃねえよ！しかもなんでそれがオレで通るんだよ…」

オレはどうなってんだこの学校とつづやきながらカナリアと席へ戻った

最後はシエーレだ。どうせオレでしょ？

シエーレ「蓮夜…」

ほら来た

シエーレ「…と深雪、達也、十六夜、カナリアも」

ん？今回はオレだけじゃなくてみんなもか？

シエーレはその後も各学年のオレの眷属達、しかも保護者席にいた
ジブリールと黒歌も呼んでみんなまでゴールした

蓮夜「みんな集まっちゃったな」

黒歌「私達もかにや？」

ジブリール「シエーレ様、いつたいたいと書かれていたのでござい
ますか？」

シエーレ「ん？これです」

そのお題を見た瞬間、オレ達はみんな心が暖かくなった。そこには
『家族』と書かれていた

シエーレ「ここにみんなが私の家族ですの」

シエーレは満面の笑みでそう言う。シエーレのおかげでその日の
体育祭は気持ちよく過ごすことができた